



東方三界黃龍伝 「巽風編」 (前編)

文・絵 小龍

表紙絵 MICK

目次

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	序章	リンクS	6
開戦	北の守護者	翳り	東海龍王家、今昔	ニッポンの神様	反目	宝物庫のラクガキ	東方軍大将	東海の至宝とは	九天玄女の場合	奏欽の場合	沙龍の場合			
155	147	136	126	112	92	78	64	55	46	37	24			
25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13		
珍客、二名	苛立ち	建御名方	意地	東方軍の内情	楊仁將軍	巽凜公主	キーワード	鎮江楼到着	景春の心	奏欽、離脱	rendez-vous	沙龍の選択		
302	294	286	274	260	252	244	231	221	210	201	182	168		

31	30	29	28	27	26
開明門の守護神	日本の神様	出雲の事情	いざ、東極山へ	景春の昔語り	パーティー結成

368	355	343	332	323	315
-----	-----	-----	-----	-----	-----

35	34	33	32
眠り姫の正体	景春の沙龍	神殿に待つ者	石壁塀ノ助の場合

414	402	391	383
-----	-----	-----	-----

主な登場人物

- シャロン
沙龍（甲斐馨）……主人公。黄龍の保持者。
- 木佐小次郎（真武君）……四方将神の一人。沙龍の親友。
- 奏欽……南海龍王。管弦府の長官も兼任する美女。
- 九雷……天界軍元帥。沙龍の恋人。
- 景春……新任の東方軍大将。天界一という剣技の持ち主。
- 陽輝……西方軍大将。九雷の親友。
- 王霊君……北方軍大将。身長二メートルを越す叩き上げの軍人。
- 九天玄女……崑崙防衛軍隊長。沙龍の良き協力者。
- 公務員……泰山府の職員だが、沙龍の配下として動いている中年。

序章 ランクス

暗闇の森に、不気味な風音が聞こえていた。

クリーチャーの咆哮が何百にも重なったような、空気を震わす多重音声のようにも聞こえる。

冥府には『危険宙域』と呼ばれる場所が幾つかある。どうやら、ここもそのひとつのようだ。

こういった強い瘴気が渦巻くエリアには、ベテランの死神は無闇に近付かないものだが、厄介なことに、冥府内の空間は常に動いている。

だから、図らずして向こうから災いが訪れてしまうことがあった。

(おかしいな……)

公務員はヒョロ長い脚を止め、冥府の宙域図を確認した。

手のひらサイズの立方体の宙域図は、鈍い光で現在地を示していたが、近所に『危険宙域』とマークされているものはない。

数時間前にダウンロードしてきた最新版なので、その数時間間に空域が色々変化したのかもしれない、と公務員は思ったが、それにしても変化が早すぎる。

『通常宙域』からいきなり『危険宙域』に変わるなどということは公務員が知る限りでは、前例がないはずだった。

念のために測定器で図ったら、瘴気の濃さは臨界点を突破していた。

(やべーな。引き返すか)

なんとなく、彷徨う魂魄体の気配がしたので、ここまで歩を進めてきたのだが、『危険宙域』にたどり着くとは、ついていない。

目の前には木々を渡すように黄色いテープが張られている。

これは、『危険宙域』が出現すると自動的に起動されるものだ。

この黄色いテープの向こうは、一人で踏み込めるようなエリアではない。

「どうせ時間外労働だし。彷徨ってるらしい魂魄には、そのまま迷子になってもらうか」

運が良ければ、後日、誰かに発見されるか、転生する気があるなら自分で出て

くるだろう、と公務員は踵を返した。

そのとき、

「あり？ 公務員ー？」

コードネームを呼ばれて横手を見ると、同僚が現れた。

全体的にやる気のなさが漂う公務員とは対照的に、陽の気を撒き散らしているような中背の男だ。

「ジョニー、なんでお前がここに？」

「そりゃこっちのセリフだよおー」

正式コードネームは『ジョニー・オークラ』。

勿論、『公務員』と同じく、いい加減な上司につけられた、不憫なコードネームであるが、本人はわりと気に入っているらしかった。

普段は開発室で銃をいじくり回しているだけの男が、なぜ現場に居るんだ、と公務員は一層、この事態を不審がった。

「俺は、なんか迷子の気配がしたんでな」

「ははあ、もしかして、公務員、コイツに引き寄せられちゃったー？」

ジョニーは手にした小さな円筒の容器を公務員に見せた。

それは死神の小道具のひとつで、原形サイズの魂魄体を封じ込めておくものだ。

「俺が感じたのが、『ソレ』かどうかは分からないが。なんかイワクつきか？」

「ウーン、それがまだ分かんないんだけどー」

「大体、なんでお前が現場に居るんだよ？」

「ウーン、まあ、それも説明すると長くなるんだけどー……」

ジョニーはその話題には触れられたくないのか、説明するのが面倒くさいのか、話題を逸らした。

「それはそうと！ オイラが改造した例のアレ。どうどう？ もう使ってみたー？」

最近、ジョニーが「今世紀最高の傑作」として、公務員に押し付けた改造銃のことだ。

銃の改造を生きがいに行っているジョニーにとって、公務員のような現場のガンマンは、いいサンプルなのである。

自分は、技術屋を称しているので現場にはほとんど出たがらない。
なんでも、日本の戦国時代に流れ弾に当たって死んだそうで、以来、銃には複雑な想いがあるらしい。

魂魄体となつて冥府に来たとき、丁度、〃再生工場も廃棄工場も定員オーバーだから〃という理由で泰山府の職員になつたそうだ。

「試射は何度かしてみたが、正直言つて、命中率が落ちた」

公務員がダルそうに言つと、ジョニーは「ふっふーん」と鼻を鳴らした。
それは計算済み、という顔だ。

「まあ、あれを百パーセント使いこなせるのは柳生博……じゃなくて、天界広しと言えど、陽輝^{ようき}大将くらいなもんだろねえー」

「……!?!」

公務員は、ジョニーがサラつと言つたその名前に反応した。

「あの人はスゴイよおー？ スゴそうに見えないだろうけど。昔、オイラの改造したマグナムの射程を三倍に伸ばしたのは、たまげたねえー」

「お前だったのかよ……」

「ん？ なにが？」

「いや、こっちの話だ。そんで？ こいつの——」

と、公務員が背中に差し込んでいた黒い金属を取り出すと、ジョニーが「それそれ！」と詰め寄ってきた。

「データが欲しいんなら、もうちょい待ってくれ。まだあとクリーチャー十匹くらいには試し射ちしてみたい」

「あれれ？ どうしたの、なんかやる気になっちゃってない？」

「俺は根は真面目なんだよ」

「自分で言うわけ？ ま、いいや。じゃあさ……」

「……？」

途端に、ジョニーが硬直して公務員の背後を見上げた。

そこになにがあるのか、といえば、ジョニーにとっては信じられないものしかない。

「じゃ、じゃあ、実践で頑張って貰おっかなー……」

黒く揺らめく、小山のようなもの。

ジョニーはあまり『これ』の実物を見たことはなかったが、ランクAの亡者であることはすぐ分かった。

泰山府の職員にとつてはちよつと獰猛なペットのようなクリーチャーならまだしも、ランクAの亡者となると、ほぼ全員『遭遇したくないもの』と答えるだろう。

魂魄の成れの果てと言われている亡者にはランクがある。

通常、死んだばかりの魂魄は、亡者になるまでもなく、再生工場か廃棄工場に誘導される。

しかし、運悪く迷子になって冥府の森を彷徨い続けた魂魄は、『亡者』となり、死にたての魂魄を襲うようになる。

その放置期間によつてランクづけされるわけだが、ランクAというのは、冥府体感時間にして十年以上放置されたものを指す。

まず、間違いなく、冥府一厄介な怪物だった。

「こ、こ、こ、これが噂に聞くランクA……!?!」

真っ青になったジョニーは、揺れ動く影を指差した。

「……チツ、やっぱ、ついてねえな！」

半分だけ振り向いて、黒い煙の塊を確認した公務員は口をゆがめはしたものの、ジョニーほど、竦んではない。

よく見れば、その亡者は冥府中層によく居る、牛頭ごず（※地獄の獄卒。牛頭人身といわれている）のような姿をしていた。

黒々とした煙を身にまとったような、半獣半人。

これが、かつては光輝く魂魄だったとはとても信じがたいが、泰山府の職員、つまり『死神』の肩書きを持つ者は、こういった亡者を一目で見分けることができた。

ゴゴゴゴオ……ッ

闇の底から聞こえてくるようなその咆哮に、ジョニーは悲鳴をあげた。

「ひいいいいいいいいいいいい！」

しかし、公務員は素早く手にしていた改造銃を背中にねじ込むと、懐に両手を突っ込んで、二丁のハンドガンを左右の手に滑らせた。

この二丁のデザート・イーグルで、果たしてランクAが倒れてくれるのかどう

かは不明だが、一応、数値上では対応できるはずだ。

「働く気がねえなら、下がってろ、ジョニー！」

公務員には目もくれず、牛頭の亡者がジョニーに襲い掛かる。

三メートル以上はあろうかという巨体が小柄なジョニーに突進したが、腰を抜かしながら這って逃げたジョニーは、着ていたコートを引き裂かれただけで済んだ。

直後、公務員のデザート・イーグルが火を噴き、亡者の『急所』を撃ち抜く。亡者の急所というのは、それぞれの個体によって違う。

あの牛頭の場合は、人間なら額に当たる、頭部のはずだった。

『急所』は視覚できるものではなく、ではなぜ公務員にそれが分かるのか、といえ、彼が死神だからである。

しかし、

(外れたのか……っ!?)

一旦はダメージを食らって動きを止めたはずの亡者が、また動き始めた。

決して早くはないが、遅くもないその動きで、再び、ジョニーに向かっ

く。

「……クツ」

公務員は、続けざまに撃った。が、確かに被弾しているはずなのに、ダメージは与えられない。

「ひよえ——ッ！ お助け——ッ！」

ジョニーは立ち上がって後退しつつ、木の枝を足場に上へとジャンプして逃げた。

(なんだ、結構身軽じゃないか)

公務員は、ドドメ色のコートのポケットからカートリッジを取り出し、口にくわえながら走った。

ますます活気づいたような牛頭は、攻撃をした公務員には目もくれず、ジョニーを目指して追いかける。

それが不可解だったが、考えている暇はない。

背の高い針葉樹の木から木へ、ジョニーは逃げ惑いながらも、なにかをしていった。

枝へ飛び移る度に、なにかを懷やブーツから取り出して、手の中でそれを完成させようとしているようだ。

ブツブツと言ってるのが地を走る公務員にも聞こえた。

「補整率二・五、反動誤差一・二——」

ジョニーも技術屋とはいえ、一応、泰山府の職員である。

亡者の特性と封印方法くらいは知ってるはずだし、多少の戦闘経験くらいはあるだろう、と公務員は思った。

(率先して守ってやる必要なし、と)

牛頭が繰り出す物理攻撃が、ジョニーを押しつぶそうと、結果、枝を薙ぎ倒していく。

「うわちちツ……、クソー！ 技術屋を舐めんなよー！」

ジョニーはいつの間に組み立てたのか、ロケットランチャーをジャキンと肩に乗せて構えると、迫り来る牛頭に至近距離で一射した。

「食らえ、即席ランチャー、『風鈴峯山』！」

ドゴオツ！

爆音と煙が立ち込める。

即席にしては相当の威力がありそうだったが、いまの攻撃でもやはりダメージは与えられていないだろう、と公務員は思った。

「止まるな！ 逃げろ！」

数秒後、クリアになった視界に、改めて黒い巨体が見えた。

「うひー！ー！ ダメじゃん！ 公務員！ なんとかしてー！」

「なんとかって言ってもなあ……」

急所を狙ってもノーダメージ、対戦車級の物理攻撃でも全く歯が立たない、で、どうやって倒せというのか。

既に三つめのカートリッジを全弾撃ち込んでいた公務員だったが、

（もしかして——）

と、思った。

ランクAの亡者とは何度か、闘ったことがある。

が、この牛頭のタフさは、それよりも遥かに上だ。

（ランクSかよ……っ!?!）

愕然とする。

もしそうなら、公務員にも、ジョニーにもこの化け物は倒せない。

そのとき、間近に迫った牛頭の体当たりを、ジョニーがもう避け切れそうになると判断した公務員は、右手のデザート・イーグルをしまつて、背中の銃を抜いた。

そして、『光弾』を装填して牛頭の顔面に撃つ。

パアツと、辺りに凶悪なくらいの光量が放たれ、牛頭が叫び声のようなものを発した。

ジョニーから貰ったこの新しい銃は、弾を変えることによって、色んな効果が望めるのだ。

しかし、その装填作業のせいで命中率が落ちる。

公務員は、まだこの銃を愛用のデザート・イーグルほどには使いこなせていない。

数秒の足止めに成功し、公務員はジョニーの襟首を引っつかんで、敵の脇を抜けて、向こう側の木の枝に飛び移った。

「公務員！ あれはS級だよ！」

息を切らしながらジョニーが叫ぶ。

「やっぱりか」

「S級を仕留めるには、公務員のいま持つてる弾じゃ無理だね。これ使って。」

『靈魂ダメージ三倍君』だよ」

と、ジョニーが体中を探ってやっとなし当てたものは、ごく普通のハンドガン用の弾丸に見える。

「もう、それで仕留められなきゃ、オイラに策はないからね！ 外さないでよ！
一発しかないし！」

公務員は苦い顔で頷いて、改造銃にその弾丸を装填した。

そして、数メートル先の牛頭がそろそろ体勢を立て直そうとしているのを見ながら、思いつきで言った。

「ジョニー、お前がさつき持ってた魂魄を寄越せ」

「え？ これ……っ？」

ひったくるようにその円筒の容器をもぎ取って、隣の木に飛び移る。すると、

振り向いた牛頭は今度は公務員を目掛けて突進してきた。

やはり、敵の狙いはこの魂魄らしい。

「事情は後で聞かせてもらおう！」

怒鳴りながら、公務員は、慎重に改造銃を構えた。

（さつき、俺が急所だと思った場所が違うのなら、この弾丸を撃ち込んでも、多分、無駄だ）

そう思ったが、公務員は、狙いを変える気はなかった。

自分の能力は疑わない。

疑うほどの能力もない。

公務員はそう思っているのだ。

そして、一度死んだ身として、公務員は、自暴自棄とは少し違う、開き直り方をしている。

（駄目だったら『完全な死』、うまくいっても変わらぬ日常、だ。どっちも大したことじゃない）

引き金を引いたときは、既に距離は間近に迫っていた。

ズン……！！

という地響きを感じ、目前で爆炎とスパークが展開され、公務員は思わず顔を背けた。

続いて、亡者特有の苦悶の叫び声がつんざく。

「……やったか」

そう呟いたときは、ジョニーが隣に来て、封印儀式を始めていた。

「我、冥府の主の名の下に、彷徨う亡者の邪心をここに封じる！ ……請願！」
未だ火達磨の中の亡者が、ジョニーが振り下ろした鎌によって、魂魄体へと変成する。

それを素早く容器に取り込んだジョニーが、やっと力が抜けたように座り込んだ。

「フー、お疲れー」

「で……？ 順を追って説明してもらおうか」

さつき預かった魂魄体の方を一瞥してから、ジョニーに返すと、彼は、いま倒した亡者の魂魄体と二つ並べて、手の中でじっと見ていた。

「その前に、ここを離れよう。またいまみたいなS級が出てきたら困るっしょー？」

「可能性があんのか!？」

「まあ、無いとは言えないかなー……」

支部へ戻る途中、普段現場に出ないジョニーがなぜ今日派遣されたのか、聞いた。

「オイラが最初に持ってた方の魂魄はさ、まだ亡者にはなってなかったんだけど、本部の迷子センサーに引つかかるほどの『大物』だったらしいんだよね。しかも、明確に『極東出身』の反応が出てたらしくって、それで同郷のオイラが迷子回収に派遣されたんだよ」

極東——。

泰山府で『極東』と言えば、日本エリアを指す。

「『大物』って、どういう意味での大物だ？」

「別に元総理とか、大御所俳優とか、そういう意味じゃないよ？ 普通の魂魄じゃないらしいってだけ。機密事項とかで詳しくは教えて貰えなかったけど」

「普通じゃないって、つまり『人外』ってことか？」

「ウーン……、どうだろうね？ オイラは興味ないけど」

「俺も興味はないが……」

毎日、銃の改造してれば給料を貰えるジョニーと違って、公務員には泰山府の業務以外の仕事もある。

厄介事センサーは、一応、広げておかなければならなかった。

特に、横暴にしてクソ生意気な、あの雇用主に深く関係がありそうなことは、興味がなくとも、知っておかねばなるまい。

（イワク付きの『日本』の魂魄回収命令と、その魂魄に引き寄せられるようにして現れたランクSの亡者、か……）

公務員は、なんとなく嫌な予感を感じながら煙草をくわえた。

1 沙龍の場合

(ウーム……)

遅いランチを終えて自室に戻った沙龍は、シヤロン思わず唸るような心地で立ち止まっていた。

が、その顔は半分以上微笑んでいる。

最近は年月を数えることもなくなったが、すいうんきゆう水雲宮の住人になってかれこれ一年以上は経っているはずなのに、こんなことはいまままでなかった。

くらい九雷が、長椅子でうたた寝しているのだ。

最初は、瞑想しているのかと思っただが、どうやら本当に眠っているらしい。

沙龍は、九雷の寝顔をほとんど見たことはない。

朝は気付けば居なくなってるか、自分が起こされる方だし、夜は大抵、沙龍の方が先に寝顔を晒す。

育ってきた環境の違いもあるし、男女の体力の差もあるだろう、と、いまままで

はあまり気にしなかったが、改めて九雷の寝顔を見てみると、自然、笑みが漏れる。

しかし、同時に、この事態を喜ぶべきか、憂うべきか、迷った。

喜ぶべきは、無防備な寝顔を見れることで、憂うべきは、自分が近付いても目を覚まさないほど疲れているということだ。

抜き足差し足で極力音を立てないように九雷に近付き、そのまま床にしゃがんで、恋人の疲れた寝顔を眺めていた。

が、その幸せな時間はすぐに終わる。

「……沙龍、氣を撒き散らしてたら、足音を立てないことに意味はないぞ」

寝ていた人の手が動いて、宅急便の荷物を抱えるように、沙龍の体を引き上げる。

沙龍は「残念」という顔をしながらも、九雷のなすがまま、その膝の上に座らされた。

「ゴメン……、起こしちゃった」

「いや……、いいんだ。お前の顔を見にきた」

そう言っておきながら、一瞬、厳しい顔をする。

「……？」

携帯電話のコールが掛かっていたようで、九雷は懐からその忌々しい機械を取り出した。

「悪いが俺はもう今日は一切仕事をする気はないぞ」

そんな刺々しい声で応対しているのを、沙龍は苦笑しながら眺めていた。

抱き寄せられて、心音が分かるほどに近付いた沙龍にも、その電話の向こうの声が聞こえた。

『しかし、現在、五雷ごらい、馬霊ばれい、両次官が出払ってまして……』

それは、沙龍もよく聞く声だった。

恐らく、九雷の直属の部下の一人で、よく水雲宮にも九雷宛に書類を届けに来る、ガタイのいい男だ。

名前は知らないが、余計なことを一切喋らない、赤帝君せきていくん以上の堅物だろう、と沙龍は思っていた。

「……なんのために対策本部がある。それぐらいが捌けないのなら、委員長をク

ビにしろ」

九雷はそう言つて、相手の返答を聞かずに電話を切つた。

ニヤリと笑つた沙龍は、あの軍人バカに勝つた、としようもない勝利を喜んで
いるわけだが、九雷の疲れた顔は事態の深刻さを物語っている。

だから、余計なことは言わず、子供をあやすように髪を撫でた。

「お帰り」

「さすがに今回は、家出でもされてるかと思つた」

と、九雷がらしからぬ冗談を言う。

「私が出してたら、貴方はどうするの？」

「勿論、連れ戻しに行く」

「どこに行つたか分からないのに？」

「……」

答えずに微笑みながら、九雷は、この沈黙に少し赤面している沙龍を、ただ見つめている。

こういうとき、未だに心拍数が上がるのは沙龍の方で、いつも、あと何年、こ

ういう状態が続くのだろう、と思つてしまふ。

（そのうち、倦怠期とかが本当に来て、長年連れ添った夫婦のようになつちやうのかな……）

それならまだいいかもしれぬ。

最悪の場合もある。

しかし、いま、そんな面白くないことを考える余地は沙龍にはない。

「まあ、この世界で私の行く場所なんて、高が知れてるか」

もし家出するとしたら、どこに行くのだろう、と具体的に考えたとき、沙龍には三つくらいしか思い浮かばなかつた。

「いや……、そうじゃない」

「……？」

「お前がどこに居ようと、俺には分かる」

「それは、貴方が『青龍』だから……？」

四方将神には、黄龍の気配と位置が大体分かる、という。

勿論、エリアは限定されるが、帝都周辺ぐらいなら、比較的たやすい。

「そうだな。それもあるが……」

そう言っつて、今度は、なにかを考え込むように黙ってしまった。

「……?」

九雷の沈黙には、幾つか種類がある。

沙龍にも、それらは大体分かってきたが、この沈黙の意味する所は分からなかった。

だから、九雷が沈黙を経て言った言葉は、少し意外だった。

「沙龍、俺が青龍の力を放棄したらどうする……?」

「え、ええッ!」

しかし、九雷も、また、沙龍のこの反応が意外だった。

「なぜそんなに驚く」

「だって! それって、もう、辞めるけどいいか? って聞いてるようなもんだよ!」

「そうか。そう聞こえたか。まあ、あながち間違ってもいないんだが……、お前は嫌なのか?」

「い、嫌って……、い、嫌なのかな？」

自問してはみたものの、沙龍の動揺はそのまま、答えになっている。相当嫌な顔をしていた、ということにも気付いた。

「でも、そういうのは、私がどうこう言える問題でもないし……、いや、その前に、元帥は嫌なの？」

「ん……？」

「貴方は『青龍』でいることが嫌なの？」

いままでそれをハッキリと聞いたことは無かったので、沙龍はいい機会だと思っただ。

九雷の場合、他の四方将神たちと違って、この役職にあまり思い入れがないとしてもしょうがない。

「別に、嫌だというわけじゃないんだが」

「じゃあ、なんで急にそんなこと……」

「色々あつてな……」

「ああ、『色々』ね。なんか、元帥の場合、ものすごく『色々』ありそう」

沙龍が茶化すのを、九雷は苦笑気味に流した。

「ただ、俺が帝都に居る以上、東方の護りが手薄になるのは確かだからな」

「ああ……、そういうことか。つまり、天界軍元帥としての発言なのね」

そういえば、最近、極東側で小競り合いがあつたとかいう話を、沙龍も陽輝から聞いた。

東方天界から見て『極東』——つまり、沙龍と木佐の祖国ともいうべき日本エリアである。

それが『小競り合い』程度じゃ済まなくなっているのだとしたら、九雷が最近多忙な理由と、こんなことを言い出した背景がなんとなく分かるうというものだ。

「東海龍王家はいまどうしてるの？」

「問題はそこだ」

九雷は、意味深に笑った。

その顔は『よくできました』と言っている。

天界の護りが鉄壁と言われているのは、中央ではなく、その四方の護りに重き

を置いているからだという。

実質的には四方軍が物理的な力を排除し、外交的には四海龍王たちが睨みを利かせ、更に目に見えぬバリアーの役目となっている五行の奔流は、四方将神が担当している。

この三重構造では、普通、『異民族』と呼ばれる外敵はとても侵入できない。しかし、現在、その護りは、完璧ではない。

東海龍王が不在のいま、東方青龍たる九雷は四方将神としての仕事はほとんどしていないので、新任の東方軍大將は、九雷以上に多忙のはずだ。

「奏欽殿そうきんが、先のクーデターで捕縛された東海龍王一族の助命嘆願をしたそうだが、陛下はまだその決定を保留にしている」

「そうなんだ」

北海龍王敖吉ごうきつのクーデター以来、東海の龍族たちは、肩身狭く暮らしていると
いう。

東海龍王敖坤ごうこんは、結局、クーデターの共犯にはされなかったが、東海龍王家の者で、敖吉に積極的に協力していた者は投獄されたままになっているのだ。

そして、東海龍王は空位のままで、それが各方面に色々な影響を与えている。

「東海龍王を新たに選出するか、もしくは、俺が青龍の力を適任者に譲渡するか……、そうでもしないと、極東勢力を迎え討つのは難しいだろうな……」

呟くように言うと、沙龍がまた顔をしかめる。

九雷はそれを見て、微笑んだ。

「だが、お前が嫌なら、青龍の譲渡は無しだな」

「……。なんで？　そういう政治的な問題が、私の我侷ひとつに左右されちゃうわけ？　そういうの、公私混同とかいうんじゃない？」

「なにか問題でもあるのか？」

「いや、なんでもありません」

沙龍は、今更これを言っても仕方がない、と思った。

九雷のこういった性格はいまに始まったことではない。

『職権濫用』とは、九雷のためにあるような言葉なのである。

しかし、このままでは、あまり気分のいいものではないな、と沙龍は思ったので、ひとつ提案を試してみた。

「『東海龍王』が居ればいいの？」

「そうなんだが、龍王の資格がある者が居ないというのが現状だな」

「龍王の資格って？ どういうの？」

九雷の説明によると、それは東西南北によって多少の差異はあるものの、原則として五行術の力が最高ランクであれば問題はないということだった。

人柄や能力というものは当然のように求められるが、直系傍系は問わないと言う。

五行の力は先天的なものだから、自分が望むと望ままいに関わらず龍王に選出されてしまうシステムでもある、と奏欽が零していたのを、沙龍も聞いたことがある。

「東海龍王の場合は『木行』なんだが、いま、そのマイスターが居ないんだらう」

「フーン……。ということとは……」

沙龍が、ニヤリと笑ったので、九雷は嫌な予感がした。

「龍族で『木行』のポテンシャルが高い人が見つければ万事OKってことか」

「……」

「見つけようじゃないの」

九雷は、軽くため息をついた。

言うんじやなかった、という顔だ。

「沙龍、俺はお前にそんなことをさせようと思ってこんな話をしたんじゃないぞ」

「分かってるけど、でも、話を聞いちゃった以上、私が見つけなくちゃいけない気もする」

「なぜだ……？」

「うーんと……」

建前の理由は幾らでもあった。

沙龍はクーデターの当事者というか、被害者なわけだから、被害者側が新たな龍王を推薦すれば、角が立たないだろう、とか。

職務がなく、自由に動ける人は自分以外には居ない、とか。

しかし、九雷にそんな建前を言っても仕方がない。

どうせ、見抜かれるのだ。

「私の本音は、『青龍』は貴方以外じゃ嫌だっけこと」

「……。いいだろう」

口の端を上げて会心の笑みを漏らす九雷に、沙龍は確信した。

この人は、結局それが聞きたかっただけなのだろう、と。

2 奏欽の場合

すいしようきゆう

水晶宮すいしようきゆうの空色の外壁が、海面からの陽光を受けて美しく輝いていた。

その豪華な建物は龍族の繁栄そのものであり、東海の護りという役割も持っている。

だが、いまは住む人も居なく、廃墟になるのを待つだけの宮殿だった。

「かつての無敵の城砦も、いまは幽霊屋敷みたいね……」

奏欽は、目の前の蜘蛛の巣を忌々しそうに払った。

まだあの事件から半年も経っていないはずだが、人の住まない家というのは荒れるばかりだ。

特に、この奥殿の地下層は普段から人の出入りがあつたわけではないので、尚更である。

奏欽自身はこの水晶宮で暮らしたことはないが、それでも子供の頃はよく遊びに来たし、龍族全体の行事があれば会場となるのは決まってこの宮殿だった。

幼い頃は、敖坤ともよく遊んだ。

優しい従兄弟だったが、その優しさが弱さであることは、幼い奏欽にも分かった。

同じ龍王位として敖坤に同情すべき部分はあるが、それでも、彼のしたことは許されることではないだろう、と奏欽は思っている。

しかし、敖坤を咎人として扱わなかった九雷の判断には感謝している。それが、九雷の政治的配慮だとしても、である。

奏欽にとって、やはり敖坤は『優しい従兄弟』だし、その面影を大事にしたいのだ。

敖坤の父、敖光（ごうこう）も優しい龍王だったという。

奏欽は敖光には会ったことはないが、龍王の威厳を守ることが第一と考える自分の父親とは正反対の人物だったのではないか、と思っている。

（誰か、居る……？）

水晶宮の内部はヒッソリとしていたが、微かに動く『氣』の流れがあった。いま、この宮殿には誰も居ないはずである。

もし、居るとしたら、無人であることを知ってお宝目当てにやって来るならず者くらいだろう。

念のために、奏欽は隠し持っている銃を着物の上から確認した。

あまりこれは使いたくない。

これを抜くときは、かなり恥ずかしい思いをしなければならぬからだ。

「うへー、蜘蛛の巣だらけじゃねえか」

聞き慣れた声が背後に聞こえて、奏欽は安堵と共に微かな怒りを感じた。

「よ、奏」

いつものように片手を上げて、軽く挨拶する陽輝は、その『微かな怒り』にまだ気付いていない。

「なんでここに……?」

「ゴアイサツだなー。久しぶりの夫に対して」

「久しぶり過ぎて、夫の顔も忘れそうだけど」

ストレートな嫌味で迎えられて、陽輝は頭を掻いた。

だが、別に浮気していたわけではないので、後ろめたさのようなものはない。

「いやー、色々忙しくてなー。悪い悪い。そういや、しばらく顔見せてなかったな」

「『しばらく』？」

「……何日だっけ？」

「……『何日』？」

奏欽の頬が引きつった。

陽輝は『こりやヤベエ』と思ったが、口を開いても恐らくロクなことにはならないだろう、と思ったので黙った。

「そうねえ、軽く見積もって百日くらいかしら？」

「……」

復縁してからはどんなに忙しくとも一週間に一度は家に帰っていたが、最近の軍部の殺人的な忙しさと、陽輝のあまり几帳面でない性格のせいでも、こういう事態になってしまったらしい。

しかも、その間、連絡のひとつもないというのだから、奏欽の怒りは尤もであろう。

「でー？ その『東海の至宝』とやらが、ここに残ってんのか？」

奏欽の背後で、陽輝は煙草をくわえながら、ライターを探した。

が、上着のポケットにも、Gパンのポケットにもなかつたので、自らの手に炎を出現させた。

これは火属性を持つ五行術者にはわりと簡単なことだが、陽輝は先天的には『金行』しか持ち得ていない。

にも関わらず、初歩の五行ならば、ある程度使えるようだ。

その理論を理解しているというよりも、陽輝の場合は、天性の勘だった。

「可能性は低いけど、一応探しておこうと思って」

宝物庫の片隅で、奏欽は先程からあれこれと探し物をしている。

陽輝は手伝うわけでもなく、ただ、本当に奏欽の顔を見に來ただけ、という感じだ。

「接收されたとき、あらかた持ってかれたんじゃねえのか？」

水晶宮の管理権限は、現在、奏欽に委ねられている。

先のクーデターで、一旦、軍部に接收されたが、各方面の働きにより、一応、龍族の手に戻ってきたといったところだ。

と言っても、奏欽はたまにこうして様子を見に来るだけである。

「この部屋はまだ手を付けられてないと思うんだけど……」

「フーン……」

最近、奏欽が東海龍王一族をなんとか助命しようとしているのを、陽輝は知っている。

その心境は分からないではないが、いま、この時期になにやら宝探しを始めたのは、どういう訳か。

「九雷になにか言われたのか？」

「え……？　なんでそこに九雷元帥が出てくるの？」

「いや……」

陽輝はそれ以上、なにとも言わなかった。

かうんきゆう火雲宮の軍部が躍起になって東方の護りを固めようとしている現在、陽輝と

しては、この一事に奏欽を巻き込みたくなかった。

奏欽が事情を知らないなら、それに越したことは無い。

「……？　ちよ、ちよつと離してよ」

誤魔化すわけではないのだが、陽輝は探し物をする奏欽の腕を掴んで、そのまま抱き寄せた。

「奏、あのな……。怒られるのは承知なんだが、またしばらく顔を見せられなくなる」

「……それで？」

「俺としても、可愛い嫁さんに会えないのは非常に辛いところなんだが」

「酔っ払ってるの？」

「いや、至ってシラフだ」

「貴方の思考は常に酔っ払いよ」

奏欽は本気で罵倒しているわけではない。

これが、二人の通常会話なのだ。

「だから、半年くらい音沙汰なくても、心配しねえで、待っててくれ」

「心配もしないし、待ちもしないわよ。前は心配しすぎて、待ちすぎてくたびれちゃったんだから」

「あ、そ……」

陽輝は落胆の顔を見せるが、それも半分は演技だった。

「でも……」

陽輝の腕を押しやって、探し物を続けようとした奏欽が、間を置いて振り返った。

「……？」

「ありがとう」

「……？」

陽輝は、奏欽がなにに対してそう言ったのか分からなかった。

その様子を見て、奏欽が苦笑する。

恐らく、陽輝は自宅の侍女か、管弦府のスタッフから自分の行方を聞いて、わざわざここまで来てくれたのだろう。

留守なら諦めるという選択肢もあるのに、忙しい合間を縫って、自分に会いに

来てくれたことが、奏欽は嬉しかったのだ。

そして、奏欽が嬉しかったことは、もうひとつあった。

これは、本人はあまり自覚していないかもしれないが、陽輝はいつも、決して自分を争いごとに関わらせようとしない。

さつき、陽輝が九雷の名前を出したとき、奏欽は『ああ、あの件か』と気付いていた。

『龍王家の至宝』を探すことに、一番力を入れているのが秦帝しんていで、九雷元帥や新任の東方軍大将もそれに関連して多忙を極めているという火雲宮の事情は大体知っている。

しかし、知らない振りをしていた方が、陽輝は安心するらしい。

(結構、古風よね)

もし、自分が率先してあれこれと動くタイプだったら、この性格の男とはうまくいかないだろう、とも思う。

3 九天玄女の場合

仙界領土のほぼ中央に位置する崑崙こんろん防衛庁前で、九天玄女きゅうてんげんじょは呆然としていた。

なぜ、自分の執務室辺りの一角が、半分なくなっているのだろう。

その答えは、すぐ目の前の門壁に身を預け、下を向いている飛龍ひりゅうを見れば簡単に推測できそうな気がしたが、ひとまず事実関係を確認しなければなるまい。

「なにがあつた……？」

「……」

「喧嘩の相手は誰なんだ……？」

「……」

飛龍は口を開こうとしない。

この顔は、多少なりとも落ち込んでいる顔だ。

いつもなら、短い言葉でもちやんと答えはする。

「弁解する気も謝罪する気もないなら、私の屋敷に戻っている」
そう言うと、飛龍は少しだけ顔を上げ、風火輪を作動させて飛んで行ってしまった。

「……」

九玄は改めて庁舎を見上げる。

あの位置からすると、半壊しているのは間違いなく自分の執務室である。

そこで飛龍が誰かと喧嘩をして、あの状態になった、ということではほぼ間違いなさそうである。

そして、恐らく、その『喧嘩相手』というのは――。

瓦礫の中で、煤けたまま優雅にお茶を飲んでいたのは、やはり天真てんまだった。

「お帰りなさい。留守中勝手に上がらせてもらってます」

「天真大夫……、大体想像はつくんだが、飛龍になにを言ったんだ？」

「すみません、ちよつとコンプレックスを刺激しちゃったみたいで……」

飛龍にとってのコンプレックス。それは、即ち『父親』である。

とすれば、その父親絡みで、天真ならではの痛烈な言葉が飛龍の逆鱗に触れたのだらう。

「貴方が力を追い求める限り、お父さんは越えられないし、敖閏ごうじゅん殿のやつてることは理解できませんよって……、言っただけなんですけどね」

「なるほど……」

飛龍が必殺技を放つには十分な言葉だったようだ。

しかし、九玄は客観的に見て非があるのは飛龍の方だと思ったので、西海龍王宛に請求書を書き始めた。

この請求書も随分溜まっている気がするが、西海龍王は頻繁に会えるような相手ではないので、なかなか渡す機会がない。

確実に会えるのは年に一度の蟠桃会くらいだが、飛龍の無茶ぶりのせいで、一年間で請求書はトラック一台分くらい溜まる。

「明日が休みでよかった」

九玄は、改めて瓦礫の山になってしまった自分の執務室を眺めた。

「すみません。暫しのお別れの挨拶に来たというのに、こんな体たらくで」

天真はもう、煤だらけになった顔を拭く気もないらしい。

ところどころ焼け焦げた着物や、逆立ってしまった髪のは、もうどうやっても取り繕えるようなレベルじゃない。

今日は気合を入れてお洒落をしてきたというのに、少年をからかっている場合ではなかった。

「どこか遠くに行かれるのか……？」

「いえ、そうじゃなくて。もしかして、ご存知ないんですか？」

九玄は、天界の内部事情までは知らない。

仙界の特使としてたまに帝都に行くことはあっても、火雲宮の動向にはそれほど注意を払ってはいなかった。

というのも、払わなくていいような日々でもあったのだ。

「最近、色々あるみたいで。そのうち、帝都はまた戒厳令が出されるんじゃないかって噂です」

「……穏やかじゃないな」

「ですね」

今日の天真は、本当に『挨拶』に来たようだ。

いつものように、冗談半分に口説いてくるような空気がない。

「なるほど……、心当たりがないとは言わないが、いずれにしても崑崙側は部外者になる、か……」

九玄の心当たりとは、普段、極東エリアでスカウト活動をしている清虚道德真君が、半分行方不明状態になっていることだった。

最後の報告で、『西南地方にて膨大な霊力反応あり』とあったので、そこに向かったのは分かっているが、いずれにしてもなにか手を打たなければなるまい、と思った。

「やっぱり、そういう反応ですか……」

天真は溜息をついて、立ち上がった。

「……?」

「いえ、別に、これですばらく静かになる、なんて思われてたら悲しいなーって思っただけです」

本音に聞こえなくもないその呟きが、同情を誘うような口ぶりだったので、九玄は却ってムツとした。

「いいんです。貴女にとって、私はその程度の存在だって、分かっていますから。御機嫌よう、娘々」

「そうして、別の女の所に行つて慰めて貰うつもりだったら、もうここへは来ないでくれ」

九玄の苛立ちの言葉が、天真の足を止める。

「貴方にとって、私がそういう存在なら——、余裕のあるときにだけいい格好をして見せて、シミュレーションのような恋愛ゲームを楽しむだけの観賞用だというなら、そんな役割は願い下げだ」

「スミマセン、いまのは、色々痛かったです。……でも、他の女性の所へ行こうなんて、思つてませんでしたよ。第一、そんな人、居ませんし」

「……」

九玄は冷ややかな目で天真を見た。嘘つけ、と言いたげだ。

だから、天真は煤だらけの自分の全身を見回して、弁解するように言った。

「ホントですよ……？」

「まあ、その真偽はひとまず置いておくとして、だな」

「置いとかれちゃうんですね」

九玄は、モニターに緊急の連絡が入ったのを読みながら、嫌な予感を覚えた。

それは、行方不明の清虚道德真君を探しに行かせたエージェントからのSOSだった。

「……暫しの別れが永遠の別れにならぬよう、祈っててくれ」

「待って下さい！ そんな、いきなり！」

俄かに出撃準備をして、青鸞に乗り込む九玄に、天真は追い縋った。

「天真大夫、邪魔をするな。青鸞に押しつぶされるぞ」

「邪魔をするつもりはありませんが、せめて、これを！」

天真が懐から取り出したものは、アクセサリーに見えた。鎖は長くはない。

「これは……」

渡されたのは、どうやら耳飾りだった。

指先ほどの大きさの宝石がついている。一目で高価な品だと分かったが、それよりも、九玄はこの石がどういったものなのか見知っているので、天真を正面から見た。

防衛庁のスタッフでも、この石を身につけている者をたまに見かけるが、これは恐らく天真特製の一級品だろう。

「……お節介ですかね？」

天空山でのみ採れると言われている、希少価値の宝石である。

しかし、実際には、一般市民でもかろうじて買える値段で流通されていた。

これを必要とするのは、命を張った現場仕事をしているような者たちだけなので、一般市民は他にもっと安くて美しい宝石を求めるのだ。

「いや、有り難く貰っておく」

この石には、魂魄を体内に留めておく効果があるので、これを身につけていれば、戦場で致命傷を受けたときには、助かる確率がかなり上がる。

百戦錬磨の猛者などは、わざとこういうったものを外す場合もあるが、九玄は素

直に受け取った。

「お気を付けて……」

天真は、軍医であったときも、こうして、何度も戦場へ向かう战士们を見送った。

それが演習場であれ、死地であれ、彼らを止めることはできないのだということを、天真は嫌と言うほど知っている。

だから、せめて、自分は願い、祈るだけなのだ。

大切な人が無事であるように、と。

4 東海の至宝とは

極東に向かった九天玄女のことは、暫し忘れて頂きたい。

こちらは、水雲宮である。

昨夜遅く、いつにも増して不機嫌な顔で水雲宮にやって来た飛龍は、その不機嫌の理由を説明することもなく、また、沙龍も聞き出すことはない。

自称、『緑麗のボディガード』の飛龍は、二十四時間ではないにしろ、大體、こうして沙龍の近辺に居る。

九雷はそれを黙認していた。

自分が居るときは単なる目障りにしかならない飛龍も、留守のときは重宝するからだ。

飛龍も、基本的に九雷には近付かないので、この二人が衝突することはほとんどなかった。

人間模様も様々である。

いま、その飛龍を駆って、身軽な普段着の沙龍は帝都に向かっていた。歩けば二時間かかる道のりも、龍形態の飛龍なら数分でつく。

「飛龍、そろそろ減速しないと、この前みたいに建物に突っ込むぞ」

「分かってる」

沙龍は、火雲宮の敷地内のとある建物に、飛龍を横付けにした。

管弦府である。

『新たな東海龍王探し』の件を、とりあえず、自分の周囲で一番関係の深そうな友人に相談しに来たのだ。

沙龍が窓越しに話す相手は、ここの長官でもあり、南海龍王でもある奏欽である。

「……いや、無謀だったかな、とちよつとは思ってるんだけど」

奏欽が、「どれくらい大変か分かってます？」という顔をするので、沙龍は声を落として言った。

「まあ、趣旨には概ね賛成なんですけど、該当者が居ないってのは事実なんですよ」

奏欽は、今日も豪華な薄紅色の衣を重ねている。

とてもよく似合うと思うのだが、陽輝はこれをいつも『少女趣味』とからかうらしい。

「でも、一人一人、五行の資質テストとかしたわけでもないんでしょ？　ダークホースが居るかもしれないじゃん」

沙龍の目的は単純明快である。

『木行』のマイスターたる資質を持つ者を見つける。それだけだ。

「とはいっても、一族全員が何人居るかも分かりませんし……」

龍王家の直系のみ、ということなら、それほどの人数は居ない。

しかし、龍王位継承には直系も傍系親族も関係ないというのだから、それこそ、一族中から探し出さなくてはならない。

その大変さを、奏欽は理解している。

理解していないのは、沙龍だけなのだ。

「一人一人、当たってみます？」

「う……。あ、あんまり聞きたくないけど、軽く見積もって、何人？」

「四海龍王家を全て併せれば、それこそ万単位ですかねー……」
遠い目をしながら奏欽が答えた。

「……………」

「……………」

しばし、二人は黙った。

龍族の一人一人あたっていたら、日が暮れるどころの騒ぎではない。

「やっぱ、最初から考え直さなきゃいけないのか……。でもさ、欽チャン。これはキサさんの口癖だけど、人間が考えつくことで不可能なことはないんだそう
だ」

「はあ……」

「で、これは私の姉の口癖だけど、人はそう望む方向に自然と動くものなんだそう
うだ。だから、望んでいる限り、望みつてのは叶うらしい」

「そ、そうですか……」

貴女の脳天気な理由がなんとなく分かりました、という嫌味も出そうになった
が、堪えた。

しかし、沙龍のこういう力技に近い理屈は、奏欽にはひどく心地よかった。いままで、同世代の同性の友人というものが居なかった奏欽にとって、沙龍は少し特別な存在になりつつある。

いや、既になっているのかもしれない。

「『東海の至宝』があれば、すぐ分かると思うんですが……」

「『東海の至宝』？」

「かつて、天帝より拝されたという、東海龍王一族の家宝のことです。龍王家にはそれぞれ同じような『至宝』がありまして、その『至宝』が自ら龍王を選ぶと言われています」

「へー。そういう便利なものがあるのか」

「それぞれの『至宝』は門外不出なので、私は東海龍王家の至宝を見たことはないんですが……」

「具体的にはどんな物なの？」

「宝珠……、もしくは、玉石の類だと聞いてます」

「なるほど。つまり、それさえあれば、宝珠の方から新龍王を選出してくれるわ

「けか」

「実は……」

伏せ目がちに言う奏欽が、声を落として言った。

「いま、その『東海の至宝』を探しているところなんです」

「え？　なんで欽チャンが？」

「話すと長くなるんですが……。その前に、沙龍さん、私をちよつと連れ出してくださいませんか？」

長官室とはいえ、さすがに、管弦府の敷地内でこの話をするのは気が引けたのか、奏欽は自分から窓辺に足をかけて乗り出した。

深窓のお姫様に見えるが、奏欽は結構こういうことを平気でやる。

「飛龍、もうちよいこつち翼傾けて」

沙龍は、奏欽の手を取って、そのまま飛龍の背中に乗り込ませる。

「敖開なら水晶宮まで一時間もかからないでしょう。……行ってくれる？」

「水晶宮に行くのか？」

「そう、お願い」

「分かった」

二人の様子を見て、沙龍は思わず微笑んでいた。

普段、自分を『敖開』と本名で呼ぶ男共には定番のセリフを吐いて敵意すら見せるのに、飛龍は奏欽には寛容なのだ。

それは、飛龍と奏欽が同族で幼馴染だから、というのもあるだろうが、それよりも、飛龍は結局、この歳の女の子に弱いのだろう。

『至宝が龍王を選ぶ』というのは、少し語弊があるかもしれない。

正確に言えば、龍王位を継承する際に『至宝』に認められる必要がある、という程度のものだ。

基本的に、龍王は先代からの指名や、一族からの選出によって決まる。

その上で、それぞれの龍王家の家宝とされている『至宝』に認められることによつて、正式な龍王になれるというのだが、それも、形だけの場合もあると、奏欽は言った。

奏欽自身も、龍王位を継いだときに、父親から『南海の至宝』を拝受した。

それは、能力の低い者が持つてもなにも起こらないが、マイスタークラスの者が手にすれば、形状を変えるのだという。

「五行の氣を高めると、光ったり、形を変えたり……、物によってその変化は様々だそうです」

「へえ……」

「東海龍王家は昔から武門を重んじていたので、私は『龍王劍』こそが『東海の至宝』だと思ってたんです」

「違ったの？」

「あの劍には『至宝』の気配はなかったですね」

奏欽は、風を受けて長い髪が乱れるのを押さえながら、続けた。

「かつての東海龍王敖光様は、その『至宝』に認められた龍王だった、と聞いてます。しかし、敖坤がその王位を継ぐとき、『東海の至宝』は使われず、簡略されたのだそうです」

それは、敖坤が幼い奏欽に話した、かつての東海龍王家でも極秘とされていた

話である。

「敖坤が言うには、その時点で既に『東海の至宝』は行方不明だったのではないかということなんです……」

そうこうしているうちに、水晶宮に到着した。

5 東方軍大将

無人のはずの水晶宮の門前には、人影がまばらにあった。

その様子に遠目に気付いていた飛龍は水晶宮のかなり手前で着地した。三人は少し警戒しながら林道を進む。

水晶宮の周辺は、落葉松の雑木林になっていて、身を隠すには充分なのだが、水晶宮側から見ればこういったリスクをなぜ放置しているのかというと、やはり理由があるらしい。

奏欽も飛龍もその理由を知っているらしいが、龍族以外にはあまり関係がないようだ。

乳白色のクリスタルの門柱が見える頃になると、奏欽が近場の岩に身を寄せたので、沙龍と飛龍もそれに倣った。

「どうして天界軍が……？」

奏欽が見据える先に、東方軍の軍服を着た男たちが数人、右往左往していた。

門前の広場には、簡易司令室のようなものまで設置されている。

「なんか物々しいねえ。なにかあったのかな……？」

戦闘配備、というわけではなさそうだが、それなりの緊張感は漂ってくる。

それも、あの黒装束に抛るところ大なのかもしれない。

元々、東方軍はエリート部隊として知られている。それ故、通常为天界軍共通の軍服ではなく、東方軍オリジナルの黒い直衣を着ている者が多い。

近衛府の真っ白な制服に対抗して黒にしたという噂があるが、歴史で言えば、近衛府は比較的新しいので、逆かもしれない。

帝都防衛を任されている東方軍と、火雲宮の皇族を護衛する近衛府はあまり仲がよくないとのことなので、対抗意識はどちらの側にもあるのだろう。

「ところで、欽チャンはなぜここに私を連れてきたんだ？」

沙龍が小声で聞いた。

「その『東海の至宝』が安置されていた宝物庫というのを、沙龍さんにも見て貰おうと思って」

「でも、いま、至宝はないんでしょ？」

「はい。でも、ちよつと気になるものがあつて」

「ふむ……、しかし、あの兵士さんたちに、中に入るのは止められそうだなー」
沙龍も奏欽も軍人ではない。

なにやら軍事行動をしているような彼らに事情を聞くこともできないし、いまの東方軍大将は面識もないし全く知らない人物だ。

ただ、沙龍も奏欽も『普通ではない一般人』なので、ここで見つかったとしてもいきなり拘束されるようなこともないだろうが、面倒な展開になるのは目に見えていた。

「この宮殿って、いまは欽チャンが管理してるんじゃないの？」

「そうなんです、元々軍事要塞なので、有事の際には軍部に協力する義務があるんですよ」

以前はここの主である敖坤が東方軍大将でもあったので、特に問題はなかったのだろう。

「この厳戒態勢じゃ忍び込むのも一苦労しそうですね。……敖開はここで待ってて」

「分かった。昼寝してるから、戻ったら起こしてくれ」

そう言つて、飛龍は落葉松の木の根元に座り込んだ。

「……で、どうすんの？」

「特に緊急事態って感じじゃなさそうですから、挨拶して堂々として入っちゃいましょう。沙龍さんは、私に合わせてくれるだけでいいですから」

「エエツ！ ……って、おーい、欽チャン」

スタスタと歩いていく奏欽を、沙龍は慌てて追いかけた。

奏欽のこのフットーワークの軽さは、外見からはとても想像できない。

奏欽は目指す相手が誰だか分かっているようで、数人の士官の啞然とした視線を浴びながら、迷うことなく一人の男の所へと歩いていく。

沙龍はそれを追いかける形になったが、二人の着ている物の違いや顔立ちから、その様子は『お姫様と従者』にしか見えない。

誰もが手を止め、華やかな衣装に身を包んだ龍王公主に見とれる中、奏欽の向

かった先に立つ男だけは、その姿を認めながらも、軽く敬礼するだけだった。

「これは、龍王殿——」

数メートル先を足音立てずに近付いてくる奏欽に、男の方が先に声を掛けた。が、男の視線は、一瞬だけ、奏欽の背後に注がれた。

それに気付く者は居ない。

居たとしたら、それは視線を向けられた沙龍本人だけだろう。

「東方軍大将の景春けいしゅん 殿でいらつしやいますね」

奏欽は景春の顔を知っていたわけではない。

ただ、奏欽でなくとも、少し注意力と観察力のある者なら、この男がこの団体のリーダーであることは分かる。

なぜなら、その男からはマイスター・クラスの『木行』が感じられるし、そもそも、存在感が普通の将校とは圧倒的に違う。

男は、大振りの刀剣を腰に下げていた。鞘ごとすぐに取り外せるようになってる。

「これはなにかの訓練、ということでしょうか？」

あくまでも世間話風に、そして、多少居丈高に奏欽が言葉を続ける。

自分の名を名乗らなかつたのもわざとであるが、そもそも、龍王は、第一位の官位であり、天帝以外には、頭を下げる必要はないのである。

奏欽のこの態度は、高飛車な印象を与えたとしても、特に咎められるようなものではない。

「宮殿前にて我が部隊を展開しておりますことを、お詫び致します。ただ、作戦行動中ですので、これ以上の御挨拶はできかねますが」

東方軍大将はにこりともせずと言った。

睨んでいるのではないかと思えるほど、鋭い視線のまま、奏欽を見据える。和やかとはとても言い難い雰囲気になった。

「東海龍王不在の現在、水晶宮は私が預かっております。たまに、不逞の輩が入りせぬよう、こうして様子を見に来ておりますが……、東方軍の方々はその『不逞の輩』を退治でもして下さったのかしら？」

奏欽は笑みを浮かべて言った。

しかし、この先制攻撃にも、景春は動じることはない。

「さて……、南海龍王の威光に畏れをなして、『不逞の輩』もここには近付かないと思われませんが」

「……」

沙龍は、奏欽の背後でとりあえず大人しくしていた。

なるほど、このいかにも隙の無さそうな男が、現在、天界で一番忙しいと評判の東方軍大将か。

眼光がやけに鋭いが、裏を返せばそれは『若さ』だと沙龍は思っている。

景春は見た目でも、実年齢でも、遥かに沙龍より年上のはずなのだが、少なくとも、このときの沙龍はそう思った。

「そうそう、忘れ物を取りに中に入りたいのですけど、よろしいかしら？」

許可を求める言い方であっても、実質は、単なる意思表示である。

自分の管理している建物に入るのに誰の許可が要る、と奏欽の声と瞳は強く訴えていた。

しかし、沙龍の見た所、この男には、奏欽の容姿も、龍王という地位もあまり効果は無さそうだ。

「お急ぎですか？」

景春が少し困ったような顔をしたので、やはり、簡単には中へ入れそうになり、と沙龍は思った。

「物がなにかを教えて頂ければ、部下に探させて、持ってくるように言います
が」

やはり、中に入られたら困ることがあるようだ。

奏欽も沙龍も、別に急ぎの用ではないので、出直してきてもいいのだが、奏欽は怯まなかった。

「それは、もう。すごく急いでますの。離縁状を叩きつけられる危機が迫っているくらいにですわ」

攻撃方法を切り替えたらしい奏欽は、大袈裟にセリフに抑揚をつけて、言った。

「……と、仰いますと？」

「実は、先の事件の折に、ここで結婚指輪をなくしてしまつて……。それが夫に露見したら大変なことになってしまいます。探して頂くようにも、小さな物です

し、女性にしか入れない場所にあるかもしれないので」

うまい、と思わず沙龍は心の中で唸った。

「結婚指輪——ですか？」

景春は氣勢を殺がれたような表情を見せた。

「……あの陽輝が？」

結婚指輪なんか贈るのか？　と言いたげだ。

「ええ、ですから、やはり、心当たりを自分で探した方が効率的ではありませんか？」

周囲の士官や兵たちは遠巻きに控えているが、緊張感を持って注視している者より、奏欽の笑顔に鼻の下を伸ばしている者の方が断然多い。

「緑麗様も一緒に探して下さるとのことなので、そう長くはかからないと思いますわ」

奏欽がそう言ったとき、周囲のヤジ馬たちの空気が変わった。

沙龍は、奏欽と違って、あまり顔は知られていない。

しかし、奏欽よりも名前は知られている。

つまり、『あの緑麗が、どこに？』というどよめきが、無言で広がったのだ。

そして、『それ』が奏欽の背後に居る従者のような少女だと分かると、今度は別の意味でどよめきが広がる。

が、景春は、最初から了解していたようだ。

奇しくも、景春は沙龍と同じような思考で、この得体の知れない少女を『己の能力は隠すタイプか』と判断していた。

「奥殿を始め、プライベート・エリアに関しては、東方軍の方々といえど、勝手に入れる場所ではありませんし」

「……」

奏欽の最後通牒のような言葉に、景春はかなり長いこと沈黙した。

しかし、それは返答に窮した沈黙ではない。

「本来なら、すぐにでもお通しすべきですが」

長い沈黙を経て、景春がゆっくりと言葉を探すように言った。

が、その言葉が終わらないうちに、待ちくたびれた沙龍が口を開く。

「時間稼ぎは終わったのか？」

「……」

景春は身動きひとつしなかつたし、表情ひとつ変えなかつたが、傍に控えていた副官が目を見開いてしまった。

それを見て、沙龍は苦笑した。

「いくら大将が有能でも、周囲がバラしちやしようがないな。……欽チャン、行こう。撤収は終わったようだ」

なんの撤収か――。

それは、この場に居る全員がほぼ分かっている。

奏欽も溜めていた息をひとつ、短く吐いて、景春を見る。

「報告書をどこに提出なさったのかは分かりませんが、今後は行き違いにならないようにお願いしますわ」

「……」

これは東方軍大将にも効いたようだ。

報告書など、提出していない。

そんなものは義務づけられていないし、いままでには必要なかつたのだから、

しようがないのだが――。

見た目には女学生のような二人組が水晶宮に入っていくのを見送りながら、景春の副官、冬踐とうせんががっくりと肩を落としている。

「申し訳ありませんでした。大将」

「いいさ、別に法を犯してたわけでもない」

しかし、景春は内心、してやられた、と感じていた。

最初から、要注意は後ろの方だ、と思っていたはずなのに、やはりどこかで舐めていたのかもしれない。

「しかし、よろしいのですか？ お二人を行かせて……」

「さて、龍王殿が言ったことが本当かどうかは分からんが……。まあ、なにか気付いた所で、あの二人なら大丈夫だろう」

「なぜです？」

「知らんのか？ 南海龍王殿のご亭主は俺の同僚だし、そもそも、この命令を下

したのは緑麗様の情人だ」

「ああ、なるほど……。しかし、あの美女二人は、なんの用でここに？」

「美女は一人だろう」

景春は笑った。

いままでの仕事の顔が急に崩れたような笑顔に、周囲を取り巻いていた士官たちもホツとしたようだった。

「単なる物見遊山なら、大目に見るさ。この前のガキみたいなのも居るしな」

「ああ、へんな子でしたね」

景春と冬踐が言っているのは、目つきの悪い鸞に乗っていた少女のことである。

その少女はつい先日、『新しい東方軍大将を見にきた』と言って、火雲宮の敷地にある、東方軍の本部にやって来たのだ。

一般市民は立ち入り禁止の場所なので、数人の兵士が追い出そうとしたのだが、できなかつた。

まだ子供だから、と最初はやんわりと叱るだけだったのが、いつの間にか少女

に言い含められて、大将に取り次ぎをする羽目になってしまったのである。

景春は、最初、放っておけ、と取り合わなかったのだが、気付けば霊獣の一人漫才ショーになっていて、場を収めるために出て行ったら、少女は言葉通り『東方軍大将に会えたから帰る』と言って、そのまま本当に帰ってしまったのである。

景春はそれを、春先はおかしい奴が出てくる——という結論にした。

霊獣を持っているということとは、それなりの人物には違いないのだろうが、どこかのVIPの子供の気まぐれにはいちいち付き合ってもらえない、というのが景春の弁である。

「主を失った宮殿に、曰くつきの二人か……」

景春は、水晶宮の尖塔を見上げて、少し目を細めた。

6 宝物庫のラクガキ

二人は薄暗い廊下を、なんとなく示し合わせたように無言で歩いている。

奏欽は憂鬱で口を開く気になれず、沙龍は『なぜ』を考えているのだ。

東方軍の連中がここでなにをしていたのか、二人とも最初から勘付いていた。

それが決定的になったのは、あの副官が見せた狼狽だ。

「なんか、油断できない感じの大将だったなあ……」

沙龍は、『なぜ』の答えが大体出たので、軽い世間話を始める。

しかし、奏欽は気が晴れぬまま、適当に相槌を打つだけだ。

「ええ、切れ者だって評判です。九雷元帥の推挙で大将に着任されたとか」

「ふーん……。VIPになびかないところは、確かに元帥の好きそうなタイプだよな」

「九雷元帥は、一体、どういうつもりなんでしよう？」

話題ついでに、奏欽は尋ねた。

それは、沙龍がこの廊下を歩く間に考えていたことでもある。

『天界軍は、なぜ、五行砲を修復しようとしているのか——』

答えは簡単である。

『東方の護りを固める』の一番簡単なのは、武力強化である。

だから、彼らは水晶宮が、いや、天界が誇る最強の武器とされている『五行砲』を修復しようとしているのだ。

外敵を一掃したいのなら、これひとつあれば足りる。

しかし、この武力は人界で言うところの『核』である。

持つてはいても、撃つてはいけない類のものだ。

だからこそ、奏欽は、先日のクーデターの折に、水晶宮と共に心中する覚悟で、これを破壊しようとした。

なぜなら、この『五行砲』を造ったのは自分の先祖である、初代南海龍王だからである。

奏欽は、その責任を強く感じているのだ。

しかし、切れ者と評判の新任の東方軍大将が、いま、その五行砲を修復しようとしている。

奏欽が憂鬱になるのも当然である。

が、沙龍が考えたのは、もう少し違うことだった。

『なぜ、九雷は五行砲を修復させているのか』

その答えは、すぐには出なかった。

長い廊下を歩いて、宝物庫の前まで来て、やっとひとつの答えらしきものが出た。

奏欽はその答えを問うているのだ。

「あのさ、欽ちゃん。別に自分の恋人を自慢するわけでも、ノロけるわけでもないんだけど、元帥の目的は他にあるような気がする」

「……………？ どういうことです？」

「上手く言えないんだけど、あの人の思考パターンとか、性格とかを考えるに、核ミサイル用意してハイ終わり、ってことはしないと思うんだよね。例えば、内通者向けに、ちゃんと修理してんだぞーっていう事実だけ作ってるとか、そんな感じ？」

「なるほど……」

しかし、奏欽はあまり納得はしていないようだった。

「大体、陽輝に破壊してもらったあの反射鏡って、ものすごい希少価値の鉱石で作ったものらしいじゃん？ 同じものを作ろうとしてすぐできるようなもん？」

「どうでしょう。南方軍の研究施設なら可能かもしれないませんが……」

「その施設って誰の命令で動くの？」

「表向きは、南方軍大将、私の兄です」

「裏向きがあるの？」

「ええ、多分、ラボは未だに父が実権を握っているのだと思います」

「ふーん……」

「でも、四方軍の大将は結局、九雷元帥の命で動くわけですから」

沙龍は、なんとなく居心地の悪さを覚えた。

奏欽は九雷を責めているわけではないし、沙龍を責めているわけでもないのだが、『あんなものを作り直すなんて……』というニュアンスは確かにある。

しかし、

「ひとまずは、『東海の至宝』が先ですね」

暗証キーを押して、宝物庫のドアを開けた奏欽は、もう気持ちを切り替えているようだった。

水晶宮の宝物庫には、数千年前にそこにあったはずの『東海の至宝』を収納していたケースだけが残されていた。

その隣には、大振りの剣を納めておくための縦長のケースもある。

恐らく、ここが『龍王剣』の収納場所だったのだろう。

沙龍も使ったあの剣は、クーデターが鎮圧された後、軍部に徴収されたようだ。

「ダイヤモンド……じゃないよね」

沙龍は、直系十センチにも満たないその台座の窪みを見て言った。

宝珠というから、相当大きなものを想像していたのだが、このサイズなら片手に収まる。

龍王家の家宝になるくらいだから、大きさよりも、その物質が秘めている力が重要なのだろう。

「これです。ちよつと見て下さい」

奏欽が台座を覗き込むようにして、指で示した場所には、短い一文が彫られてあった。

「うーん？ 小さくてよく見えないな……」

「私、実はここに入るの二度目なんですけど、最初に見つけたときは意味が分からなくて……、誰かの悪戯かと思ったんです」

「『リンリン参上！ お宝は頂戴した』……？」

なんとか読もうとすると、そんなふざけた文章になった。

沙龍は虫眼鏡が欲しいと思ったが、奏欽にはこの小さな文字が難なく見えるら

しい。

「リンリン……、って誰やねん」

「私、これを書いたのは東海龍王家の直系か、もしくはそれにすごく近い人じゃないかと思うんです」

「なんで？」

「基本的に、宝物庫に入ることができるのは龍王本人だけですが、敖光様が持ち出したというのは考えにくいので、単純に、近親者かなって」

「ふむ……。敖坤が龍王位を継承したときは、もうなかつたんだよね？ でも、その敖光さんだっけ？ その人から敖坤に代替わりしたとき、普通は儀式で至宝を使うわけでしょ？ で、至宝がない！ って、騒ぎにはならなかつたのかね？」

「いえ、敖光様は、事故死なさつたそうですから、継承の儀式はやらなかつたんだと思います」

「事故死？」

「ええ……。まあ……。実際には暗殺されたそうですけど」

「誰に？」

奏欽は答えるのを躊躇ったが、沙龍なら別に構わないだろう、と思った。

「将神哪咤太子です」

それは、火雲宮に出入りする者なら、大抵は誰もが知っている話である。

「将神？」

「ええ、緑麗様の前任だそうです」

「ふーん……、確か、飛龍の『憧れの人』だったな……」

沙龍の認識はその程度である。

別に過去の事件に興味はないし、暗殺だろうが客死だろうが、どうでもいい。

「で、このラクガキは、その敖光さんの近親者が書いたの？」

「調べたんですが、東海龍王家の中に、『リン』という文字の入った名前を持つ

人が一人居るんです。正確には巽凛^{シユンリン} 公主という御方で、敖光様のすぐ下の妹に

当たる方です」

「その人が、『東海の至宝』を持ち出した犯人？」

「恐らく」

「で、そのリンリンさんは、いま、どこに？」

「もう、お亡くなりになってるはずです。随分昔に、地上に降嫁された方だそうですから」

「へえ、そうなのか。……って、ちよと待て。じゃ、もしかして、そのリンリンさんが、一族の家宝を嫁入り道具にしちやったんじゃ……？」

「かもしれないです」

「えええっ!？」

「ですから、つまり——」

「っ、つまり？」

「東海龍王を選出するためには、龍族一人一人、数万人を地道に当たってみるか、地上のどこに行ったか分からない『至宝』を探るか、どっちが早いかって話ですかねー……」

奏欽が、またしても遠い目をして言った。

「ふ、振り出しに戻ってしまったではないか……」

「ただ……」

「ただ？」

「沙龍さんなら、ここに来ればなにか分かるかと思って」

「な、なんで？ 私は龍族とは関係ないし、リンリンさんのことだって、いま知ったくらいで——」

「ちよつと手を……」

それは、奏欽の直感だった。

“沙龍ならなにか分かるかもしれない”——というのは、奏欽にも、はっきりした根拠があるわけではない。

言われるがままに左手を差し出した沙龍は、そのまま、奏欽の誘導によって、台座の窪み部分に乗せた。

「一瞬でもいいです。なにか感じるものがあつたら、そのイメージを膨らませて下さい」

奏欽の白い手が、沙龍の左手を包むように重ねられた。

こんなことをやってなにになるといふのだろう、と沙龍は思ったが、目を閉じて、わけが分からぬままに神経を集中させた。

自分は超能力者でもないし、霊視ができるわけでもないが、奏欽は間違いなく、『二行マイスター』という高い神通力を持った『龍王』である。

自分になにか妙な能力があるとしたら、奏欽が引き出してくれるだろう、と思うことにした。

(なにも感じないけどな……)

閉じた瞳にはなにも映らないし、これといったイメージも沸かない。

しかし、沙龍がひんやりとした水晶の台座から手を離そうとしたとき、一瞬だけ、クスツという笑い声が聞こえた気がした。

それは、ごく小さな、微笑みのような自嘲のような笑いである。

同時に、哀切も感じた。

それを、逃さぬようにイメージすると、なぜか、男性の画像になった。

「誰……？ いや、知ってる、この人……」

その沙龍の眩きは、奏欽にも聞こえている。

「青い髪ですね？」

「うん。でも、敖坤じゃない。似てるけど……、全然違う」

「敖光様……?」

「いや、違う……。多分、違う……。——あれ?」

そこで、沙龍の描いた画像はプツリと切れてしまった。

画像が消えたから目を開けたのか、目を開けてしまったから画像が切れたのか、分からなかった。

「お疲れ様。大丈夫ですか?」

奏欽が尋ねても、沙龍は数秒、反応できなかつた。

「多分、沙龍さんがいま見た映像が、ここから『至宝』を盗っていった人の強い感情です」

「そ、そうなの?」

「誰が見えました? もしかして、敖広様ごうこうですか?」

「うん——。多分、そう……。敖坤によく似ていて、でも、お父さんじゃないってのは分かった。敖広さんって、先代の青龍で、敖光さんの双子のお兄さんだよ
ね?」

「そうです。写真、見ます?」

奏欽は、端末を取り出して、素早く検索し、小さな画面を沙龍に見せた。

火雲宮のデータバンクにある公式画像で、『青帝青龍せいせいりゆう広君』とある。

「そう、この人。でも、なんで龍王とは関係ない敖広さんなんだろう？ 至宝を
持っていたのがリンリンさんだとしても、他の人だとしても、よく分からん話
だ……」

「そうですね……。やっぱり振り出しに戻っちゃいましたね……」

「あー、えーと、欽チャン？ ところで、その、欽チャンはなんで『東海の至
宝』を探し始めたのかって話を、聞いてなかったような気がするけど？」

「ああ、それはですね……。龍王家にはそれぞれ至宝があるって話をしましたよ
ね？ 四海龍王、一人ずつ、至宝を持ってるわけですが、その四つの至宝を集め
ると、神龍が出てきて、なんでも願いごとを叶えてくれるという……」

「……ハイ？」

「……のは冗談です」

「……」

奏欽も、色々疲れてるのかもしれない、と沙龍は思った。

「と言っても、あながち間違つてはいないんですが……。四つの至宝は、元はひとつの神器だったそうです。それを、龍王の官位制定と共に、当時の天帝陛下が四つに分けて、それぞれの龍王に下賜されたそうです」

「ふーん。『神器』ねえ……」

胡散くさつ、と思つたのは言葉にはしなかったが、顔には出てしまったかもしれない。

沙龍はそろそろ面倒くさくなつてきている。

「まあ、振り出しに戻ってしまった所で。今後のことをじっくり考えるためにも、帝都に戻ってお茶でもしようよ」

「そうですね」

奏欽が嬉しそうに微笑んだ。

「あ……」

奏欽が水晶宮の正面玄関に差し掛かったところで、足を止めた。

そして、徐に、沙龍に左手を見せる。

口実に使った『指輪』が見つからないのに、このまま出ていっていいものだろうか、という意味だ。

「『見つかりませんでした』で大丈夫でしょ。どうせ、嘘だつてバレてる」
沙龍はそう言ったが、その必要すらなかった。

二人が正面玄関を抜けて、門前の広場に戻ってきたとき、そこは無人だったからだ。

そんなに長居をしていたつもりはないが、東方軍の連中が引き上げるには十分な時間は滞在したし、もうそろそろ陽も落ちる時間だ。

「欽チャンに五行砲のことがバレたんで、そそくさと帝都に帰ったのかな」

「特務（※特殊任務作戦部隊。四方軍には属さず、元帥の直属となっている）あたりが菓子折り持って、『どうぞご内密に』って言いにかきそうですね」

奏欽が笑いながら言うので、沙龍も冗談で返した。

「菓子折りよりも、茶碗蒸しの方がいいな」

やけにシーンとした静寂が気になったので、沙龍は会話を続けながら背中後ろに手を回していた。

「キサさんの作る茶碗蒸しはね、純和風なんだ。これがもう、最高に美味しいんだけど……」

「……」

奏欽も視線を左右に走らせて、懐剣を確認した。

「たまに、中華風も食べたくなるんだよね」

「今度、作りましようか？」

「うん。楽しみだなー。……飛龍、起きろ！」

既に聖魔剣を手に、刃を起動させた沙龍は、雑木林に向かって叫んだ。

その直後に、殺気と風圧が来る。

(上!?)

しかし、沙龍が頭上にかざした聖魔剣に、ダメージは来なかった。遅れて、爆発音が轟く。

「……起きてるぞ」

滞空する飛龍が、金磚（※飛龍の宝貝のひとつ。中距離用の飛び道具）を構えた格好で無表情に言った。

いま、飛龍が吹っ飛ばしたものを、沙龍ははっきりとは視認していないが、『敵』であることに間違いはない。

「な、なに、あれ……!？」

奏欽の声は、雑木林よりもやや右側の海岸線に向けられている。

そこには、異形としか言い様のない化け物が湧いていた。

甲冑ロボでも人型ゾンビでもない、強いて言えば、猛獣のような巨躯を持った黒々としたものだ。

数は無数。

ざっと見て、十体くらいは居た。

地を這っているものが半分、浮遊しているようなものが半分、である。

「また、知能のなさそうなバケモンがぞろぞろ……」

飛龍は放っておいてもいいが、奏欽はどうだろう、と沙龍はチラツと背後を見る。

特に怯えている様子もないので、ひとまずは迫り来る一匹の巨軀に集中した。

ヒグマのようにも見えるその獣は、明確に、沙龍を獲物として認識しているようだった。

それを迎え討つために、沙龍は数歩走り、ヒグマのワンストロークを直前で回避した。

沙龍の居た場所の地面が、無残に抉れ、土くれや石が飛び散る。

動きはそれほど早くはないが、攻撃はその巨軀を裏切らないほど、重い。

沙龍は、そのヒグマの繰り出した腕を足場に頭上に飛び乗ると、聖魔剣でヒグマの脳天を突き刺した。

「……っ!？」

しかし、人間なら、いや、生物なら動きを止めるはずのその攻撃も、この巨軀

には効かなかった。気味の悪い咆哮と共に、巨体を揺らめかせる。

沙龍は振り落とされそうになったので、聖魔劍の柄を一旦離して、ヒグマの二メートル先に自ら着地した。

チラッと上空を見ると、大きな怪鳥としか言いようのないものが二匹、自分の頭上を越え、水晶宮に向かっている。

さつき、飛龍が金磚で焼き払ったのは、この怪鳥もどきだろう。

奏欽が気になったが、沙龍は振り返る余裕はなかった。

奏欽は、裾と袖の長すぎる上衣を脱ぎ捨て、両手に火炎を出現させていた。躍るようなその炎は、奏欽の意のままに動く。

ただの炎ではない。『火行』を極めた者のみが扱える、『地獄の業火』である。

『火行マイスター』の力量とは、この地獄の業火を、どれだけの規模と威力で操れるかで判断できる。

その『火行マイスター』の頂点に立つ赤帝君は、この火炎で、数キロの範囲を一瞬にして焼き尽くすことができるが、奏欽に出来るのは、せいぜい自分の周囲の十メートルほどである。

が、それでも充分と言えた。

この火炎を纏った奏欽には、同じ『火行マイスター』の実力を持った者でない限り、近付けない。

炎に少しでも触れれば、呆気なく灰になるのだ。

「愚か者が……、獣でさえ火を怖れるというのに」

いま、一匹の怪鳥が、奏欽を標的に突っ込んできて、瞬時に灰となった。雄叫びすら、火炎に吞まれた、という感じだ。

「獣以下、ということか」

奏欽の目は、この炎の中にあつて、ひどく冷たい。

戦闘モードというより、これが奏欽の龍王モードで、こういうシチュエーションで、受動的にしか発動されないが、沙龍が心配する必要はないのである。

もう一匹の怪鳥は、仲間の死に様を見て怯んだのか、奏欽の上空を旋回しはじ

める。

が、奏欽は、容赦なく、右手で一筋の炎を鞭のようにならせ、その上空の敵をも焼いた。

聖魔剣に串刺しにされたままのヒグマが平気で動き続け、沙龍にさらにワンストロークお見舞いしようとする。

「このデカブツ……っ！」

沙龍は、自由になった両手で、瞬時に『氣』を高めて腰を落とすと、ヒグマが腕を最大限に振り上げたところで、巨軀の中心部分に直に拳を捻じ込んだ。

この拳の衝撃は、拳法を極めた者以上の威力がある。

幼い頃に体得した『武当拳』に、さらに『黄龍』の無尽蔵の『土行』を取り込んで、上乘せしたものだからだ。

殺すつもりの一撃である。

しかし、やや姿勢を崩しながらも、ヒグマはまだ動けるらしい。

「不死身かよ！」

何度か、ヒグマの攻撃をかわしながら、もう二度、三度、拳を考え付く限りの急所に打ち込んでみたが、やはりダメージは与えられなかった。

(物理攻撃じゃ倒れないのか！)

沙龍が絶望しかけたとき、奏欽の声がした。

「沙龍さん、伏せて！」

反射的に頭を下げると、頭上におびただしい熱量を感じた。

うねりを持った火柱ならぬ、横一線の火炎が、沙龍の頭上を通り過ぎて、ヒグマの巨軀を捉えていた。

その火炎に包まれたヒグマはやっと動きが止まり、沙龍の目の前で急速に灰と化した。

「……す、すご」

沙龍が初めて見る奏欽の五行術だった。

カラン、と柄になった聖魔剣が落ちる。やはり、この剣は特殊らしい。

『火行マイスター』たる奏欽の五行術にあっても、焼き尽くされることはな

い。

「謝謝、欽チャン」

「まだ来ますよ！」

奏欽が叫ぶ。正面を見れば、二体の猛獣が、沙龍めがけて迫っていた。

海岸線の向こうでは、飛龍が猛獣たちの一団に向かって金磚を撃ちまくっているが、ああ闇雲に撃っては効率が悪そうだ。

「うへー、時間、掛かりそう……」

念のため、足先で聖魔劍の柄に触れてから、それを拾い上げると、ほんのりと熱は感じた。

が、火傷するほどではない。

「仕方ない……、疲れるが、この戦法で行くか」

沙龍は聖魔劍をもう一度起動して大地に突き刺すと、にわか覚えた方法で、自身の『土行』だけではなく、大地から全ての力を奪い取るように、集めた。

物理攻撃メインにしか戦えない沙龍には、その攻撃に多少『土行』を加味する、といったことくらいしかできない。

その『土行』の具合が大きければ、少しは戦力になるだろう、と思ったのだ。無駄かもしれないと思いつながら、『土行』マックス状態の聖魔剣を振るい、一体の巨軀を、今度は突くのではなく、斬った。

「……っ？」

しかし、真つ二つにしたつもりは敵は、どこにも傷を負っていない。

「左だ！」

その声に促されるように、聖魔剣を左側にかざすと、そこに鋼鉄のような重い攻撃が来る。

かろうじて防げたが、このままじりじりと力比べをしていたら、背後から襲ってくるもう一匹に確実に八つ裂きにされる――。

沙龍は、黄龍召喚をしようとしたが、到底間に合わないだろう、と思った。なら、これしかない、と右手で、背中に差し込んだ小柄に手を掛けたが、そのとき、ズシン、という重い地響きが背後でした。

更に、ヒグマの腕を止めている聖魔剣が、フツと軽くなって、そのヒグマが後ろに吹っ飛んだ。

「……ちよと待て」

黒い軍服が目に入った。

が、沙龍は、自分の背後に迫っていたヒグマを真っ二つにし、更に、もう一匹を首を刎ねて吹っ飛ばした男の剣筋が見えなかった。

沙龍が息を呑んだときには、その男は、既に大振りの刀を鞘に納めているところだった。

鍛え抜かれた分厚い体に、鋭い瞳――。

東方軍大将である。

「下がってろ、二人共！」

それは完全に怒っている口調だった。

「景春殿!？」

奏欽がそう言うまで、沙龍はこの男の名前を忘れていた。

が、沙龍は、景春の名前などどうでもよく、真っ二つにされた方のヒグマが、塵になっていくのを見つめているだけだった。

（なんで……？ 物理攻撃は効かないはずなのに、なんでこの男は、真っ二つに

できたんだ……?)

それを考えている。

景春は動かない沙龍を見て、更に苛立った。

「聞こえなかったのか？ 俺は下がってると言ったんだ！」

沙龍は面倒くさそうに顔を上げると、小さな子供なら泣き出しそうなほど怖い視線をぶつけてくる景春を、三白眼で睨み返した。

「天下の緑麗様と、天下の龍王に向かって、『下がってろ』とはイイ度胸じゃないか」

沙龍の挑発的な言葉とは裏腹に、奏欽の方は『彼ら』の邪魔にならぬように、少し後退して距離を取っていた。

駆けつけたのは景春だけではないのだ。

エリート揃いの東方軍の中でも選り抜きの精鋭陣が数人、戦端を開いている。

その攻防の中で、余計な意地の張り合いと思えるような睨み合いが、沙龍と景春の間に交わされる。

「手こずってるようだから、力を貸してやる、と言ってるんだが？」

「誰が頼んだ」

護られることに慣れていている奏欽はいいとしても、背を向けた途端に殺られるような世界に居た沙龍は、こういう場面で素直にこの場を譲ってやるわけにはいかない。

参戦するのは勝手だが、こういう物言いをする男に感謝をする気はなかった。

「可愛げのない女だな。それとも、バカなのか？ 大人しく護られてろ！」

「ふざけんな。貴様に護ってもらう義理も、命を預けられる信をやった覚えもないんだよ」

沙龍は、石段に座って観戦モードに入っている奏欽を確認してから、飛龍に合流すべく、海岸線に向かった。

「……。理解不能だ」

景春は啞然として、沙龍を追いかけようとしたが、そのとき、奏欽がクスツと笑った。

思わず振り返って睨んだものの、奏欽は「どうぞ、追いかけて下さい」という顔をしている。

舌打ちして沙龍を追う景春は、

「俺を任命したのは九雷元帥だぜ!？」

つまり、お前の婚約者の意を汲んでここに居るのだから、お前に文句を言われる筋合いはないと言いたいらしい。

数時間前に会ったときとは随分違う口調だが、彼の本性はこちらだろう。

「それとこれとは話が違うんだよ、將軍！」

沙龍は後ろを見もせずと言う。

『大将』を、『將軍』と言い間違えたことに気付くこともなく、上空の飛龍に『降りてこい』と目で合図した。

「緑麗！俺の金磚が鳥にしか効かないぞ！」

「分かってる。こいつら、多分、『亡者』の親戚だ。プテラノドンの方は、格下なんだから」

一向に減らないヒグマたちの動き方が、以前、黒の森で見たゾンビや、冥府で遭遇した化け物に似ているのを沙龍は思い出していた。

確かに、亡者には物理攻撃は効かない。

しかし、『ものすごい物理攻撃』なら、ある程度は効く、ということを経験として知っている。飛龍も経験として知っている。

とすれば、その『ものすごい物理攻撃』さえ通じないヒグマたちは、もう、単なる亡者ではないのだろうか。スーパー級だ。

「亡者？」

「魂魄体の成れの果て、だ。ヒグマの方はマイスター・クラスの五行術じゃないと倒せないようだ。飛龍と私は役立たずってことだな」

「……っ」

飛龍が抗議しかけたが、沙龍はそれを手で制する。まだ続きがある、聞け、という仕草だ。

沙龍はざっと辺りを見渡した。

数人の黒い軍服を来た将校たちが、次々とヒグマをなぎ倒していくが、楽勝というペースではなかった。

「しかし、なんの脈絡もなく、知能もない亡者がぞろぞろ現れるはずがない。誰か、こいつらを操ってるヤツが居る。そいつを叩きに行くぞ、飛龍」

飛龍は合点して龍形態になると、沙龍はすぐに乗り込んだ。

「待て、どうする気だ！」

景春が叫んだ。

「聞いてなかったのか？ 頭を殺れば終わりだろう」

「だから、待て！」

「將軍、欽チャンを頼む！ 飛龍、行くぞ！」

「なんて無茶を——！ どこに居るのか分かってるのか!? それに！ 俺は『將

軍』じゃない！」

飛龍の羽ばたく翼の音で、その言葉は掻き消えた。

景春は、もし目の前に敵が居たら、あらん限りの力で一刀両断にしたい、という気分だった。

しかし、いま、手ごろな敵は数メートル以内には居ない。

仕方なく、奏欽の居る場所に戻った。

『欽チャンを頼む』と言った沙龍の言葉通りにするのは忌々しいが、敵は部下たちに任せても大丈夫だと思っただし、なにより、いくら龍王とはいえ、戦場の中

で女性を一人放置しておくのは景春の軍人としての矜持が許さない。

いまにもなにかを殴りつけそうなほど不機嫌な顔をしている景春に、奏欽はまた苦笑を見せた。

「仕方ないですよ。沙龍さんは将神ですから」

景春の心情を慮って、奏欽が言った。

「元——、だろう」

「強い女性はお嫌い？」

「好きとか嫌いの問題じゃない。あんなガキみたいな民間人に、作戦を台無しにされて、気分がいいわけがない」

「その『作戦』に、事前に邪魔が入らないようにしなきゃいけないかった自分の非は棚上げですか？」

景春は、言い返す言葉が見つからず、一層、眉間に皺を寄せた。

が、美女に優しく言われれば、それが嫌味だとしても許せる気になってしま
う。

だから、沸騰しそうだった怒りを、なんとか鎮めるためにも、大きく息を吐い

た。

「あんたは……、さすがに、自分の役目ってのが分かってるな」

「沙龍さんだって、理解してますよ。だから、ボスを倒しに行ったんでしょ？ 敖開じゃなければ、見つけられないでしょうから」

景春は、「そんなこと分かってる」と言い返そうとしたが、すぐに「本当に分かってたか？」と自問した。

確かに上空から索敵できなければ、亡者を操っている人物を見つけることは難しい。

しかし、敵が誰かも分からず、その能力も分からないのに、闇雲に向かっているのはやはり無謀だ。

爪を隠すタイプだと思ったのは、大間違いだった。あれは猪突猛進そのものではないか――。

「奏欽殿は、心配じゃないのか？ あのガ……、いや、緑麗を信用しているとでも？」

景春はひとまず、奏欽に対しては紳士的に振舞おう、と思った。

あっちの無鉄砲なガキは論外である。

「戦闘に関しては、沙龍さんはプロ以上です。当然、信用に足るでしょう。でも、私が彼女を信頼してるのは、腕じゃなく、こっちです」

と、奏欽は、自分の胸に手を置いた。

「……大した、信頼関係だな」

景春は馬鹿にするように言ったが、奏欽は気にしなかった。

沙龍が無事にここに戻ってくれば、景春の言葉は全て遠吠えにしかならなくなる、というのを心得ているからだ。

「それで、『將軍』はなぜ、ここに戻ってこられたんです？」

「……なぜそう呼ぶ」

「……？ ああ、ごめんなさい」

奏欽も、先ほど、聞いていたのだ。沙龍が咄嗟にそう呼んでいたのを。

しかし、景春はそのことについて、それ以上追求はせず、

「……婚約指輪を忘れたんでな」

とだけ言った。

「……」

奏欽は嘖き出しそうになったが、かろうじて堪えた。

飛龍はその人物をすぐに見つけた。

背の高い落葉松の木の上に、人影がある。

体型からして男だろうと思ったが、女性と見紛うほどの線の細さである。

近付いて見ると、顔立ちもやはり女性っぽかった。

「早かったですね」

横笛のようなものを吹いていた男——少なくとも、声は男だった——は、待ち合わせでもしていたかのような口調で、沙龍に声を掛けた。

白っぽい、薄手の衣をまとったその姿は、どこかで見たような気がする。

黒い髪と瞳からして、『異民族』という感じはしなかったが、沙龍は、いま、この男が日本語で話したことに気付いた。

人界と違って、そう意識しないと、ここでは語学の壁はない。

「何者だ？ 水晶宮になにか用か？ 観光に来たのなら、チケット売り場はここ

じゃないぞ」

「おや、こんな所で同郷の方に会えるとは思ってませんでした」

「日本の『神』か——」

沙龍は、なんとなくこの男の姿に見覚えがあると思ったのは、テレビで見たドラマだと思い出した。

確か、平安時代の頃の話で、陰陽師が出てくる。

その主役の陰陽師の傍らに控えていた式神の一人が、こんな装束を着ていた。

「いえ、神とは少し違いますが……」

「神でも魔でもどっちでもいい。それなりの覚悟があつて遠征に来たんだろう。

言い残すことはあるか……？」

沙龍が最初からフルパワーで臨んだのは、得体の知れないこの敵のキャパシティのせいである。

この敵がどんな技を使うのかは分からないが、五行とは全く違う、力の質を感じる。

「そうですね……、『身元不明』のままだと色々不都合があるので、名乗ってお

きます。私は経津主……と言つても、『本物』ではありませんけどね」

「……？ 本物とか、偽者とかも、この際どうでもいい。亡者をけしかけておい
て、無傷で帰れると思うな！」

沙龍が左手を掲げた途端、空を割るように、なにかが走った。

もともと曇天だったが、辺りが皆既日食のように暗くなったときには、経津主
も落葉松から飛び退っていた。

「残念ですが、時間切れです。『それ』はまた今度、ゆっくり見せて頂きます
よ」

「……っ!？」

「すいません、逃げられました」

特に悪びれる様子もなく、沙龍は景春に一言、そう言った。

「はあ!？」

沙龍の感覚では報告してやる義理もないのだが、一応、結果だけは伝えておこ

う、ということらしい。

しかし、バツの悪い思いをして当然のはずのことを、こうも堂々と言い切る奴を、景春は知らない。

「あんだけ偉そうに啖呵切っておいて、『逃げられた』だと!? なんてザマだ! だから、大人しくしてると言ったんだ! 大体——」

景春の延々続くような罵倒は、周囲の部下に止められた。

沙龍は、その言葉すら馬耳東風で、ちつとも応えていない。

奏欽の前まで来て「じゃ、帰る?」などと言ってる沙龍は、景春の名前も忘れてるに違いなかった。

「待て、お前は敵の顔を見たんだろう? 名前は聞いたか? どんなヤツだった?」

景春は、怒り顔のまま、飛龍に乗り込む沙龍を引き止めたが、沙龍はもう『本日の行動量』を超えている。

こんな暑苦しい職業軍人にこれ以上、付き合ってはられない。

「えーと、名前はフ……、フツクン? 顔は、歌舞伎町のゲイバーで働いてるよ

うな感じ」

「……。ちよつと待て。『フツクン』？ 歌舞伎町ってなんだ」

「いや、もうそれ以上説明すんのメンドイし、私は欽チャンとお茶したいんで、帰るわ、じゃ」

「……………！」

景春が、また罵倒を始める前に、ご一行は去ってしまった。

副官の冬踐と夏招かしようは、怒りに震えているのか、もう怒りを通り過ぎて脱力しているのか、動かない景春を見てから、お互い顔を見合わせた。

「ツワモノだな……………」

「ああ、全くだ……………」

翌日、沙龍は奏欽が自宅にしている南海龍王家の宮殿のひとつに招かされていた。「中華風茶碗蒸し作りますから」という奏欽の誘いにホイホイと乗ったのである。

しかし、沙龍のおでかけ楽しい気分は、玄関を開けた途端に、ナイアガラ滝の水のように急降下した。

「ム……」

怖い顔をした男が、まるでここは通さないとでも言うように立ち塞がっているのだ。

その男が、棒読みで言った。

「おはようございます。緑麗様。例の件にて、任意同行をお願いしたいのですが」

「例の件？」

沙龍はすつとぼけたが、景春はまるで用意してきたと言わんばかりに、罪状を読み上げる口調で、民間人の協力義務を説いた。

「任意なら、承諾しかねる。私はこれから、欽チャンちで楽しいランチなんだ。邪魔するとぶつ飛ばすぞ、將軍」

「よくもまあ、こんだけ目上を敬わない、自分勝手な人間が居たもんだな」
「褒めるな。早くそこをどけ」

「あのなあ……」

剣呑な顔をした沙龍に、景春は呆れながらも、一応は宥める役に回った。

「お互い、嫌な思いをしなきゃいけないくても、これは仕事なんだ。すぐに済むから、同行してくれ」

「……」

「それと、なんで俺のことを『將軍』と呼ぶのか分からんが、『大将』だ。物覚えの悪い頭でも、それくらいは覚えてくれ」

「……」

「昨日のことを根に持つてるなら、謝るさ。それであんたが東方軍の本部に来て、五分だけ、写真の確認をしてくれるならな」

「景春さん」

「ん……？」

「もし、私に言うことを聞かせたいんだったら、元帥にチクれば一番てっとり早かっただろう。それをしなかったのは、なぜだ？」

沙龍は、一昨日から九雷には会ってないし話もしていない。官邸に寝泊りして

いるのか、水雲宮には現れていないのだ。

「ああ、それか……」

景春は、やっと沙龍がまともに話をする気になったので内心安堵した。

女子供の扱いは、それほど上手くないと自覚しているので、本当は、ここに来る間も、ずっとどうやってこの生意気な元将神を本部まで引っ張っていかうかと考えていたくらいなのだ。

「元帥が帝都に居なかつたのが主な理由だが、まあ、居たとしてもこんなことで上官に泣きついてたら、俺は『東方軍大将』なんてやってない」

「ふーん……」

そこで、沙龍は、影のように控えていた紗衣に振り返った。

「欽チャンに、ちよつと遅れるって連絡入れておいてくれ。私は東方軍の本部でお茶をご馳走になってくる」

「はい。分かりました。いってらっしゃいませ」

火雲宮の敷地は、一般市民は限られたエリアしか立ち入ることはできない。行政エリアはわりとオープンになっているが、本殿以北の宮城エリアは勿論、軍事エリアも基本的には立ち入り禁止である。

沙龍も、まだ数えるほどしかここに来たことはない。

登城となれば、それなりの格好はしなければならぬのだが、今日はかしこまった用事でもないので、軽装のままである。

初めて見る東方軍本部の敷地は、鮮やかな紺色の屋根で統一されており、それぞれの建物は、綺麗に碁盤目状の通路に区切られていた。

東方軍は、敖光、敖坤親子が長年率いていた部隊であるが、景春の代になって、多少の改革があったらしい。

それに反発する者、同調する者、静観する者、など様々だろうが、沙龍は、昨日と今日で、この大将が部下たちから信頼を得ていることは分かった。

「景春さん」

沙龍がそう呼ぶのは、名前を忘れないためと、間違っって『將軍』と言ってしまったいそうになるのを避けるためなのだが、景春はそれにもいちいち反発した。

普通は、役職を呼ぶのが礼儀である。

だから、沙龍としては礼を取ってるつもりその呼び方も、景春にとっては癪に障るらしい。

「コーヒーはアメリカンじゃなくて、エスプレッソのマグカップサイズで頼む。それと、私は甘いものよりも、辛いものが好きだ」

士官が持って来たコーヒーとケーキにケチをつける沙龍は、それが当然だと言わんばかりに、客用ソファにふんぞり返っている。

どこが任意同行で、どこが事情聴取の風景なのか分からないが、景春は、そのアメリカン・コーヒーの入ったカップをもぎ取るようにして自分が飲むと、控えている士官に無言で「その通りにしてやれ」という顔を向ける。

「お前が昨日見た奴が、このファイルの中に居るかどうか、それが知りたい」
景春は分厚いファイルを一冊沙龍の目の前に置いて、その横にも、何冊か、資料の紙束を山積みにした。

「五分で済むのか……？」

沙龍はうんざりしながら呟く。

しかし、景春にはあたりがついていたのかもしれない。

ファイルをめくり始めた沙龍は、一分もかからず、手が止まった。そこに、昨日見た、女顔の男性の写真があつたのである。

「あー、これこれ」

「貸してみろ……、ああ、三大軍神の一人か……」

景春が一人ごちた。

「三大軍神？」

「お前は日本に居たそうだが、知らんのか？ あの国で、そう呼ばれている二人の神が居る。建御雷たけみかづち、建御名方たけみなかた、経津主ふつぬし。いずれも、屈強な神々だ。お前が昨日会ったのは、経津主。刀劍の神、と言われている」

「フーン……。自称『偽者』だったけどね」

「偽者？ どういう意味だ？」

「『本物じゃない』だったかな？ なんかそんなこと言ってたよ。………謝謝」

沙龍は、エスプレッソを持ってきてくれた士官にお礼を言って、もう一度、ファイルの写真をちらっとだけ見た。

顔は間違いない、この写真と同じである。

「『偽者』……？」

景春は、まだその意味を考えているようだったが、チリ・ビーンズをつつく沙龍には、あまり興味はなかった。

「これで終わり？ もう帰っていい？」

「いや、待て。もうひとつある。差し支えなければ聞かせてくれ。昨日、水晶宮にはなんの用事があったんだ？ 結婚指輪なんて贈ってないって陽輝は言っていたぞ？」

それは景春のハツタリだが、事実でもある。

「じゃ、陽輝には言えない、別の人にもらった指輪なんじゃー？」

これは完全に海千山千の口調である。

悪徳政治家のようだ。

「……。なるほど、押し通すわけか」

「景春さんこそ、あそこでなにしていたんだ？」

「それは軍機だ。言う必要はない」

「フーン……」

「まさか、『東海の至宝』を探してるなんて言わないよな？」

「あー、そうそう。それぞれ」

沙龍はわざと軽く肯定した。

この答え方では、景春のかまかけは失敗と言える。

こういう腹の探り合いには慣れてる態度だな、と景春は思った。

「そうか。なら、もうあんたに用はない。時間を取らせてすまなかつたな。一

応、感謝しておく」

「あのさー、景春さん。『あんた』とか『お前』っていうの、やめてくんない？

ついでに言えば『緑麗』ってのも御免なんだけど、十万歩譲ってそれでもいいと

して……」

しかし、景春は沙龍の言葉は聞いていない。

顔も上げずに資料を見ている景春には、もうなにも言うまい、と沙龍は士官の

方には素直な笑みを見せた。

「エスプレッソは美味かった。ごちそうさん」

「……。ツワモノだ」

その士官、冬踐がまた眩いた。

9 東海龍王家、今昔

朱雀門まで来て、沙龍は、はたと気付いた。

（欽チャンちまで、徒歩で行かなきゃいけないのか……）

景春は、水雲宮まで運転手付きの軍用車で来たのである。

沙龍はそれに乗せられてここまで来て、一人でさっさと東方軍の本部を出てきたわけだから、今更戻って『連れてきたのはそっちなんだから、送迎車くらいまわさんかい』と言うわけにもいかない。

そして、今日は飛龍の姿は見えない。

つまり、足はないのである。

広い帝都内を走る巡回バスはあるが、帝都外にはそういった交通機関はない。

奏欽の自宅は、水雲宮より遙か南、ここから徒歩で行けば、五時間くらいはかかりそうな道のみである。

「元帥は帝都に居ないらしい。ということは黒焰虎も一緒にどっかに出張行って

るってことだよな。……黒焰虎を借りる案、却下」

沙龍は、なにか足になるものがないか、と考えてみた。

「陽輝のバイクに乗せてもらおう案。……いや、陽輝を探すのがまず骨が折れそうだから、却下」

もしかしたら、あのサボリ魔はそこら辺をブラブラしてそんな気もするが、そのブラブラに遭遇する確率はかなり低いだろう。

「せいしよう聖霄が帝都に遊びに来てるかもしれない確率……、せいぜい一パーセントくらいか。却下」

沙龍は、いま、はくていくん白帝君が人界仕事をしていることを知らない。

「四神府に行つて、キサさんか赤帝君に相談して、車を回してもらおう案……。ウム、これが一番いいかな。でも、キサさんは確か、先週からずっとちんこうろう鎮江楼に行つてるはず。赤帝君は……、居るだろうし、世話は焼いてくれるだろうけど……」

随分前に、喧嘩して以来、どうも赤帝君と話すときは身構えてしまう。

その後も何度か会ったし、お互い喧嘩のことは忘れた振りをして、何事もな

かったかのように接してはいるのだが、沙龍はずっと避けていた。

「手配しますよ。場所はどこですか？」

腕組して考え込んでいた沙龍に、よく知っている声が掛かった。

「ああ、欽チャンち……」

沙龍はなにも考えずに答えたが、

(げ……)

当の本人が、いつもの緋色の衣を着て、目の前に立っている。

何冊もファイルを抱えているので、いかにも仕事の途中といった感じだ。

「奏欽殿の？　じゃあ、南海龍王家の別邸の方ですね」

「うん、そう……」

「もし、よろしければ私もちよつと奏欽殿に尋ねたいことがあるので、同道させて頂いても？」

「うん……、いいけど……、阿哥……、仕事は？」

「有能な秘書官が居ますから、大丈夫ですよ」

「ああ、紫凜ね。確かに有能だけど」

沙龍は、赤帝君が朱雀門の守衛に話をつけているのを見ながら、気まずい道程を覚悟した。

車内では、それほど、居心地の悪い空気は流れなかった。

話題のせいもあったし、沙龍にとっては『いま一緒に居る、ちよつと気まずい赤帝君』より、『さつき会った、齒に衣着せぬ無礼者の景春』のイメージの方が強かったからだろう。

それに、奏欽の家まで、そんなに時間は掛からなかった。

奏欽は、不意の客も快く招き入れた。

赤帝君は、第一声、ずっと心配してる敖丁ごうていの行方を聞いたのだが、

「私の方にも連絡はありません。死亡通知が来ない限り、生きているとは思っていませんが」

奏欽は、兄に対しても、夫に対しても、この態度である。

でなければ、軍人の妹や妻などやってられない、ということらしい。

沙龍は、自分はここまで潔くはなれないだろう、と美男美女の会話を聞いていて、思った。

「でも、お心遣いには感謝します。星弥様くらいのもですね。あんな兄のことをいつも心配して下さるのは……」

奏欽は、赤帝君のことを字で呼んでいる。

兄の敖丁が昔から赤帝君と交流があるので、奏欽もこの四方将神とは親しいようだ。

といっても、奏欽と赤帝君の性格を考えると、かなり距離を置いた親しさ、ということになる。

「敖明ごうめい殿は、お元気ですか？」

「ええ、多分……」

と苦笑する奏欽は、それ以上の言葉は続けない。

優雅な手つきでジャスミン茶を淹れていた。

沙龍は、ここに来るまでの車内で、赤帝君から、南海龍王家の大体の相関図を聞いた。

奏欽がなぜ本家の『紅寶宮』ではなく、この別邸の方に住んでいるのかというのと、父親の敖明と折り合いが悪いからだそうだ。

そして、奏欽の兄の敖丁も、やはり父親とは不仲で、別の屋敷に住んでいるという。

この敖丁というのがかなり癖のある人物らしい。

「こんな話になってごめんなさい、沙龍さん」

「いや、構わないよ。欽チャンのお父さんが、なんか微妙な立場に居るらしいってのは、私も陽輝から聞いて知ってる」

未だに南方軍の研究施設の実権を握っていると言われている敖明が、先のクーデターで敖吉に加担していたのではないか、という疑いは当初からあった。

しかし、敖明自身が身の潔白を証明したということ、その件についての片はついたようだ。

ただ、それを信じている者がどれほど居るのかは分からない。

赤帝君は、話が一段落ついたところで帰ろうとしたが、奏欽が引き止めた。

「たくさん作りましたから、是非、星弥様も食べていって下さい」

と、笑顔で勧められては、赤帝君も断れない。

沙龍は、赤帝君を引き止めた奏欽に、最初は「余計なことを……」と思ったのだが、実際、食卓を囲んでみると、そんな小さなマイナス感情はいつの間にか消えてしまっていた。

これは、ちよつとした魔法ではないかと思う。

美味しいものを作れる人というのは、その魔法の効果を誰よりも知っているのかも知れない。

「うまー！ なにこれ、うまー！」

沙龍の食欲の凄さを知っている奏欽は、相当気合を入れて作ったのだが、それも、はや、半分はなくなっていた。

「緑麗様……、なんだか、私はいま、非常に嫌なことを考え付いてしまったんですが……」

赤帝君は行儀よくレンゲと小皿を使っているが、沙龍はどんぶりごと、茶碗蒸しをかきこむようにして食べている。

「え？ なになに？」

「その食べ方が、誰かに重なるというか……」

白帝君のことである。

そういえば、いつだったか木佐も同じようなことを言っていたな、と赤帝君は思い出していた。

「あ、そうだ、阿哥、いまさ、欽チャンと、新しい東海龍王を探しに行こうって話になってんだけど、誰かいい候補、知らない？」

「東海龍王を？　つまり、敖坤様の後任ということですか？」

「そうそう。龍族で、一定条件さえあれば、別に東海龍王家の人じゃなくてもいいらしいんだけど、やっぱり縁がある人の方がいいと思うし」

敖坤は、敖光の一人息子で、未婚。子供は居なかったらしい。

その時点で、直系は絶えたということになるが、なら、最初の候補となるのは傍系である。

だから、沙龍は聞いたのだ。

「敖広さんは、子供居なかったの？」

沙龍は、宝物庫の台座に触れたときに見た、あの敖広のイメージを思い浮かべ

ながら聞いた。

深い海のような色の瞳を持つ、精悍な男性である。

「ええ……、独身でした。婚約者に近い女性は居ましたが……、子供も居なかつたはずですよ」

その言葉に、沙龍はあまりピンと来ない。

（ウーン、あの顔は結構、女たらしで、各地に子供作ってそうなイメージもあるんだが……）

沙龍ならでの、ものすごい偏見である。

「私は敖広以外とは、それほど交流があつたわけでもないんですが、そういえば、妹が居ましたね」

「リンリンさんでしょ？ 地上に降嫁したとかいう——。あ！」

沙龍は、いきなり立ち上がって大口開けた。

「そうだ、欽ちゃん！ リンリンさんが嫁いだ先で子供作ってれば、その子孫が人界に居るんじゃない？」

「あ……、そうですね。可能性はありますね」

「よし、決定！ 『東海の至宝』と『龍王候補』は人界にあり！ 欽ちゃん、人界に行こう！」

いいのか、そんなに簡単に決めて——、と沙龍を諫めてくれる人はここには居ない。

いきなり、なんの準備もなく人界へ行く、という話ではない。

沙龍と奏欽は、まず火雲宮の図書館や四神府の書庫室で東海龍王家の資料を漁った。

四神府の方は、本来スタッフ以外は利用できないが、赤帝君が「どうぞご自由にお使い下さい」と言ってくれたのだ。

それで分かったことは、「リンリン」こと「巽凜公主」の地上降嫁は、敖広・敖光兄弟存命の頃の話で、当時、大陸の東にあった小国、『斉』の国主がその嫁ぎ先の相手だということだ。

「いまの上海の辺りか……」

奇しくも、沙龍が数年過ごした都市である。中国大陸では東端に位置する。

天界における水晶宮とほぼ地図上は重なるが、実際には天仙界の地図は、地上のそれと符合するものではない。

が、この東海岸沿いの国に龍王家の姫君が嫁いだのも偶然ではないのかもしれない、と沙龍はなんとなく思った。

「リンリンさんと田舎の小国の王様が出逢ったきっかけはなんなんだろう。政略結婚じゃないよね？」

「さあ……、当時は比較的自由に人界に降りれたそうですから、ちよつと遊びに行つた先で運命的な恋にでも落ちた——って話かもしれませんね」

「うーん……、でもさー」

沙龍は、その推測には賛成しかねるようだ。

「華やかな兄二人が居るのに、田舎の青年に強烈に惚れるなんてこと、あると思う？」

「え……?？」

「だって、敖広さんも、敖光さんも、地位、能力、容姿、家柄、名声、どれを取っても申し分ないほどの男じゃん？ そんな煌びやかな兄が二人も居る環境で育ったら、すんごい高い理想を持ちそうじゃん？ なのに、結婚相手が『これ』?？」

齊国の国主については古い似顔絵しかなかったが、お世辞に言っても『好漢』とは言い難い。

文献を漁っても、特に悪辣な評も、賛美の評もなく、ごく平凡な国主だったようだ。

「うーん……、それじゃ、巽凛公主が相当の変わり者だったか、なにか事情があつたか、ってことですかね？」

「とりあえず、政略結婚説がないなら、その路線で話を進めよう」

「『齊』は、この国主の代で、中央の列強に滅ぼされた——ってことになってますね」

「それもちよつと引つ掛かるよな。風前の灯火のような弱小国家に大事な妹を嫁がせるか……？」

『大事な』というのは、赤帝君が言っていた『敖広も敖光も、妹姫をとても可愛がつっていた』という証言による。

「で、リンリンさんが自主的に持っていたのか、誰かにそそのかされて盗っていったのかは分からないけど、『東海の至宝』はこの滅亡した国のどっかに埋

まってるか、滅ぼした中央が搔つ攫っていったか、ってことだよな……」

「巽凜公主は、子供は何人か産んだみたいですね。ただ、この子供も、斉が征服された前後に殺された可能性は高いですが……」

「うーむ……」

沙龍はひとまず、古書から目を離して伸びをした。

子孫を探し当てるのは、それほど難しくはないはずだ。

数千年前のこととはいえ、天界側には東海龍王家のDNAサンプルがあるし、巽凜のデータも押さえている。

董天あたりに協力してもらって、『蒼龍会』のネットワークを総動員すれば、それらしき人物を捕まえて照合することはできる。

しかし、人界で普通に暮らしている人間に、『あなたは実は東海龍王家の血筋です。天界に来て龍王になってももらえますか？』などと言ったところで、到底信じてはもらえないだろう。

そこを敢えて力技で押し通したとしても、やはり『東海の至宝』がなければ、今度は周囲がその胡散臭い人物を龍王とは認めないはずである。

いくら沙龍や奏欽が推挙し、データ上証明されたとしても、である。

「やっぱ『東海の至宝』が先かな……」

沙龍命名の『新しい東海龍王を探そう会』（勿論、会員は二名しか居ない）の研究会の後は、通りのカフェでお茶を飲むのが日課になっていた。

奏欽はその何気ない学生のようなことが楽しいらしい。

最初に逢った頃のしかめっ面が信じられないほどに、最近よく笑うようになってきた奏欽は、当然、こんな公の場所では嫌と言うほど人目を引いた。

火雲宮の敷地内でも、図書館のあるこのエリアは、民間人も気軽に利用できるので、図書館前のこのカフェには様々な種類の者が集まる。

一休み中の事務員、コーヒーを買いに来る一般兵、端末をいじってる若い官僚、などである。

沙龍は、以前、玉帝のレポートに当たっていたとき、ここを利用していたので、店員とは顔なじみだった。

勿論、その店員は沙龍が元将神であることなど知らない。

「お連れさん、別嬪さんですねー」

と、お茶目目配せする少年のような店員は、その『別嬪さん』が南海龍王であることも知らない。

結構、そんなものである。

通りに面したテラス席につく二人の話題は絶えない。

心地よい微風が吹いてくるが、奏欽に言わせれば、この風は本来、もっと突風を伴うような強い風なのだそうだ。

「毎年、春になると吹くこの風を、『巽風』シュンファンって言うんです。この風をまと

もに受けると、薄いスカートだったら、もう全部めくれちゃいますよ？」

「へえ……、確か、日本にもあったな、そういうの」

「春風だろ。東風と言った先人も居るらしいが」

その太く低い声に、沙龍は口を歪めて顔を上げた。

東方軍大将の黒い軍服が沙龍の目の前を塞いでいる。

「随分、目立ってるな。いや、目立ってるのは奏欽殿だけか」

「御機嫌よう、景春大将。お仕事中の一休みなら、ここでご一緒しませんか？」
奏欽が笑顔で勧める。

沙龍は、今日こそは体全体を使って、奏欽のそのなにも考えていない誘いに、嫌悪を顕にした。

「えー、なんでこんな無粋で無礼で不躰な男に欽チャンとのデートを邪魔されなきゃならんのだ」

「……。緑麗、お前、俺のことを『齒に衣着せぬ奴』とか言っていたそうだが、人のこと全然言えないじゃないか」

奏欽は、先日の一件もあつたので、沙龍と景春の険悪な関係は理解しているつもりだが、こんなのは、陽輝と敖丁の毒舌合戦に慣れた身としては、大したことでもなかった。

それに、沙龍と景春の応酬はすぐ終わった。

景春が、「このガキは無視」と決めていたのを思い出したからだ。
思い出さなければ無視しようとはしない自分には気付いていない。

「南海龍王殿は、プライベートでは男と口も聞かない、と聞いていたが……」

景春が、籐製の椅子に手をかけながら、言った。

「そんなの、単なる噂ですよ。あ、なにかお飲みになりますか？」

「待て、勝手に座るな」

「じゃあ、十分ほど、コーヒーを飲んでいこう。……アメリカンで」

注文を聞きにきた店員に、景春がわざとそう言ったのが沙龍には分かった。

「待て、勝手に注文すんな」

「『笑わない公主』ってのも単なる噂か。しかし、あの陽輝がこんな美人と結婚したって聞いたときには驚いたな」

「聞けよ、人の話を」

「景春大将は、丈夫（夫のこと）とは古いんですか？」

「ああ、一緒に各国を回ったこともある。……ところで、さつき、巽風の話をしてたな？」

「無視かよ……」

無視されまくってる沙龍は、当然面白くない顔をしているが、奏欽はこの微妙な空気を気にしつつも、そういう素振りは見せなかった。

景春は無関心でやってるわけではなく、意地でやってる気がするのだ。

「奏欽殿は、なにか知ってるのか？」

「巽風のこと、なにか？」

「いや、この風が年々、勢いがなくなってる原因について、なにか知ってるのか？」

「え？　いえ、私は知りませんが。気候の問題ではなく？」

「……」

景春は軽く息をついて、他の話題を探そうか、迷った。

彼には、巽風のこと、慎重にならざるを得ない事情がある。

話には入りません、という意思表示か、露骨に新聞を読み始めた沙龍は、そのくせ、景春がいま見せた一瞬の翳かげりが気になった。

「婚約指輪、見つかりました？」

沈黙してしまった景春に、奏欽の方から、話題を振る。

景春は、思わず笑った。

「いや……、どうも、女運は悪いらしい」

しばらく、そんな他愛のない話をしていたが、アメリカン・コーヒーを飲み終わった景春は、時間通りに席を立った。

「緑麗」

さんざん無視してたくせに、景春はいざ帰ろうとする段階になって、沙龍をまっすぐに見下ろす。

沙龍には、まるで、自分を見下ろすために立ち上がったんじゃないかと思えた。

「お前がなにをしようとしてるのか知らないが、今後、俺の邪魔をするようなら、容赦はしないぞ」

それは、景春の意思表示である。

お前に取る礼儀はない、と言いたいのだろう。

沙龍は特になにも言わなかった。

ただ、景春の窪んだ眼窩から放たれる強い力を、同じ力で跳ね返したただけだ。

「欽ちゃん……、なんであの大將を誘ったのさ」

黒い軍服を見送ることなく、沙龍が呟いた。

「いえ、なんとなく……」

奏欽の方は、景春の逞しい背中を見ながら、彼の人となりを考えていた。陽輝ほど無茶なゴロツキではないし、九雷ほど底意地も悪くはない。

愛想がないだけで、結構、普通の『好漢』に思えるのだが――。

11 北の守護者

沙龍と奏欽が人界へ行く準備をしている頃、天界北端の地、鎮江楼ちんこうろうでは木佐小次郎が珍しい客を迎えていた。

初対面のその大男は、王靈君おうれいくんと名乗った。北方軍大将である。

二メートルを超える身長に、景春よりもさらに隆々と筋骨逞しいその体軀は、グリズリーの二、三匹を、軽くあしらえそうだった。

が、顔立ちはそれほど野性的でもなく、知的で澄んだ瞳をしている。

北方軍という実働部隊を率いる大将としては申し分のない男のようだった。

「急に押しかけて申し訳ない。本陣には行けない理由があったので」

この北方エリアにも、天界軍の防衛拠点や施設が他にもある。王靈君が言った『北の本陣』は、ここからかなり南に下った所に設置されているはずだった。

「広い屋敷なので、構いませんよ」

深夜の訪問だったので畏まる王靈君に、木佐は仕事の顔で言った。

『鎮江楼』は、一応、木佐の私有地だが、実質は四神府の支所みたいなものである。そして、四神府は現在『天界軍預かり』になっているので、軍部に協力する義務も多少はあった。

二人の部下だけを引き連れてやって来た王霊君は、最初から木佐の協力を当て込んでいたらしい。

王霊君が、というよりも、王霊君に『真武君しんぶくに協力を仰ぐように』との命を下したのは恐らく、九雷である。

「現在、軍部が東を警戒しているのはご存知で？」

朝食の席でいきなりその話をされた。

「いえ、直接には知らないです。が……」

木佐は、軍部の動きなどほとんど知らないが、ここしばらく鎮江楼に滞在していて、思うところがあった。

具体的になにが、とは言えないのだが、漠然とした緊張感のようなものが大気や大地を通して伝わってくるのだ。

鎮江楼には、常に白い煙のようなものが立ち込めている。

それは、雲のような、雪のようなもので、正確に言うならば、『水行の氣脈』である。

この北方の地における氣脈は、氷点下マイナスの外気のせいで結晶化し、そこここに『見える氣脈』となって流れているのだ。

更に、現在、北の守護者たる木佐小次郎がこの鎮江楼に滞在しているおかげで、その氣脈は活性化していた。

その『水行の氣脈』が、どうもおかしいのだ。

もともと流動的な氣脈には、多少の乱れはあるものだが、意図的にも思える整然とした流れが続いたと思えば、ある日突然荒れ狂ったりする。

木佐がしばらく帝都に戻らずにここで天体観測のようなことをしているのは、その乱れが気になるからである。

それらが、軍部の動きとなにか関係があるのではないか、と木佐は思った。

「大体の推測はついてる、と？」

「異民族の進撃に備えているというのは分かりますが、それが『東』というのは初耳ですね。なぜ『東』なんです？」

「真武君は『巽風』をご存知で？ 年々、威力が弱まっていると言われているのですが」

「ええ、春特有の強風のことですよ。僕の故郷でも同じようなものがあります
が……」

「天界の最東端は、実質、その『巽風』によって護られています。結界の役目を担っているのです」

「ああ、なるほど。その巽風が弱まってきたことで、東側からの敵を警戒しなくてはならなくなった——ということですね」

「そうです。原因は不明ですが」

「しかし、東というと……」

「そう、『敵』は貴君の現世での故郷の神魔——ということになりますな」

木佐は、日本の神魔について、沙龍よりは知識がある。

と言っても、それは人界に居た頃の、人界での知識である。

実際に日本の神々がどういう存在で、どういう組織を形作っているのか——もしくは、それぞれが別個に存在しているのか——、は全く知らない。

「つまり、僕が真実 “どちら” の側なのか、見極めてこいとも言われました？ 故郷に未練があれば、敵と遭遇したときに切っ先は鈍る、と？」

「いえ……」

王霊君は苦笑した。

確かに、それは九雷も気にしていたことだったが、そういう心配の仕方ではなかったはずだ。

『真武君は自分の仕事はどこまでもまっとうするはずだ』

あの上官は冷めた瞳でそう言っていた。

木佐が故郷に思い入れがあるわけでもなく、東方天界に対する忠義や愛国心があるわけでもないことは、実際本人に会ってみて、王霊君もなんとなく分かった。

「その心配はしてません。ただ、真武君自身に具体的な被害がない限り、真武君の協力を得るのは難しいだろう、と自分の上官は言っていましたので」

「なるほど、そういう意味か」

今度は木佐が苦笑した。

九雷は随分、自分のことを理解しているようだ。

「しかし、結界が弱まったからといって、即侵攻してくるとするのは……。いまいち、目的が読めないな。軍部はそこら辺も理解してるんですか？」

「それを理解、いえ、推測できているのは元帥だけでしょうが……。ただ、領土の奪い合いといった単純なものではありませんまい。過去には領土拡大目的で侵攻してきた異民族も居ましたが、この数百年で住み分けはできているはずです。：あ、すみません」

木佐が王霊君にコーヒーのおかわりを注ぐと、王霊君は律儀に礼を言った。

「ところで、その……。侍女の一人も置いてらっしゃらないので？」

王霊君は、この豪華な朝食も木佐が作ったのを知っている。

最初は、「本当に四方将神が世話をする者を一人も持たずに？」と訝ったのだが、実際、鎮江楼で一人きりで暮らしている木佐を見て、どうやら『変わり者』という評判は本当らしいと思った。

「一人の方が気が楽なので」

木佐は素っ気なく答える。

帝都の官邸にも、赤帝君が色々気遣ってスタッフを手配してくれたのだが、そのスタッフたちには全員暇を出した。

特に理由はない。本当に、一人の方が気楽なのである。

上海で黒服連中にチャホヤされていた沙龍はいいとしても、日本の狭い家で暮らしていた木佐は、他人が日常の中に入ってくるのが鬱陶しい。

幸い、家事は一通り出来るし、不便には思わなかった。

「話を戻しますが、ひとつ疑問に思うのは、警戒すべきは『東』なのに、なぜ貴方はここにやって来たんです？」

「そう、問題はそこです。既に東からの斥候が確認されているんですが、どうも彼らは侵攻ルートを二つに分けたらしい」

「二つ？」

「東には難攻不落の水晶宮がある。あそこをまともに突破することは難しいと判断して、北側からの侵攻ルートに目をつけたのでは、と」

「しかし、この北の地も、そうやすやすと異民族が踏み込める地ではないでしょう……」

言いながらも、木佐は『水行の乱れ』は結局そういうことか、と確信した。

「比較的、侵攻しやすいルートをどこかの龍王が売った——という話です」

「なるほど……、そういうことか……」

先のクーデターの折に、北海龍王が軍資金を得るために、東側と取引をしたのだとしたら、分かる話である。

本来、外敵に対しては睨みをきかせておかなければならないはずの龍王が、そういう癒着を平気で行う。

人界も天界も、腐敗具合は変わらないのだ。

「大体分かりました。九雷元帥の腹は、『真武君と協力して先鋒を叩いておけ』といったあたりですね」

木佐は、余計な仕事が増えた、と嘆息したい気分だったが、あの人に当てにされるのは悪い気がしない、とも思った。

よくよく縁があるのだと思う。

再調査のために、もう一度水晶宮に向かうことになった沙龍と奏欽は、今度はもう開き直ったのか、堂々と『五行砲』の改装工事をしている東方軍の一行に遭遇した。

「帰る……?」

沙龍は、自分を見つけて同じく「チツ」という顔をしている景春がこちらへ向かってくるのを見ながら、隣の奏欽に言った。

「帰ってもなんの解決にもなりませんよ?」

「そうなんだけどさ」

「じゃあ、なんのために来たんだ」

飛龍までもが文句を言っている。

海面からの照り返しの陽光が眩しくて、沙龍は目を細めた。

今日も東海は凩いだ水面を見せていたが、以前、ここで戦闘になったことを思えば、いつ何時、『敵』が襲ってくるか分からない。

しかし、『彼ら』にとつてはアウェーになるはずの場所だ。地の利はこちらにある。

だからこそ、東方軍の連中も、それほどピリピリしていないのだろう。

「水晶宮になにか御用で？」

相変わらず沙龍のことは無視する景春が、近くまで来て奏欽に訊ねたが、奏欽が答える前に沙龍は無言で景春の脇をすり抜けようとした。

「待て——」

沙龍の三倍はあろうかという筋肉質な腕が、沙龍の二の腕を掴んだ。

「……!?!」

腕を掴まれたことよりも、沙龍はそのとき、一瞬、視界が白くなったことに驚いた。

海面が光っただけかもしれない。

しかし、一面の白の中に、なにかぼやけたものが幾つかあった。

かろうじて人の輪郭に見えるが、焦点の合っていないカメラのファインダーを覗いたようで、境がはっきりしない。

「ちよつと、景春さん」

奇妙な画像が脳内から消えた後、沙龍は、腹の底から憎むような口調で言った。その表情も、いつになく険しい。これは、知人に見せる顔ではなかった。

「私はここを掴まれるのが大嫌いなんだ。すぐ離さないと、冥府送りにするぞ」
しかし、沙龍が二十年分の人生をかけて体得したその脅しも、景春には効かなかった。

掴まれている力は、梃子でも動きそうにないほど強く、沙龍にはこれを外す術はない。

「……」

奏欽は、なにか言いかけて、やめた。

とても口が挟めそうにない雰囲気だと思ったし、景春も沙龍も、いまは自分の諫言など聞こえないだろうと思ったのだ。

「言わなかったか？ 俺の邪魔をするなら、容赦しない、と」

「水晶宮を見学するだけが、邪魔になるのか？」

「なる」

「……」

「それに、しばらく帝都に居た方がいい。これ以上は言えないが」

「……」

そのとき、急に飛龍がなにかを思いついたように風火輪（飛龍の宝貝のひとつ。これにより人型でも飛行ができる）を作動させて、垂直上昇した。

「……？ どうしたの？ 敖開」

奏欽も、景春と沙龍も、その行動を目で追った。

「また、亡者でも現れたか？」

「いや……」

飛龍は、帝都の方角を見ているようだった。

街の全容が見える距離ではないのだが、蜃気楼のように薄い、雲の膜のようなものが見える。

「緑麗——、まずい」

「どうした、飛龍」

沙龍は、いい加減離せ、とばかりに景春を睨みながら言った。

景春は、その視線を受けて、やつと手を離す。

「あれは、防御結界だ。対物、対霊、あらゆる攻撃から都市そのものを護る、

『壁』——。それが、帝都に張られている」

「帝都が？ なにか攻撃でも受けてるってこと？」

「違う——」

と、答えたのは景春だった。

「……？」

しかし、沙龍が景春を見上げても、苦い顔をした景春は次の言葉を発しない。

奏欽が、呟いた。

「防御結界が一旦張られてしまえば、帝都には戻れません。沙龍さん、どうしま

しょう……？」

「欽チャンちや水雲宮みづうんぐうは構わないんじや？ 帝都の外なんだし」

沙龍はそう言ったが、奏欽の別邸はともかくとして、水雲宮は地図上も概念上

も帝都に含まれるので、防御結界の対象になっているはずである。

それを承知している景春は、

「駄目だ」

と短く言うだけで、それ以上の説明をしない。

「どうということ……？　なにが起こってんの？　一体——」

沙龍の言葉が終わらないうちに、小走りやってきた夏招が、景春に無線機を渡した。

景春はそれをひったくるようにして、どこかと連絡を取り合っていた。

「こちら、水晶宮、東方軍の景春大将より司令本部へ。不慮の事態により、南海龍王殿と、西海龍王家の子息一名、及び丸特の民間人一名はこちらで保護する」

沙龍は景春の使った『丸特』という言葉の意味する所がなんとなく分かったが、それを聞くよりも、なぜ帝都にも水雲宮にも帰れなくなったのか、説明してもらうまではここを動くまい、と思った。

更に言うなら、自分たちは『保護』なんか必要ない——という抗議もするつもりである。

陽が落ちて、黒い軍服の男たちが寝床と夕食の用意をしていた。

テントを張る者、炊飯に従事する者、また無線でどこかと連絡を取り合っている者など、様々である。

景春は忙しく働く彼らの中で、一人、焚火の前に座っていた。

大将なのだから、士官と同じ雑務をしなくてもよいはずなのだが、それが沙龍には妙に偉そうに見える。

といっても、沙龍自身も、テント設営は飛龍に任せているのだから、あまり人のことは言えない。

「敵は誰で、いまどういう状況なんだ？」

沙龍はオレンジ色の火に照らされて、黙している景春に聞いた。

これを聞いたのは、何度目だろう。

景春は有無を言わず、沙龍たちを同道させ、ひとまず水晶宮を後にした。

薄暗い森の中、どこへ向かっているのか、なにが起こっているのか、一切の説

明なしで、である。

当然、沙龍は説明を求めたが、景春は『夜まで待て』の一点張りだった。

その忠告を無視して水雲宮に戻る、という選択もあったが、奏欽と飛龍の表情を見ると、それはやめた方がよさそうだというのが沙龍には分かった。つまり、二人とも、軍人としての景春を信用しているようなのである。

景春が脇に置いていた刀を反対側に置き直したので、沙龍はそこに座った。

春先とはいえ、夜にもなれば、かなり気温も落ちている。焚火の熱はほどよく暖かかった。

「本当に、元帥からなににも聞いてないのか？」

景春が火を見つめたまま言った。

「なににも話してくれないんでね」

「そりゃ正解だ」

「どーいう意味だよ……」

「元帥でなくとも、お前みたいに無鉄砲で無謀で突っ走り型の婚約者には、なにも教えたくなくなる」

「こういう事態になったからには、百パーセント正解とも言えないよ。事情を知ってた方が対処できるってもんなのに。……謝謝」

沙龍は、コーヒーを持ってきてくれた士官に礼を言った。

この前も、わざわざエスプレッソを淹れ直してくれた士官である。

「アメリカンですが」

と、冬踐はすまなさそうに言った。

「いや、こういう所ではなんだっていいんだ。……ところで、欽チャンは？」

沙龍はさつきから視線で探している奏欽がどこにも見つからないので、景春に聞いた。

「龍王公主様なら、どっかで寛いでる偉そうなガキと違って、食事の支度を手伝ってくれてるそうだ」

「あ、そ……」

なんでわざわざこういう憎まれ口を叩くのか、沙龍には分かるようで分からない。

元はと言えば自分が売った喧嘩かもしれないが、にしては大人気がない、と完

全に自分のことを棚上げにして思うのだ。

しかし、慣れてくれば腹も立たなくなった。

「お前は手伝わらないのか？ 働かざる者食うべからずだぞ」

「適材適所って言葉があるだろう。私は料理はできないんでね」

そう言うと、景春は溜息と共に頷いた。

「なにをどこまで話しているのか、俺には判断がつかないんで、いまの段階ではなんとも言えないな。しかし、それが不安だというなら……」

「……？」

「俺には一軍の将として、民間人を護る義務はある。だから、それについては心配するな」

その言い方には、景春の『信』がある。

だから、沙龍も軽く罵倒することができないのである。

「私たちは、欽チャンも飛龍も、自分の身くらいは護れる。なのに、無理矢理同道させたのは、作戦上、好き勝手やられては困るし、危険もあるからだろうか？」

「まあ、そうだが……」

「なら、向かう先は『北』か？ この少人数なら『鎮江楼』でも充分収容できる」

「……」

景春は、面食らった。

しかし、なぜ分かった、と詰め寄りたくなるのは、かろうじて抑えた。

「そう判断した根拠を聞かせて貰いたいもんだ」

「いや、なんとなく」

「『なんとなく』じゃ、失格だぞ」

「いいんだ、私は別に軍人じゃないから」

と、軽く言う沙龍もだいたい緊張を解いている。

「まあ、敢えて言うなら……、『敵』が極東の神魔だとして、普通に考えれば、東から侵攻してくるはずだ。しかし、水晶宮は難攻不落とまで言われている最強の砦。ここをまともに攻めるのは、私だって躊躇する。更に、『五行砲』を『強化』している連中まで居る——と斥候に半分だけ本当の情報を掴ませれば、『敵』は北側からの侵攻ルートを考えるはずだ。〃丁度いいことに〃、北の龍王

が居ないなら、北が攻めやすいと思うかもしれない。——ってことだろ？」

「あんた……、確かに恋人の寿命を縮めるタイプだな。そこまで勘がいいと、なにも言いたくなくなる元帥の気持ちがよく分かる」

苦笑する景春は、初めて沙龍に素の表情を見せた。

沙龍のその推測はほぼ当たっているのだ。

「そこまでバレてるのなら、教えておく。『敵』はお前の言う通り、極東神魔で、帝都の防御結界は、『開戦』の合図でもある。元帥は敵を北側ルートに誘導して、叩くつもりなんだが、恐らく、既に先鋒部隊が戦端を開いたんだろう」

「先鋒？ 北方軍？」

「ああ。昔のお前が率いていた部隊だ」

「……それを言われてもねえ」

「俺は緑麗には会ったことないが、いまのお前を見ていれば、大体分かる。『無敗の北方軍』と言われていたのも、頷ける」

急に自分を褒めるようなことを言い出す景春に、沙龍こそ面食らった。

「別人の話にしか聞こえないけど」

「つまり、お前は、前世を否定してるわけか、『沙龍』」

「否定……？ いや、否定はしてないよ」

「同じことだろう。前世の自分は、いまの自分とは別人だと思ってるってのは、否定してるってことだ」

沙龍は、それについて説明したり弁解したりするのが面倒臭くなった。

どう言えと言うのだろう。この感覚を。

こればかりは、体験してみないと分からないではないか――。

13 沙龍の選択

景春と沙龍が呼ばれた食事の席には、既にこのパーティー・メンバーが集まっています、皿運びなどは、士官たちが精力的にやっていた。

いま、ここに居るのは十人ほどの少数部隊である。残りの大半の兵力は水晶宮に残してきたらしい。

「奏欽様に作って頂いた食事を頂けるなんて、一生の自慢です！」

一人の士官が顔を紅潮させながら言った。

そういった賛美に対して、奏欽は鷹揚に応えるだけで、特に自分からは声を掛けない。

「ああ……、いつもの簡素な食事が、こんな豪華になるものなんですね……」

「やっぱ、女性が一人居ると違うよな」

（二人だ、ゴルア）

と、沙龍は思いながらも、自分はなにもしてないので、黙って席についた。

席、と言っても、焚火を中心に思い思いに座っているだけだが、こういうときは自ずと力関係が出る。

景春と沙龍は、上座に当たる場所に座っていた。

『客側』のリーダーは沙龍なのだ、と奏欽も飛龍も、東方軍の士官たちも暗黙で認めているのだろう。

「美人で料理もできて地位もあつて強いってのは、反則じゃないのか？」
景春がそんなことを言っていた。

しかし、言うほどにそうは聞こえないのは、彼の淡白な性格のせいなのだろうか。

(まあ、実力主義的なこの大将は置いておくとしても)

幸せそうな顔をして食事をしている士官たちを見て、沙龍は微笑んだ。

奏欽が居なければ、彼らの心は掴めなかつただろう。

自分たちは作戦上のお荷物にしかなくてないわけだから、彼らの神経を逆撫でしてもいいことはない。

とりあえず、マルチな奏欽に改めて敬意を送っておく。

こういった小さな人心掌握が、実は後で色々な助けになるのを、沙龍は知っているのだ。

「うま……」

量は少ない（と言っても大の男一人分はしつかりある）が、素晴らしく美味しいレーションをかきこみながら、沙龍は、少し離れた場所で隣り合って食事をしている奏欽と飛龍を眺めていた。

仲の良い姉弟のようにも見える。

半月から放たれる銀色の月光が、奏欽の白い顔をますます白くしているように見えた。

「野戦食って、もっと貧相かと思ってた。軍人っていいもん食ってんだなー」

沙龍は、ビーンズ・ソースがことのほか美味い、と思った。

ごくありきたりの大豆を煮込んだだけのものだが、このまるやかなソースのおかげで、まるで違う料理になっているようだった。

「奏欽殿が色々と手間を加えてくれたおかげだろう。普段はもっと味気ないぞ」
景春が、がつつく沙龍を少々呆れた目で見ながら言う。

「でも、これは美味すぎる……」

沙龍が頬張る豆の煮込みは、他の士官たちにも好評のようだ。

景春は、その野営地のいつもと違う雰囲気戸惑いながらも、結果的に士気さえ上がればいい、と考えることにした。

そして、このパーティーの中では、やはりどうしても目立つ奏欽に何気なく視線を向けた。

飛龍の口をぬぐって世話を焼いている奏欽は、自分の食事にはあまり手をつけていないようだった。

「あのお姫様はこういう野営は嫌がるかと思ったが、そうでもないんだな」
景春の言い方には、揶揄以上に敬意が感じられた。

そして、隣の沙龍を見る。

対照的な二人だ、と景春は思う。片や、深窓のお姫様のような奏欽と、片や、庶民派代表のような沙龍である。

しかし、不思議と重なる部分があった。

似てない姉妹、と言えば景春は納得できるかもしれない。

根は同じなのに正反対を突き進んだ結果がこうなった、というような感じである。

「結婚相手がアレだから、慣れてんじや？」

沙龍はいい加減に答えていたが、気になる言葉が聞こえたので、そちらに顔を向けた。

美味しい、美味しい、としきりに繰り返す士官の一人に、別の士官が「秘蔵の仙桃エキスが……」などと答えていたのだ。

沙龍は、にわかには立ち上がって、その士官の所まで大股で歩いていった。

「せ、仙桃!? いま、仙桃とか言ったか？」

「は、はい? それがなにか……?」

「この料理、仙桃が入ってんのか!？」

「え、ええ。携行用の缶詰の中に、以前、祝事に支給されたものがひとつ残ってまして……。今日は奏欽様も緑麗様もいらっしやるので、折角なので、それを……」

沙龍は、みるみる青くなった。

夜も更けて、パーティー・メンバーたちが寝静まった頃を見計らい、沙龍は飛龍を連れ出していた。

奏欽の様子がおかしいな、とは思っていたが、それに加えて自分までおかしくなつては、もう、飛龍に頼るしかない。

幸い、例のリボンは首に巻いてあるが、こんなものがあつても、どうしようもないのだ。

「嫌だ。俺は緑麗の傍に居る」

飛龍の顔は、無表情ながらも、思い切り拒否していた。

「飛龍、私の言うことを聞け。いま、欽ちゃんをこんな強行軍に付き合わせるわけにはいかないんだよ」

景春が徒歩で行軍をしているのは、それなりの理由があるようだ。

客であり、単なる荷物である沙龍が、それについて文句を言うわけにはいかない。

「……なぜだ？ 奏欽とて、龍王だ。そんな心配は不要だろう」

「欽チャンは、いま、普通の身体じゃないんだよ」

「……？」

「鈍いやツだな。つまり、お腹に赤ちゃんが居るんだ」

「なに!? 奏欽がそう言ったのか!？」

「アホウ。こういうのは、言わなくても分かるんだ」

「しかし、なんで奏欽は隠してるんだ？ めでたいことなんだろう？」

「ダブルアホウ。真っ先に言いたい人に言うまで、誰にも言いたくないという、

お前にはあと千年くらいしないと分からぬ女心つてのがあるんだ」

「そうか。分かった」

「……ホントに分かってんのか？ まあ、いい。だからな？ あの油断のならない大将に、欽チャン一人を安全な場所に逃がす、なんて知られたら、要らぬスパイ容疑までかけられる可能性もある。だから、お前は見つからないように、ヒツソリと欽チャンを連れ出すんだ、いいな？」

飛龍が珍しく迷う表情を見せた。

「しかし——」

飛龍にとっては、苦しい選択だろう。

しかし、これは沙龍にとっても厳しい選択だった。

いまから、弱々なミニ黄龍になってしまふのを承知で、飛龍を手放そうとして
いるのだから、ある意味、これは、自分が一番嫌いな犠牲精神かもしれない、と
思った。

「奏欽を護らなくちゃいけないのは分かる。しかし、俺が一番護らなくちゃいけ
ないのは、緑麗だ」

飛龍の優先順位の話だ。

それをいまだけ逆にしろ、と沙龍は言っているのだが、この龍族のプリンスに
その理屈は通用しそうにない。

「じゃあ聞くが、飛龍。欽チャンと私とどっちが強いと思う？」

「それは、緑麗だ」

「なら、強い者を護る必要はないじゃないか」

「それは……」

案の定、言葉に詰まる。

語彙の少ない飛龍が、口で沙龍に敵うはずはないのだ。

しかし、飛龍は一向に首を縦に振らない。

だから、沙龍は切り札を出すことにした。

「飛龍、感情のままに己の我儘を押し通しているだけでは、お前はいつまで経っても親父さんに追いつけないぞ」

「……っ！」

飛龍の顔色がまともに変わった。

彼にとって、それは一番言われたくない言葉である。

怒るか、喚くか、最悪、掴み合いの喧嘩になるかもしれない、と沙龍は覚悟して言ったのだが、飛龍は天真には必殺技を放しても、沙龍にはできない。

挙句、大粒の涙を零して泣き出した。

苦しい選択を強いられ、さらに弱点を突かれ、もうどうしたらいいのか、分からないのだろう。

「俺はっ……、どうして、いつも、緑麗を護らせてもらえないんだ？　なんで、

緑麗はいつも、一人でどこかに行ってしまう？ 強いとか、強くないとか、誰を護るべきとか、なんでそんな難しいことを考えなくちゃいけないんだ？ 俺の願いはいつも変わらずひとつなのに、なんで他のことがこんなに多すぎるんだ？」

「飛龍……」

その素直すぎる言葉は、沙龍の胸を打つ。

こんな風には決して言わないが、もしかしたら、九雷も同じ想いをしてるのかもしれない、と沙龍は思った。

「……それでも、緑麗がそうしろ、と言うなら、俺は奏欽を護る。しかし、だったら、緑麗は誰が護るんだ？」

泣きじやくる飛龍に、「私には必要ない」と沙龍が言おうとしたとき、

「……俺では役不足か？」

そんな低い声が聞こえた。

「——誰っ!？」

沙龍は咄嗟に身構えたが、直感ではそれが誰かは分かっていた。

老木の裏に景春が居たということに気付かなかったのは、沙龍が迂闊だったか

らではない。

天界住人のなにが嫌いって、気配が感じ取れないことだ——、と沙龍は忌々しく思う。

「聞いていたのか」

「すまん、立ち聞きするつもりはなかったんだが……。しかし、聞こえてしまった以上、黙ってるわけにもいかんな」

景春のその言葉を、沙龍は勘違いした。

「……飛龍、下がってる」

聖魔劍の柄に手をかけ、泣きべその飛龍を下がらせる。

「ヤレヤレ……。その血の気の多さは、どうにかならんのか」

臨戦体勢を取る沙龍に、景春は溜息をついて、飛龍の方に言った。

「敖開、俺はあんたの父親には何度か世話になった身だ。その恩義もある。お前の代わりは、俺が務めよう」

「……お前が？ 緑麗を護ってくれるというのか？」

「そうだ」

「……。分かった。不本意だが、頼む」

「待て、勝手に話を進めるなよ」

沙龍は苛立ちを込めて言った。

「俺は少なくとも女心は分かる歳だと思うんだが？」

景春は両肩をすくめてみせる。

沙龍はそこで、やっと突きつけていた聖魔剣を下ろした。

いま、景春があの大振りの刀を持っていないことに気付いたのだ。

「長く生きてりやいいってもんでもない。將軍、あんたの使命は、作戦を遂行することだろう。その作戦の一部を知ってしまった民間人が逃げようつてときは、涙を飲んで斬るのがあんたの役目じゃないのか？」

「将官には柔軟さも必要でね。龍王は『ただの民間人』じゃない。軍部としては恩を売っておく必要もある……。とでも言えば納得するか？」

「……」

「それに、あんたの心意気には、それなりに感動したんだがな。それでも、まだ油断のならない鬼のような男だと判断するのなら、この場で俺を斬ってくれ」

沙龍は、この出逢って間もない男の性質というものを、本音の部分では理解していた。

筋が一本通っていて、自分の信念は死んでも護るタイプだろう。でなければ、部下たちにも信頼はされないはずだ。

「協力してくれるのか？」

「勿論、そうしたいところなんだが」

「なにか問題でも？」

「敬意を表して、これだけは教えておくが、いま、天界で安全な場所なんてひとつも無い。帝都以外、どこへ行っても、あの正体不明の亡者が襲ってくる可能性がある。それは、例え五行の中心の泰山だとしても例外じゃない」

事態はそこまで深刻なのか、と沙龍は思った。

そんな広範囲に渡って、この東方天界を翻弄できる異民族が居るとも思えないが、いまの景春の言葉が半分は脅しだとしても、呑気に『東海の至宝』を探している場合ではないことだけは確かだった。

「とすれば、あんたはあのお姫様をどこへ逃がそうってんだ？」

「『安全な場所』は無くても、本人が安心できれば、それでいいんだ」

「なるほど……」

「ひとまず、陽輝に連絡を取れば、それが一番いいんだが……」

「残念ながら、俺はあの愚連隊の大將がどこで作戦行動してるのかは知らないが……、知ってるであろう人物と連絡を取ることにはできる」

「元帥のことか？」

「そうだ。しかし、そのためには、あんたが将神に返り咲くのが条件だ——と言ったら、どうする？」

「なんだと……？」

迂闊だった。

沙龍は、この男が、火雲宮のVIPの誰かの子飼いだという可能性を考えていなかった自分に舌打ちした。

「貴様、そんなこと、誰に頼まれた」

もう一度、聖魔劍の柄に手を掛ける。

が、今度は刃先を喉元に突きつけるようなことはしなかった。

この距離で、一番早く景春を無言にできるのは、聖魔劍の『振り』を生かした斬り上げだろう、と思ったからだ。

これみよがしに喉元につきつけていても、静止状態のゼロからの運動では挙動は遅れる。

景春は、沙龍のその殺意が分かったし、自分がいま丸腰であることも承知しているが、大して動じてはいなかった。

彼自身に言わせれば、『こんなことで動じてたら俺は東方軍大将なんかやっつけない』という所だろうか。

「俺は、どうする？ と聞いたただけだぞ？ 聞くところによると、あんたは随分そこにこだわってるそうじゃないか。なんで、最高の誉れとされる将神の地位を固辞するのか、俺には分からんが、なった所で困るわけでもあるまい？ まあ、面倒と言えば面倒かもしれんが、だとしても、頑強に断る理由としては、弱いな」

沙龍は鋭い視線のまま、景春を睨んでいた。

その理由を説明する気はない。言ったところで、どうせ、この男には興味もないし、理解もできない話なのだ。

「で、どうなんだ？」

「答えは決まってる。欽チャンを助けるために私が将神になる必要があるというなら、なってやる。だが、その下手な小細工をしたどこかのオポンチ野郎は、自分のしたことに代償を払う覚悟があるんだろうな？」

「落ち着けよ。もし、それが天帝陛下本人だとしたら、お前はどうするんだ？」

それも可能性としては、有りうる、と思っていた。

元から秦帝は将神着任を熱望しているのだし、あの武闘大会で沙龍の自由な身分は保障されたとはいえ、所詮、ここは帝政国家だ。

天帝という一人の決定権を持つ者の鶴の一声で、白も黒へと覆る。
しかし、と、沙龍は思った。

「黒幕が誰であろうと、いま、私のすべきことに変わりはないんだよ。どんな毒だろうが呑んでやるから、さっさと元帥に連絡しろ」

景春は、嘆息した。

やれやれ、という意味もあるが、景春なりに賞賛もしているようだった。

「お前は、思考回路が一本しかないのか。よくそれで、いままで生きてこれたもんだ」

完全に遊んでいるような物言いなので、沙龍はこの緊張感を解けばいいのか、高めるべきか、分からなくなった。

しかし、聖魔剣を斬り上げる必要は少なくともないと思った。

「人徳だ」

「嘘をつけ」

沙龍は聖魔剣を背中に戻して、飛龍を見た。

泣き止んではいたが、バツの悪そうな顔である。

欽ちゃんの様子を見に行ってきたくれ——と沙龍がゼスチャーすると、頷いて飛んでいった。

「あんた、本当に女なのか？」

景春がまだそんなことを言ってるので、沙龍は言ってやった。

「元帥の前じゃメロメロのデレデレだ」

景春は短く笑う。

そして、懐から携帯電話を取り出すと、沙龍の予想に反することが起こった。

「……だ、そうですよ、元帥閣下」

「な——っ!？」

景春の襟首を、沙龍は今度こそ掴み上げた。

景春は、宥めるように片手を上げてみせたが、背中に木の幹が当たって、瞬間、咳き込んだ。

沙龍が噛み付く勢いで、景春になんと罵倒してやろうかと詰め寄ったとき、『だから言っただろう。火雲宮の玉座に一人で殴り込みに来たくらいだからな』景春がわずかに耳から離れた携帯電話から、聞き慣れた声が聞こえてきたので、そちらに気を取られてしまった。

「ええ、まあ……。俺はこの世で怖いものはどこかの総司令官ただ一人だと思っ
てましたが、天帝陛下を敵にすることをためらわない人物の方が余程怖いです
ね。貴方にこう言ってはなんですが、こんな無謀というか、まあ、ぶっちゃけバ
カを将神にしたいって言ってる連中は、正気ですかね？」

『よく言った。陽輝でさえ、そうはつきりとは言わないぞ』

「その陽輝ですがね、いまどこに居ます？」

『それは後で直接沙龍に言っておく』

「了解しました。……で、東方軍は当初の予定通りでいいんですね？」

『ああ、王霊君がまだ動けないらしいからな。……それで、沙龍はどうすると
言ってる？』

「ちよっと、いま、目の前の貴方の部下を殺しそうになってますが……。替わり

ますよ、どうぞ」

と、景春は沙龍にその携帯電話を渡した。

沙龍はそれを受け取ったものの、なにかから話していいのか分からず、どの感情をどこにぶつけていいのか間違えそうになるので、黙った。

『沙龍……？ 大丈夫か……？』

その声を聞いた途端に、力が抜ける。

「……っ？」

視点がずると下がったので、ヘナヘナと座り込んでしまったのか、とも思ったが、そうではないとすぐ気付いた。

『怒ってるのか？ すまない。こちらも色々あつてな。景春の報告は聞いたんだが……、沙龍？ 聞いているか？』

「うん、聞いている……」

リボンをしていてよかった、と沙龍は思った。

時間的には確かに合う。

仙桃を口にしてから数時間経っているのだ。

驚愕の顔をしている景春が、座り込んでまじまじとミニ黄龍の姿になってしまった自分を見つめているが、とりあえずこれは無視しようと思った。

九雷が状況を説明してくれながら、ところどころ、聞いているのか？ と聞くので、馬鹿のひとつ覚えのように、「うん、聞いている」と、答えた。

『で、お前は大丈夫なのか？』

「……？ うん。大丈夫だよ、全然。いつも通り」

無駄に心配させる必要もないと思ったので、そう言ったのである。

しかし、急に、真上から生の声が聞こえた。

「……嘘が下手だな」

「え——!？」

見上げると、黒焰虎が滞空していた。

「あわわわわ……」

「いまからそこに行く、と何度もさつき言っただろう。聞いてなかったのか？」
九雷が、珍しく野戦服の姿でそこに居た。

「ゴメン、声は聞いてただけ、内容はあんまり聞いてなかった」

そのとき、飛龍が慌てて戻ってきた。

「緑麗、大変だ！ 奏欽が青い顔して倒れてる！」

「……っ!? 景春さん、部隊に軍医は!?!」

「残念ながら……」

その答えに、沙龍も飛龍も絶望してしまった。

「大丈夫です、ちよつと貧血起こしただけですから」

そう言い張る奏欽を無理矢理テントの簡易ベッドに寝かせて、とりあえず、男共は追い出した。

といつても、沙龍はいまは無力な姿なので、奏欽の枕元に座っていることしかできない。

パーティーの面子で自己申告しあった結果、皆、応急処置の方法や解毒程度ของ サバイバル法しか知らないことが分かった。

「ゴメンね、欽チャン、辛かったでしょ？」

「体はどうってことないんですが……、沙龍さん、もう少しだけ傍に居て下さいね」

奏欽も不安なのだろう。

同性は沙龍しか居ないし、ここはこんな野营地だ。

いつまたあの亡者が現れるか分からない中で、これからどうすればいいのか、沙龍にも奏欽にも分からなかった。

「すみません、なんか、迷惑かけて……」

迷惑じゃないよ、と言ってやりたかったが、やめた。

奏欽自身は、いつから気付いていたのだろう。

前から気付いていたのなら、今日、水晶宮に行かずに安静にしてもよかったのに、それをしなかったのは、やはり奏欽の責任かもしれない。

『東海の至宝探し』に熱心だったのは、沙龍よりも奏欽の方だった。

その理由を、奏欽はぼつぼつと語り始めた。

「私、嬉しかったんです。沙龍さんが『新しい東海龍王を探す』って言い出したとき、龍王家の罪を許してくれたんだって気がして……」

「……」

「私も、龍王の一人として、北と東が欠けたいまの状態は、あまりいいものじゃないと思ってます。四海龍王にはやっぱり、それぞれの役割があるんです」

「役割……？」

「ええ。四海を護る、という現実的な役割もそうですけど、もつと、精神的な部分でも、龍王家は天界を護らなくちゃいけないんです。私たちはここにしか住めないわけだから……。私が『東海の至宝』を探しているのは、東海龍王不在のいま、あれは龍王家がしっかり管理しておかなきゃって思ったからなんです。

『北海の至宝』は火雲宮側に没収されてしまいました……。」

「秦帝は四つとも集めたがってるの……？」

「多分……、四つ集めて『神器』に戻そうとしてるんだと思います」

「欽ちゃんは、それを阻止したいんだね？」

「そう……かもしれませぬ。多分……」

奏欽ははっきりとは言わなかった。

しかし、秦帝がどういうつもりにせよ、奏欽は『四海の至宝』は龍王家が管理

すべき、と思っっているようだ。

そうこうしていると、テントの外で、低く話す声が聞こえた。

「沙龍、強力な助っ人を連れてきた。中に入れてもいいか？」

九雷の声だった。

しかし、沙龍は素っ気無く答えた。

「誰？ いまはドクター以外、強力な助っ人にならないよ」

「その、天真なんだがな」

色々と気が抜けたら睡魔が襲ってきたところまでは覚えている。

天真の顔を見たのはかなり明け方だったはずだが、次に気付いたときは、次の日の夕方近くだった。

どうも、一日、ずっとこの野営地に居たらしい。

急ぎの行軍のはずだが、妊婦のために二十四時間の休憩を取るくらいの余裕はあるのかもしれない。

沙龍が目を覚ましたときは九雷の膝の上に居て、隣では、焚火の傍で、天真が本を読んでいた。

「欽ちゃん、大丈夫だった……？」

第一声、そう聞くと、天真が顔を上げて微笑んだ。

「大丈夫ですよ。ちよつと寝不足と栄養失調気味でしたが、ちゃんと母子共に元気です。いまは安静にして、眠ってます」

「そっか……、よかった……」

「貴女も少しお疲れですよ。自重して下さいね」

「？ 私は疲れてないよ？」

「十二時間も眠っていたんですから、疲れてるってことですよ。色々緊張もあつたんでしょう？」

そう言われて、沙龍は、久しぶりに完全にリラックスしている自分に気付いた。

九雷に会うまでは、相当張り詰めていたのだろう。

「それよりも、ドクターはどこでなにやってたのさ。帝都に居たんじゃなかった

の？」

「えーと。話すとき長くなるんですが……」

天真は間の悪そうな顔をし、なぜか、九雷が短く笑った。

「……？ それに、いつも思うんだけど、元帥は千里眼？　なんでドクターの居場所が分かったの？」

「お前の『なぜ』は尽きないな。……だが、まあ、今回ばかりは種明かしをしてやろう」

沙龍は、バランスの悪い体で立ち上がり、わくわくしながらその話を聞いた。

九雷の話では、景春のこの行軍は隠密で、表向き、東方軍大將はずっと水晶宮に詰めていることになってるとのことだ。

だから、民間から医者を連れてくるわけにはいかないし、そもそも、この近所に大きな街はない。

しかし、四方軍の哨戒部隊は天界領土のかなり広範囲に駐屯させている。

「ひよっとして、そのひとつに天真が居るかもしれない、と思っただけなんだが

……」

「……なんで？」

「帝都に防御結界が張られて、いずれ完全封鎖されるだろうという噂は、関係機関の範囲内までにはある程度流出していた。だから、天真も恐らく知ってるだろうと思った。まだ、医局の連中とは多少付き合いがあるようだからな」

天真の情報源は、大抵そこである。

「とすれば、天真は恐らく一度崑崙に行くはずだ」

「ああ……、誰かさんに会いにつてことか」

グフフ、と笑った沙龍が、無理矢理本に視線を戻している天真を見た。

「だが、いま、天界と仙界の境界は今回の事態を想定して、出入りを厳しくしてある。行き来に時間をとられるのは必須だ」

「フム……」

「とすれば、もしかしたら、その間に帝都に戻れない事態になってるんじゃないか、と思った」

そこまで、諦めた感じでその話を聞いていた天真が、九雷の言葉を引き継いだ。

「実際、戻れない事態になってたんですよ。……で、軍医時代に覚えていた集落のひとつに身を寄せていたんです。そこが有事の際には軍事施設になるのも知ってましたから。情報は入ってくるだろうと。そこに、この男が急に訪ねてきた……というわけです。まあ、驚きましたけどね。九雷の神出鬼没はいつものことですから」

「俺の推測がたまたま、全部当たっていたというだけの話だ」

「ご謙遜を……」

思わず笑みが零れる。

いつもとはまるで違う知らない場所に、馴染みの面子が揃っているというのは、なんとも心強い。

更に、九雷が嬉しいことを言ってくれた。

「もうすぐ、血相変えて陽輝が来るぞ」

「え！ そうなの!？」

沙龍はホツとするような面持ちで、次に、九雷はどうしてここに居るのだろう、と思った。

しかし、それを聞く前に、九雷が先に言葉を発した。

「沙龍、景春をどう思った？」

「うん……、なんか、元帥が好きそうなタイプだね？ おべっか使わないところ

とか、VIPだろうが全然構わないところとか……」

「お前も気に入ったか？」

「うーん……？」

なんとも答えようがない。

自信過剰の無礼な奴——と言いたいところなのだが、九雷に初めて逢ったときも、沙龍は同じような感想を持ったのだ。

「なにか、別の意味で聞いているの？」

「さあ……、どうかな」

などと、九雷は笑みを浮かべて言う。

「欽チャンは気に入ってたみたいだよ？ 景春さんの方も欽チャンには優しかった」

そのとき、物凄いジェットエンジンのような耳をつんざく音がして、そのエン

ジンが急停止したかと思うと、

「キューーッ!?」

なぜか最初に、緑色の小さなものが飛んできて、天真が背もたれにしていた木の幹に直撃した。

「グエツ……」

「小龍——ッ?」

沙龍は、目を回したその小さな龍が自分のペットだと分かると、介抱しようとして近づいたが、小龍よりも小さな体ではなにもできようはずはない。

かわりに、天真が小龍の背を心配そうに撫でてくれた。

その後、

「奏はどこだっ!?!」

鬼気迫る形相の陽輝が、バイクから転がり落ちながら這って来て、九雷を揺さぶった。

「……陽輝、落ち着……」

今度は九雷が目を回しそうになる。

喚く陽輝をどうにかする術はいまの沙龍にはない。

しかし、天真にはあった。

スッパーン！ と、斜め後方四十五度の絶妙の角度から、ハリセンで陽輝を引つ叩いた天真は、ものすごい顔をしていた。

沙龍が見たことのない、この世のものとは思えないほどの恐ろしげな顔である。

「安静にしなきゃいけない妊婦が居る場所で、なに騒いでんです！」
たかが紙の攻撃なのだが、陽輝は両手で頭を抱えるほどに痛がっている。

「つつ——っ！」

「欽姫なら、あのテントで寝てます。お見舞いに行ってもいいですが、くれぐれも騒がないように。これも、置いて行きなさい！」

天真は陽輝が肩に担いでるアーマライトを取り上げ、何事もなかったかのように、元の場所に座って読書を再開した。

「わ、分かった……、行って……きます……」

陽輝は二、三步後ろさずさつて、そのままそそくさとテントに入っていた。

沙龍は呆然と、その様子を見ていただけである。

「……………ここ、怖かった（ドクターが）」

さっきの天真の形相には、木佐のハイパー・モードに匹敵する迫力がある。

エレガントな天真の新たな一面を垣間見てしまった沙龍は、やはりこの人も天界住民だ、と思わずにはいられなかった。

陽輝は、小龍からの伝言を受け、西南方面に展開させていた自分の部隊を副官に任せ、大急ぎで駆けつけたのである。

この非常事態の中、有休一日分だけ特別に認める、という九雷の配慮は、お得意の職権濫用ではあるが、誰に恨まれるものでもない。

暗いテント内にはなんの明りもないが、これが皇室用の特別仕様だということ
は陽輝にはすぐ分かった。

各部隊が、行幸に備えて持っているものだ。

「……」

子供が出来たと報らされる男の心境というのはこういうものなのか、と改めて
陽輝は思った。

床に臥せている美姫がなんとも場違いであるし、未だになぜ、自分がこんなお
姫様の亭主になれたのか、と思うときもある。

寝てると思っていた奏欽の白い腕が宙に上げられたときは、陽輝はその手をそつと握り締めた。

「起きてたのか」

「あんだだけ大きい音させて来たら、起きるわよ」

「そうか、悪い。さつき、天真にも怒られた」

「……ごめんなさい」

「なんでお前が謝る？」

「周りに色々迷惑かけちゃった。貴方に最初に言わなきゃと思ってたから、黙ってたの。そしたら、沙龍さんにバレちゃった」

「そっか。でも、まあ、それは気にすんな。多分、誰も迷惑だなんて思ってねえよ」

「そう……？」

「一番いいテントと床を貰って、お前、幸せモンだな」

言う間にも、東方軍の士官の一人が、お茶の差し入れを持ってきてくれた。

野営地で用意できるものなど限られているし、本来は、それは隊のリーダー用

のものだろう。

「……箸しか持ったことのねえお嬢ちゃんが、野郎共にチャホヤされてるってのがよく分かる凶だぜ」

などと憎まれ口も叩いてみるが、奏欽は微笑むだけだった。

「違うわ、貴方が幸せものなのよ」

「はあ？」

「だって、そうでしょ？ みんな、私が貴方の奥さんだからよくしてくれるのよ。沙龍さんも、景春大将もね」

「ま、そういうことにしておくか——」

「沙龍さんは、私をどこか安全な所に避難させたいみたいだけど……、私も沙龍さんと一緒に行きたかったな」

「そりゃ……」

無理だろう、と陽輝は言いそうになった。

身重の体でこのまま行軍するのは無茶だし、この一行が向かう先は極寒の地だ。

「うん。分かってる……。ちよつと我俥言いたかっただけ」

天界軍のトップ3とも言うべき三人が集まってる風景というのは、なかなか壮観だった。

「よ、景春」

テントから出てきた陽輝はご機嫌な顔で、旧友に挨拶する。

「相変わらずだな。どこでフラフラしてたんだ」

「俺もちゃんと仕事してんのよ。で、王霊君が捕まえたっつー重要参考人はなに吐いたのか？」

「それは、これから景春に向かってもらおう」

「東はいいのかよ？」

「ああ、あそこには細工しておいた。問題はないだろう」

作戦会議の始まった野営地では、同時に酒盛りも始まっていた。

誰がどこから調達してきたのか、天界四方軍というのはアルコールが無いとな

にも始まらないらしい。

エリートとされてる東方軍でもそうなのだから、西方軍などは相当飲んだくれがゴロゴロしているに違いない、と沙龍は思う。

景春は、まだ沙龍の姿が物珍しいらしく、色々と沙龍をむかつかせるようなことを聞いていた（知能はあるのか、とか、炎は吐けるのか、など）が、恋人の膝の上で寛ぐ沙龍は、景春に悪意がないことだけはやっと理解した。

「で、龍王殿はどこへ避難させるんだ？」

「そうだなあ……。無難なのは西ってことになるが……」

陽輝には具体案はこれと言っていない。

帝都以西なら比較的安安全だだろうが、万全とも言い切れず、いつそ、天界の領土以外の方がいいかもしれない。

「あ、そう言えば……」

と、沙龍が急に口を挟んだ。

「あのさ……。ちよつと提案なんだけど。政治的に色々難ありかもしれないけど、清林山に私の弟が世話になってる人が居るんだ。そこはどうかかな？」

「ああ、あそこなら、確かに最適ですね。清浄な空気に包まれた場所ですから」と、いままで半分寝ていたような天真が顔を上げた。

「仙界の領土か……」

その九雷の口ぶりは、ちよつと難色を示している。

「……やっぱ、だめかな？」

「いや、口実とコネさえあれば、別に問題はないだろう。奏欽殿は軍人じゃないからな。お前が言ってるのは吉羅公主のことだろう？ 西王母の末娘の」

「そうそう。私は会ったことないんだけどね」

ということ、あっさりと決まってしまった。

善は急げで、沙龍は偃月と吉羅公主宛に手紙を書き（代筆したのは九雷だが）、奏欽に付き添うメンバーが選出された。

当然、飛龍は送迎役であり、天真が自ら添乗を申し出た。

「お前、ホントに幸せモンだな」

陽輝がそのメンバーを見て、奏欽にぼそつと言った。

飛龍のスピードと戦闘能力に加え、天界一の名医が居れば、なにも心配は要ら

ないだろう。

朝を待たずにすぐに出発となったのは、夜目の利く飛龍なら却って夜のドライブの方が安全だからである。

「飛龍、欽チャンを頼むよ。超安全運転でね」

沙龍が声をかけても、飛龍はブスつとしたままだ。

「分かってる」

飛龍はずっと不機嫌な顔をしているが、この役目を最終的に承諾したのは、結局、九雷が来たからなのだろう。

いつものパターンである。

「沙龍さん、色々ありがとう……」

奏欽が細い声で言った。

「ユエと吉羅公主によろしく言っておいて」

「例の件は……」

「うん。できるだけなんとかかしてみよう」

それだけの会話で、二人には充分だった。そして、夫婦の一時の別れの邪魔は

すまい、とその場を離れる。

陽輝は、これから別の任務があるので、この一行について行くことはできない。

しばらく情勢が落ち着くまでは、適材適所で行くしかないのだ。

「沙龍。それで、お前はどうするんだ？」

沙龍の小さな体を落ちないように支えながら、九雷が聞いた。

「あのさ、もしかしたら、元帥も、私をあの一行に放り込んで、安心したいのかもしれないけど」

「……でも、それをやると、お前には嫌われるだろう？」

と、九雷が苦笑する。

「私に嫌われないために、我慢してるの？」

「いや、違うな……。俺はお前の好きなようにするのが一番いいと思ってる。それが無茶じゃない限りは、な」

「フム。ということは、私が東海龍王を探すのは無茶ではないと思ってるんだね？」

「なにか進展があつたか？」

「うん、少しだけね。……でも、いまはしばらく一緒に居ていいでしょ？ 私もキサさんに会いたいし」

「『最小龍』では北の地は寒いぞ？」

「大丈夫、寒さには強い……は……ぶしゅつ」

そう言っておいて、沙龍はくしゃみをした。

この変温動物に近い姿では、体温の調節もできないようだ。

「私は……、どっち付かずだな……」

沙龍が、そんな言葉を漏らした。

それは我侷だと偉そうに飛龍に説教しておきながら、自分はその我侷を貫いているのではないかと。

西方軍の大將は『臨時一日休暇』を満喫した後、小龍を連れてまたどこぞへと向かい、東方軍の大將は総司令官とその情人（但し、いまは妙ちくりんな姿）を加えた行軍部隊を再編成し、北の地へ向かった。

相変わらず、徒歩の行軍である。

九雷の霊獣、黒焰虎は主の後を黙々とついてきている。

霊獣を持つのはVIPだけとはいえ、用意しようと思えば四輪駆動の軍用車もあるだろうし、九雷だけ先に鎮江楼に向かってもよさそうなのに、なぜ、わざわざ数日かけて歩いていかなければならないのか、沙龍には分からない。

しかし、パーティーに九雷が居る以上、それについての説明を要求するのは野暮にも思えた。

この道中で、沙龍はやっと今回の『戦争』の概要を知ることができた。

午後の休憩に入る前に、殿の九雷は歩きながら、沙龍にこんな話をしていた。

ミニ黄龍の沙龍は、ずっと九雷の肩に乗っている。

「今回のことで、将神着任を望む声の上層部で再度持ち上がったのは本当だ。お前を推薦している一派が居るのも事実で、景春はその派閥間の調整をしている」

「なるほど。それで、あの発言なのネ……」

将神は、異民族討伐を積極的に行う職である。

だから、将神さえ居れば、今回の異民族の侵攻もある程度は事前に防げたはず——と考える連中が出てくるのは仕方がないが、その連中とて、純粹に国益を考えているわけではない。

背後に別の利権も当然絡んでいるのだ。

「緑麗様はもう将神にはなりたくないってさ」

沙龍が冗談のように言うと、九雷は大きく頷いた。

それについては、全面的に賛成なのだろう。

「でも、『小競り合い』がいつの間にかこんなことになってたのか、教えてくれば、景春さんはムカつくガキに出会わずにすんだし、元帥だってお荷物な『最
小龍』を連れて作戦行動する必要もなかったかもよ？」

「なら、俺が『もうすぐ戦争になるから、大人しく水雲宮か帝都のホテルで過ごしている』と言っていたら、お前はそれを守ったと思うか？」

「ム……」

沙龍は黙った。

行軍も、そこで一旦、休憩となる。

帝都に開戦の合図でもある『防御結界』が張られたときは、既に北方エリアでは亡者を率いた大部隊が姿を現していた。

しかし、その緒戦において、北方軍は重要人物を捕虜にすることができたらしい。

その際に、北方軍大将の王霊君は負傷したとのことだが、苦戦は必至だったのだろう。

『敵』は五行の素養を全く持たない、極東異民族の神魔である。

東方天界に侵攻してきた動機や目的は不明——とのことだが、九雷は王霊君の報告を聞くまでもなく、彼らの狙いが『領土拡大』や『報復戦』ではないことは分かった。

「真武君が遭遇した敵の一人は、『ナカタ』と呼ばれていたそうだが……、沙龍、お前にはなにか心当たりはあるか？」

「ナカタ……？ 私が知ってる日本人のナカタといえば、イタリアでサッカーしていた人だけだけど……」

九雷と沙龍の会話は端から見れば、飼い主とペットである。

しかし、景春には、それがちゃんと『恋人同士』に見えた。

景春はまだ短い時間しか見ていないが、常に攻撃的な『土行』を撒き散らしていたはずの沙龍が、九雷の前ではその片鱗も見せないのである。

九雷は『木行マイスター』とはいえ、普段はそれを完璧に眠らせている。

だから、沙龍と九雷の関係は『木剋土』（注1） （もっこくど） だけで説明できるものではなく、この二人の関係そのものが、そうなっているとしか思えない。

「五行術が全く通用しない敵というのは、厄介だな」

景春が休憩中の沙龍にコーヒーを持ってきてくれた。

同じものを、九雷にも渡す。

その取ってつけたようなレディ・ファーストはなんだ、と沙龍は思ったが、巨

大なマグカップを目の前に置かれても、中身が飲めないと気付いて途方に暮れた。

「……そういえば、景春さんには聞きたいことがあったんだけど。前に水晶宮で襲ってきた亡者には、物理攻撃が全然通用しなかったよね？ でも、景春さんは奴らをぶった斬ってたよね？ あれはなんで出来るの？」

芝生の上にちんまりと座ってる沙龍は、いつの間にか話に加わっている景春を歓迎したくはないのだが、これは聞いておかねばならないことだった。

「なんだ、そんなことか。俺も『木行マイスター』なんだ。あれくらいの敵なら、問題ない」

「つまり、景春さんの剣術は純粋な物理力だけじゃないってこと？」

「そういうことだ。お前のシヨボイ『土行』じゃ、ランクAにはダメージは与えられない。今度、奴らに遭遇したら、大人しくしてろよ」

ムカ、としたのは顔にだけ出した。

ベタ甘な恋人（しかも景春にとっては上官だ）が居るにも関わらず、景春の自分に対する口調は変わらない。

いまのレディ・ファーストにちよつと感心したのは、忘却の彼方に葬り去ろう、と沙龍は思った。

「私は五行術はまるつきり素人なんだ。そこを突かれたって痛くも痒くもないわい」

「拗ねるなよ……」

景春は苦笑気味に、沙龍の目の前のマグカップにスプーンを突っ込んだ。

しかし、これがあつた所で、沙龍はまだコーヒーが飲めるわけではない。

巨大シャベルにしか見えないスプーンを、奮闘しながら持ち上げようとする沙龍に、九雷が手を出した。

「奴らが兵隊代わりに使役しているのが、ランクAの亡者で、これには物理攻撃は通用せず、五行のマイスターの技量が要る。しかし、逆に、極東の神々自身には五行術が通用せず、物理攻撃しか通用しない。……巧妙だな」

九雷がそう言いながら、スプーンで掬ったコーヒーを沙龍に飲ませている。

「なんで、『亡者』なんだろう？」

「さあな……」

川面の方から、気持ちのいい風が吹いてきた。

人型サイズなら単なる微風だが、いまの沙龍はこの風でも飛ばされそうになる。

「前にな、俺のことを『將軍』って呼んだよな？」

景春が、不意にそんなことを聞いてきた。

「……？ そうだったっけ？」

「あれには、なんか意味があんのか？」

「別にそういうわけじゃないんだけど……」

沙龍が、『もつとくれ』という顔をして九雷を見上げると、スプーンの中のコーヒーが目の前にくる。

それを見て、

「親鳥と雛みたいだな」

と笑う景春は、もう『將軍』の話は終わったつもりかもしれないが、沙龍はまだ考えていた。

「……なんだろう。こういうの、前にも……」

少し強い風を受けて、沙龍はなにかを思い出しそうな、なにも思い出せなさそうなの、そんな苛立ちを感じた。

春のこの季節の強い風は、『巽風』とも呼ばれている。

巽——八卦における東南。

東方軍大将たる景春。

そして、ここには東方青龍たる九雷も居る。

いまの敵は極東の神であり、自分が探しているのは東海龍王——。

見事なまでに、『東』が揃っているこの状況に、沙龍は黙止した。

ミニ黄龍の姿で居る間は、妙に思考が鈍ったり、変に鋭くなったりするので、あまり当てにはしていないのだが、これは単なる偶然ではないだろう。

重なる偶然は、必然だ、と風林にも教わった。

「ととツ……」

そのとき、強い風が吹いて、沙龍の身体は簡単に押された。

「ああ、ありが……」

それを支えてくれた人に礼を言おうと見上げたら、なぜか景春の寂しそうな顔

がある。

その瞬間、また、視界がフラッシュバックした。

「……？ ……『仁』？」

思わずそう呟いたら、景春の寂しそうな顔が、真昼間にお化けでも見たかのような顔になった。

「……っ!? なぜ——」

「そうだ……。私の前世じゃない。『この風景』は……」

沙龍は、前に、景春に腕を掴まれたときに見えた白昼夢を思い出した。

あの真っ白な視界の中に居た、数人の人影。

その一人が、景春であることは間違いない。

「景春、沙龍は触れた人物の夢や心を視る力がある。あんまり強く想っていると、読まれるぞ」

わけ知りな九雷の言葉に、驚いたのは沙龍の方だった。

「えっ!? なにそれっ!? そんなん、初耳なんですけどっ!?」

景春は無言で立ち上がって、行軍を再開しはじめる。

その背中が全てを拒否していた。

「沙龍、『仁』というのは？」

「うん、多分……、景春さんが前に呼ばれてた名前……かな？」

沙龍は、答えながらも、なぜ自分がそんなことが分かるのか、理解できない。いつの間に読心ができるようになったのか、いや、そもそもこれが『読心』なのかも分からなかった。

自分の体を掬い上げる九雷を、沙龍はじつと見つめた。

「聞きたいことが色々ありそうだな？」

「あるけど、それは後でいいとして……。いま、私が見たものが過去の事実だとしたら……」

沙龍がいまの刹那に見たものは、単なる断片的なイメージである。

映画のように連続した、分かりやすいストーリーではないのだが、景春の心に触れた沙龍には、一繋ぎの『歴史』が想像できた。

「『東海の至宝』は、人界じゃなく、天界にある——」

(注1) 木剋土……五行の考え方に、それぞれの性質を相互関係で説明するものがある。木剋土は『相剋(相手を打ち滅ぼして行く、陰の関係)』のひとつで、『木は根を地中に張って土を締め付け、養分を吸い取って土地を痩せさせる(から、木が有利)』というもの。

17 鎮江楼到着

パーティー・メンバーたちが防寒用のコートを着込む頃になると、沙龍も九雷の肩から懐へと移動した。

その状態で数日経過したはずだが、最後の方は冬眠しかけていたので意識も朦朧としていた。

だから、鎮江楼に到着したときはいつもの百四十五センチサイズに戻っていたことも、しばらくしてから理解した。

しかし、久しぶりに会った木佐に大袈裟な挨拶で抱きついたのは、別に朦朧としていたからではない。

「OH！ 我が心の友よ」

「なにやってんだ。欧米か」

「いや……、ちよつと実験を……」

冷ややかな木佐の言葉と態度にぶつぶつ文句を言いながらも、沙龍は、なにも

見えないこの状態が普通なんだよな、と思っっているのだろう。

九雷は、沙龍がなぜそんなことをしたのか分かっているので、口の端だけを上げながら、木佐に東方軍の一行のことを軽く説明した。

しかし、九雷が紹介する前に、木佐のことを先ほどからしげしげと眺めていた景春は、

「あんた……、ホントに男か？」

という、半ば禁句になっている言葉をあっさりと言ってしまった。

木佐小次郎は、十人居れば十人が『美形』と評する顔をしているし、顔立ちも中性的だ。

しかし、そんなにはつきり女性に間違われることはない。せいぜい、間違えるのは十人中二人くらいである。

さらに、それを口に出して言う者はほとんど居ないわけだが、言ってしまった者に対しての、木佐の反撃は必ずある。

「……。初めまして、東方軍大将景春殿、ようこそ鎮江楼へ」

（うわ。めっちゃ棒読み）

沙龍は、その様子を傍観していた。

大抵の者は、木佐の棒読みからありありと漂う冷氣に怯むのだが、景春には効かないようだった。

「偏屈だと噂の真武君が、こんな美人とは知らなかった」
そんな無自覚のダブル・アタックまでもが飛び出した。

「……キサさん」

木佐の形相がますます冷ややかになったので、沙龍は促すように呼んだ。

長旅とまでは行かないまでも、東から北への行軍はそれなりに過酷だったので、景春の後ろに控えている士官たちも早く一休みがしたいだろう。

分かってる、と言いたげに一度沙龍に振り向いた木佐は、彼らを鎮江楼に招き入れた。

広い正廳せいちよう（※正面の大広間）の方を見れば、九雷は既に『仕事』を始めている。

王霊君の部下二人が慌てて出てきて、九雷に敬礼をしていた。

沙龍は「風呂を借りる」と言っつて、勝手に客室に向かってしまった。

(なんなんだ、この一行は)

と、木佐が思ったのも無理はない。

北方軍の三人と同様、東方軍の一行に対しても、特に木佐が世話をする必要はなかった。

景春も「寝床を拝借できればそれで充分」と言っていたが、自分は一応はここ
の主なので、生活必需品の提供くらいはした。

九雷と沙龍に対しては、同じ扱いというわけにもいかないので、食事は作って
やった。

が、九雷は、食事を終えると、すぐにまた仕事に戻った。

沙龍は、食後の時間を木佐と過ごしている。

「その負傷した王霊君の仕事を引き継ぐつもりで来たんじゃないの？」

なぜ、わざわざ東方軍の大將が来たんだ？ という木佐の疑問に、沙龍が答え
た。

指揮を執るのなら、九雷一人で充分だろうと思うのだが、その辺りは沙龍にも
木佐にも分からない。

「……で？ 馨は一体なにしに来たんだ」

「あー、色々」

「色々？」

「そうそう、なんつーか、成り行きというか」

「つまり、無職暇人の遊び人がベタボレな恋人と離れたくなくてひつついて来ただけってことか？」

「辛辣だわ、相変わらず……」

沙龍は、木佐が淹れてくれたコーヒーを飲みながら、鎮江楼の二階から見える景色に視線を移した。

静まり返った夜である。

一面の雪景色が、闇を吸い込んでいるように見えた。

「でも、キサさんがアツサリしてるんで、安心した」

「なにが？」

「いや、私はあんまり日本人の自覚ないからいいんだけど、キサさんにしてみれば故郷の神様が敵になったらあんまりいい気分じゃないかなーって思ってたわけ

よ

「ああ……」

その話なら、別に大したことないという空気のまま、木佐は旧式の暖炉に薪をくべる。

沙龍が寒がっているので、薪はいつもの倍以上の量を持って来た。

この前、白帝君が来たとき、小屋一杯に作らせておいて正解だった。

「しかし、なんでいきなりそんな寒がりになったんだ？」

「知らん。きつと考えてもいまの私には分からないだろうから、考えてもいない」

「なるほど……」

沙龍は、天界に来てから、明らかに色々変わった。

以前の沙龍を知っている木佐には、その変化がよく分かるのだ。

それは、小さい龍に変身してしまう、というような肉体的な変化だけではなく、精神的な部分でもかなり変わったような気がする。

勿論、元の性格は変わってないはずだが、『恋人の仕事に同道する（自分はな

にもしないのに)』という所なんかは、以前の沙龍なら考えられないことだった。

「この前ここで捕まえたつてのも、日本の神様の一人なの？」

沙龍が話を戻した。

「三大軍神つて知ってるか？」

「ウーン……？　なんか聞いたことあるような、ないような……」

「建御雷、建御名方、たけみかづち たけみなかた経津主。ふつぬしこの三人がそう呼ばれている。こっちの世界で

言う『将神』といったところか」

「あ……」

沙龍は景春から同じ話を聞いたのを思い出した。

「で、本人かどうかは分からないが、この前、王霊君が捕縛したのが建御雷、逃がした方が建御名方と名乗ったそうだ」

「ふーん。私も、経津主つて神様に会ったよ」

「なんだつて？　どこで？」

「水晶宮で。なんか、様子見に来たつて感じだったけど。で、そいつははっきり

と『自分は本物じゃない』って言った」

「本物じゃない”って、クローンとか、影武者とかって意味か？」

「さあねえ……。捕虜になったそのタケなんとかとやらに聞けば分かるんじゃない？」

「建御雷」

木佐が言い直した。

「いいよ、どうせ覚える気ないし」

「ああ、なるほど。つまり、それを、あの無礼者の東方軍大将が調べるために来たのか」

「怒ってんじゃん……。やっぱ……」

沙龍もあまり人のことは言えないが、木佐も結構根に持つタイプだった。

初対面でいきなり『美人』と言われたことが引つ掛かっているのである。

「あの無礼さは、陽輝大将並だな。王霊君は実直で礼節をわきまえた将官だというのに……」

木佐の毒舌が始まりそうになったので、沙龍はそれは遠慮したい、と思った。

「別に景春さんの肩持つわけじゃないけど、あの人、悪い人じゃないよ」

「悪いとかいいとか言う客観の前に、好きか嫌いかという主観の問題がある」

「はあ、まあ、そうすね」

「でも、馨の好きそうなタイプではあるな」

どこかで聞いたようなセリフである。

が、沙龍は聞こえない振りをした。

「ところでキサさん、天界の領土の東端ってどこ？　水晶宮じゃないよね？」

もつと先でしょ？」

「東端？　なら、東極山だろ？」

「あれ？　山なの？　海じゃないの？」

「僕は行ったことないけど、確か、東極山ってのは東海に浮かぶ島だよ」

「ふーん……」

「それがどうかしたのか？」

「私、そこに行くことになると思う」

「なにをしに？　『戦い』にか？」

「私は戦争しに行くわけじゃないってば。『宝探し』だよ」
沙龍は、もう確信していた。

その東端の島に、『東海の至宝』はあるのだ。

なぜ自分がそう思うのか、はっきりとは分からないし、まだ情報は揃っていない。

しかし、景春が憂う巽風の秘密も、きっとそこにあるのだ、と思った。

鎮江楼の正廳は、天界軍の司令本部に早変わりしてしまった。

と言っても、数台のパソコンと通信機器が設置されただけで、火雲宮の本部ほど機能的ではない。

しかし、指令を出すだけならば、これで充分だった。

王霊君の二人の部下が、九雷の手足のように各所から入る情報を捌きながら、要所要所では九雷を振り仰ぐ。

九雷は、それを右の耳で処理して、大体は無言のゼスチャーで指示を出す。

たまに言葉も発したが、それは必要最低限だった。

左の耳につけているヘッドセットでは、直接、現場と連絡を取っていて、こちらではわりと長い会話も行われている。

そして、両手で別々のキーボードを操作しながら、自分の必要な情報を取り出しているのだ。

東方軍からの協力スタッフとして、この『司令室』に参加した冬踐は、最初は、たった三人で、いつもは三十人で捌いている仕事をする気か、と不眠不休を覚悟したのだが、実際に九雷の様子を見てみると、それが可能な気がしてくるから、怖い。

常々、景春が『怖い上官』と言っている理由がよく分かった。

「敖丁大将は十二時間遅れで水晶宮到着予定とのことです。陽輝大将は第一先行部隊と既に合流。南の本陣に到着した模様」

「第二四六小隊から通信確認。西域方面は『緑一色』。どこかの部隊を派遣する必要は？」

「ない。そのまま放っておけ」

夜半もかなり過ぎていているが、そんな会話が広い正廳にずっと響いている。

自分も手を動かしながら、冬踐は、九雷のこの恐るべき処理能力は、軍部よりも、株式市場で必要なのではないか、と少々皮肉っぽく思った。

しかし、乱暴な言い方をすれば、結局、株と同じなのだ。

まずは、どれだけ多くの情報を集められるかによって、優劣が決まる。

が、その情報に踊らされてはならない。中には偽の情報もある。九雷自身も、よく、『偽情報』をわざと流す手法を使う。

だから、真偽を見抜く目も必要になるのだが、これがなかなか難しい。

経験を積んだ老獪な策士ですら見誤ることがあるのだから、神仙世界ではまだ『若造』と評される九雷が見誤ったとしても、それは仕方がないことである。

と言っても、冬踐が知る限り、九雷が元帥になってから、軍部の失策というものはひとつもない。

前の元帥である東王夫は、たった一度の失策を犯したために、失脚した。

一般の将兵なら、頭を丸めるだけで済むが、トップとはそういうものである。

しかし、九雷が前任者より優れているところがあるとしたら、それは『真偽を見抜く目』ではなく、抽出した『真実の情報』からどれだけの予測を立てられるか、という想像力の部分であろう。

話は反れるが、帝都の士官学校では『シミュレーション・テスト』というものがある。

人界にも似たようなものはたくさんあるだろう。

制限時間内に、自軍の部隊の被害をどれだけ抑えて拠点を護りきれるか、と
いったものから、少数部隊だけでどこまで進軍できるか、といった、ゲームのよ
うなものである。

目標達成率が高くても、自軍の被害が大きければいい成績は取れないし、被害
がゼロだとしても目標が達成できなければ意味はない。

九雷はこのテストにおいて常に百パーセントの達成率と、最小の被損害率を
マークしていた。

そして、常に九十パーセント以上の達成率を維持していたのがいまの四方軍の
大将たちなのだが、例えば、陽輝は被損害率が高く、『軍規を破り過ぎ』と判定
されたし、景春は『自身の戦闘能力は高いが、全軍を効率よく動かすのが下手』
と言われていた。

実際の現場でこういったシミュレーションの結果がそのまま当てはまるわけ
はないのだが、九雷の成績に関しては何となく伝説になるくらいの逸話がある。

特定の状況下で起こりうる事態——というものが、九雷の頭には常に幾つも想
定されているのだろう。

そして、それらに対する事前策も、泉のように自然と湧き出てくるものらしい。

東王夫は、決断力もカリスマもあつた。

しかし、敵側の行動を想像することに関しては不得手だった。

だから、雅山戦役で敗走したと言われている。

結局は、敵の将の方が上だった——ということになるが、そのときの敵将、

『英雄クリシュナ』（注1）は、勝利者であるにも関わらず、このとき、軍を引いた。

引かざるを得ない事情があつたらしい。

戦争が終われば、戦士は用無しとなり、後は政治家同士の問題になるのだ。

その後、シヴァと玉帝の間で交わされた議論と条約により、境界が定められ、結局、痛み分けという結果になったのを、両陣営の将は臍を噛む想いで見ていたに違いない。

ちなみに、この雅山戦役で、一番功を上げたのが、若かりし頃の敖広である。

話を元に戻そう。

典型のお坊ちやまだった敖坤に長らく仕え、いま、劍技は四方軍一と言われている景春に仕えている冬踐は、雅山戦役を経験していないが、あの激戦だったと言われる戦争を九雷が指揮していたら、どうなったのだろうか、と考えた。

いや、これは、今度、同僚たちとの酒の肴にでもしよう、と思いなおす。

いまは、そんな横道の思考を許してくれるような状況ではない。

北方の地に現れた先鋒はかろうじて退けたものの、あの亡者たちは天界全域に渡って確認されている。

いつまた第二陣が襲ってくるか分からないのだ。

自分たちは東から北への道中で亡者に遭遇はしなかったが、予断を許さぬ状況であることは確かだった。

夜も更けて、客室の牀でうとうとしかけていた沙龍は、微かな物音に体を半分起こした。

そして、廊下の光に照らされた見慣れた黒髪が見えると、予想通りとばかり

に、完全に起き出した。

「ひと段落ついたの？」

「ああ……。まだ目途はついてないんだが……。起きてたのか」

「ちよつと、話したいことがあつて」

疲れた顔をした九雷が長椅子に座ると、沙龍は小さな冷蔵庫から缶ビールを二本持つて行って、その隣に座った。

「……。なんだ？　まさか、東極山に行きたい、なんて言い出すんじゃないだろうな？」

「あちやー……」

ズバリ言われてしまって、沙龍は視線を逸らした。

しかし、不意に腰ごと持ち上げられ、正面を向き合うように座らされると、もう逃げ場はない。

九雷はよくこれをやる。

沙龍は控え目に言っても小学生サイズなので、この方が『なにかを言い聞かせる』場合にはいいのかもしれない。

「一人で行く気か？」

「だったら、駄目って言いそうだね」

「いまの状況なら、そうだな」

「誰かと一緒ならいいの？」

「人選次第だな」

すると、二人は、ほぼ同時に言った。

「キサさんは？」

「真武君と一緒になら、いいぞ」

その息の合い方に、沙龍は可笑しそうに笑った。

「『東海の至宝』が東極山にあるのか？ それとも、そこに誰かが居るのか？」

「それに答える前に、ちよつと聞きたいことが……」

この前、九雷に当然のように言われた『特殊能力』について、沙龍は既に一度経験があつたのを思い出していた。

九雷と初めて肌を合わせたときに垣間見た、彼の記憶の中の風景である。

それは、心に強く残った、トラウマとも言えるシーンで、焼きついてしまった

感情そのものなのだろう。

『読心』とは、その人に触れることで、それらを『視る』ことができる、というものだ。

勿論、それには色んな条件がある。

全ての人の心が分かるわけではない。

当人が常にブロックしているようなことや、秘密にしているようなことは読めないし、双方の相性にもかなり左右されるらしい。

この技に長けた白帝君に言わせれば、『読心』は、以心伝心の延長に過ぎない、ということだ。

その白帝君は、視ようとして視ることができそうだが、沙龍の場合は景春の心にあつたものが、勝手に流れ込んできただけだった。

「景春さんって、東海龍王家の縁者かなにかなの？」

「景春が？ そんな話は一度も聞いたことはないが……」

「ム？」

「ただ……、景春は士官学校を卒業してから、しばらくフリーで人界を放浪して

いたはずだ。その間のことは俺は分からない」

「そっか……」

「沙龍。なぜ、景春にこだわる？　なにが引っ掛かってるんだ？」

「東——」

沙龍は、飲み干した缶ビールの右側の淵をなぞった。

地図上では必ず右が東になる。

「全ては『東』に関係してる。私が東海龍王を探すことになったのも、極東の神々が侵攻してきたのも、原因は同じでしょ？　巽風が弱まったから。じゃあ、なぜ、巽風は吹かなくなってしまったの？」

「それは……」

九雷も考えた。

確かに、巽風は東極山より吹く、と言われている。

しかし、実際には嵐の吹き荒れる東極山に近付く者は居ないし、そこになにがあるのか確かめに行く酔狂な者など居ない。

九雷も、今回の有事にあつて、巽風の結界の程度を調査しに行かせたのだが、

その特務のスタッフですら、東極山の本島には近付けなかったという。

帝都に届く巽風は弱まっているとはいえ、本島はずっと何千年もの間、嵐の直中にあるのだ。

「景春さんの心にも『巽風』というキーワードがあつた。景春さんは、なぜか、それを護らなきゃいけない、という責務みたいな感情が強くあるの。そして、それがなぜか『東海の至宝』、ひいては『東海龍王家』と関係があるんだよ」

ここにきて、『巽風』と『東海の至宝』が、沙龍の中でやつと繋がつたのである。

いままでは、互いに無関係としか思えなかつたその二つが、『東』という共通のキーワードでしか語れなかつたその二つが、景春にとっては同義語だった——それを、沙龍は、『読心』によって理解したのだ。

つまり、景春がその二つをつなげてくれたのである。

「なぜだ？ 景春は東海龍王家とはなんの関係もなかつたはずだぞ？」

「うん。たぶん、天界では、ね」

「……？ 人界ではある、いや、あつた、ということか？ 景春が士官学校を卒

業した後……？」

そこまで言っつて、九雷は気付いたようだ。

「地上に降嫁した、敖光の妹か。確か、巽凜公主といったな。景春とその巽凜公主が、なにか関係があるんだな？」

「うーん、さすがだ……」

沙龍は感心して、九雷の飲みかけの缶ビールを取り上げた。

そして、軽くキスをする。

「こういう関係ではないんだけどね」

「……？ 景春が公主に横恋慕していた、というような、簡単な話ではないってことか」

「そう。だって、巽凜公主は、女性として育てられていたみたいだけど、本当は男だったから」

いま、なんて言った？ という顔をする九雷に缶ビールを戻して、沙龍は少し長い話を始めた。

(注1) インド神話において『最高神』とされているのが、ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァ。『クリシュナ』は英雄として人気がある(らしい)。

四神府の中庭で昼寝をしている敖広は、近づく気配が誰のものか分かってい
た。

熟睡しているように見えても、半分は起きているのだ。

異凜には、その武術の達人たちの持つセンサーがよく理解できないのだが、敖
広くらいのレベルになると一キロ先で針が落ちても分かるのだろうかとうと勝手に思っ
ていた。

赤墨のような色の制服を着た敖広の横に、淡黄の上衣を纏った異凜が座ると、
風景が一層華やかになった。

「真武君に怒られなかったか？」

敖広が半目を開け、言った。

「怒られたけど……、白帝君がとりなしてくれましたので」



どこの官庁でも大体そうだが、四神府も基本的に部外者は立ち入り禁止なので、そういう一幕は簡単に予想できる。

いくら青帝青龍広君の妹とはいえ特別扱いは認めない、というのが真武君の弁で、「まあ、そう固いこと言うなって」と言うのが白帝君の定番なのである。

「広哥々、今日はお別れに来たんです」

「ああ、分かってる……」

「私の花嫁姿、見せられなくて残念ですけど」

「そうだな」

昼寝を再開しそうな敖広は、しかし、その眠たげな顔に笑みを含ませていた。

「でも、俺より、敖光の方が見たがってるぞ」

「もう……。二人とも、面白がってるだけでしょ」

敖広と同じ色の髪をなびかせている巽凜は、兄二人に比べれば確かに小柄な方だったが、女性として見たときには、特に華奢というイメージはない。

本人の涙ぐましい努力や、衣装の選び方、見せ方の工夫があつて、はじめて、普通の、美しき公主に見えているだけである。

巽凜は、東海龍王家の『長女』ということになっている。が、実際には、れっきとした男性だった。なぜ、巽凜が女性として生きなくてはならなかったのか、については簡単な理由がある。

巽凜の出産で命を落とした正夫人は、当時の東海龍王敖英ごうえいの最愛の妻でもあった。だから、その夫人に瓜二つだった巽凜は、敖英に『女として生きるように』と決められてしまったのである。

最愛の女の面影をいつまでも見ていたい、という男のエゴである。

しかし、幸いにして巽凜は己の境遇を嘆くこともなく、小さい頃は『女装』を楽しみ、思春期には完全に精神的に自分は女なのだ、と思うようになっていた。

だから、恋をしたのも、相手は男性である。

敖広は、この妹のような弟に、「人界の青年と結婚する」と告げられたときは、「逃げるのか」と思った。

謀略、暗殺、官僚の腐敗、そういった陰気が横行するこの火雲宮を憂いて、仙界や人界に寧日を求める帝都の住民は少なくない。

『天』とは名ばかりの、ここは、修羅の王城でもあるのだ。

しかし、巽凜は敖広や敖光と違って、なんの職務にも縛られない気ままな公主である。

だから、敖広が「逃げるのか」と思ったのは、東海龍王家の柵から逃げるのか、という意味合いのほうが大きい。

何代も続く名家にはそういった負の要素もある。

特に、近親婚を繰り返し、『血』を護ってきた東海龍王家には、見えない束縛があるのだろう。

そして、現在の当主たる敖光は、その『血』を一番濃く受け継いでいるようだった。

「やっぱ、東海龍王にはなりたくない、か……。まあ、敖坤でもいいんだが、あいつは本読んでる方が幸せそうなんだよなー」

「いくら『至宝』が勝手に指名したからって、いままで『公主』だった私が、いきなり髭はやした龍王になっても、キモイだけですって……」

「だったら、凜、『青龍』はどうだ？俺が死んだら、継ぐ者が居ない」

「広哥々も、光哥々も、私に仕事させたいんですか？前は早く嫁に行け、とか

言つてたくせに……」

と、巽凜は笑った。

おおよそ、この公主は怒ったり泣いたりということをしない人物だった。

いつもにこにここと笑っているので、『頭は悪そうだが愛想だけはいい』と宮中では評判である。

東海龍王家特有の、はつきりとした顔立ちをしているので、なかなかの美人に見えるし、実際、求婚者も多かった。

しかし、巽凜が選んだのは、冴えない田舎の国主で、当初は敖広も「あんな貧乏小国に嫁いだら絶対苦労するぞ」と冗談半分に脅していた。

敖広は本気のように冗談を言つて、それでも、巽凜の結婚を祝福していた。

冗談のように本気で止めさせようとしていたのは、敖光の方なのである。

だから、『東海の至宝』による指名を口実に、巽凜を次期東海龍王にして、水晶宮に残らせようとしたのだ。

実際、敖光の嫡子である敖坤より、妹である巽凜の方が『木行』の潜在能力は上だったが、巽凜はあくまでも『女』として、普通に結婚して、普通に幸せにな

りたい、と思っていた。

が、その巽凜でさえ、誰にも言えぬ秘密を隠し持っていたのである。

巽凜が斉国の若き国主に出逢ったのは、天界と人界の境界付近にある川べりである。

『地上に遊びに行った先で、ごく平凡な青年と恋に落ちた』——という、奏欽の乙女回路によって導き出された推測は、当たっているのである。

それは、巽凜にとっては、春の陽だまりのような恋だった。

火雲宮の第一線で働いている兄たちとは、かなりずれた感覚の中で生きていた巽凜には、こういった、のどかな田舎の風景と、素朴なだけがとりえのような青年の存在がなによりも安らげたのかもしれない。

巽凜は唯一、趣味として釣りを好んだ。

東海龍王家の公主の趣味としては、かなり変わっていると云わざるを得ないが、その日も鮎釣りをしているところを、斉国の国主に見初められたのである。

「貴女が何者であろうと、構わないのですよ。こんな貧乏な一国に嫁いで下さるといっただけで充分です」

人界に暮らす者ではない、という自分の正体と、本当は男であるとカミングアウトしたときも、相手は大して驚かなかつた。

しかし、巽凜の幸せな日々は長くは続かなかつた。

時は乱世。

幾つもの国家が乱立し、領土の奪い合いをしていた時代である。

東端の小国である『斉』が、列強に吸収され、滅ぼされるのも時間の問題だつた。

その『斉』の終焉を、わずか数年ではあるが、引き伸ばした男が居た。

『斉』の將軍である。

どこからやって来たのか、どこ生まれなのか、国主自身も知らないと言っていたが、彼の振るう劍の凄まじさには、中央列強のどんな猛将も舌を巻いた。

その男、名を、『楊仁^{ヤンジン}』と名乗っていた。

これが、景春なのである。

なぜ、景春が名前を変え、その当時、その場所に居たのかは分からない。

沙龍の見たシーンの中には、それについての説明が無かったのだ。

しかし、彼がこの若き国主に恩義を感じていたのは、確かである。

そして、巽凜の方も、楊仁將軍が自分と同じ、元は天界の住人であることが分かっていたようだった。

穏やかな気候と、豊富な水源に恵まれた斉国で、巽凜は『正妃』であるにも関わらず、よく、海釣りや川釣りをしていた。

夫君もよく一緒に釣りをして楽しんでた。

なぜ、そんなに釣りが好きなのか、と釣り糸を垂らす巽凜に、夫君が尋ねたことがある。

「東海龍王家の先祖に、一人、変わり者が居たそうなんですけど……、とある戦争中に、その変わり者の龍王は、戦火の飛び交う中、一人、呑気に釣りをしていた

のだそうです。そこで、周囲の者が問うたそうです。龍王が戦わずして、なぜ釣りを？ と。すると、その龍王は、『釣った魚を食うため』と答えたそうです」

声を出して笑ったのは、国主に同行していた楊仁將軍の方だった。

国主は、その話のどこがおかしいのか、分からない。

「つまり、戦争やるより、釣りをしていた方が楽しいんですよ」

巽凜の説明に、ようやく国主も理解した。

この正妃は、どこまでも平和主義者なのである。

だから、斉が滅ぼされ、国主が自害を遂げた後、残された兵士や防人たちが弔い合戦をしようとするのを、巽凜は許さなかった。

「仁……、戦っては駄目。討ち死には許しません。丈夫の想いが無になります」

「しかし！ このままでは人民は殺され、略奪の限りを尽くされます！ 同じ死ぬなら、俺は戦場で自分の仕事をまっとうして死ぬ！」

憤る將軍に対して、巽凜は悲しそうに微笑んだ。

「そうやって、誇りを持って死ぬのが軍人としての本望？」

「そうです」

「そんなの、悲しいわ」

楊仁將軍は、この公主はなにを言ってるんだ、こんなときに、と思ったはずだ。

落城の憂き目に会い、海岸沿いまで逃げ延びてきて、もう後はない、というときに、笑顔で言うセリフではない。

「私は、丈夫に殉死は許さぬと言われた身です。なら、私は、命ある限り、あの人の代わりに、この死にかけの国を護ります」

どうやって——？ 振り下ろされる刀の前で、神にでも祈るのか？ と將軍は詰問したい気分だった。

しかし、巽凜が言っている『この国を護る』というのは、結局、巽凜自身の命をかけた仕事なのだと分かったとき、將軍は絶望した。

「貴女が犠牲になれば、それこそ、国主の死が無駄になります！」

「いいえ。無駄になどしません。そのために、広哥々がこれを持たせてくれたんです」

と、鮮やかな青い珠を取り出す。

透明に輝く、紺碧の宝珠——、これが、『東海の至宝』である。

「兄、敖広は、全て分かっていたのだと思います。なんの力も持たないこの小さな国の運命も、敢えてそこに嫁いだ私の本意も……。そして、もう一人の兄、敖光がなぜ、哪吒太子にわざと討たれたのかも——」

斉国の落城と時を同じくして、敖光が哪吒太子に殺された、ということをも異凜は使いの者から聞いた。

この事件は、当初から、敖広と確執のあった哪吒太子が、間違えて敖光の方を殺してしまったのではないか——と言われていた。

半分は、事実である。

しかし、そう仕向けたのは、敖光本人であることを、敖広も異凜も理解していた。

敖光は、敖広に対してコンプレックスを持っていた。

見た目には同じ背格好で、ほぼ同じ能力を持つこの双子は、性格だけはまるで違っていた。

だから、父親の敖英は、二人のうち、どちらに家督を譲るのか、最後まで悩ん

だという。

が、それを察した敖広は、地位や官職には固執しない、という自分の性質も理解した上で、出奔した。

そうすることで、なんの問題もなく、東海龍王と東方軍大将の地位は、敖光が継承できると思っただろう。

問題はなかった。

しかし、敖光は、その兄の態度に複雑な思いを残してしまった。

自分だけ無頼を気取って、『龍王の座を譲ってやった』とでも思っているのだろうか——と、いう嫉妬に似た思いもあったかもしれない。

が、その想いの大半は、『自分が龍王になっていいのだろうか。兄の方が優秀なのに……』という、自虐的なコンプレックスだった。

だから、四神府において、敖広と哪吒太子の確執が深くなると、敖光はそれを憂いた。

あの気性の激しい哪吒太子と、いざ本気になれば鬼神の如く敵を狩る敖広がぶつかれば、どちらかの死は避けられない、と思っただろう。

確かに、それくらいの緊張感は当時の火雲宮にはあった。

だから、敖光は、思うところあって自ら兄の身代わりになったのである。

そして、この敖光暗殺事件と、斉国の終焉の時期が重なったのは、偶然ではない。

天界における東海と、人界における東海は、同じ海で繋がっている。

東海を護るべき龍王が死んだことで、その影響が直接、斉国に及んだのである。

「でも、光哥々は、人界を乱すつもりはなかったはずです。むしろ、逆……、火雲宮の陰気を鎮め、広哥々を生かすために、自らが犠牲になったのだと思います」

「その結果が、これか……」

「だから、丈夫に代わり、兄に代わり、私が東海を護ります」

巽凜はいつもの笑顔で、きっぱりとそう言った。

戦士ではない巽凜は、戦う術を知らない。

しかし、このときの景春は、非力であるはずの巽凜に勝てなかった。彼女を説

得することも、強引に力で言うことを聞かせることもできなかつたのである。

結局、この未亡人を東極山まで送り届け、その『仕事』に立ち会うことになった。

「同じことを言おう、巽凜公主。貴女は、それでいいかもしれない。そうやって、誇りを持って死ぬのが貴女の本望なら、残された者はどうすればいい？」

「違う……。そうじゃない。そんな暗くて怖い話じゃないの。『東海の至宝』は、元は『陽中の陽』とされた始祖の魂魄の欠片。だから、これを使えば、いま、天と地に蔓延している陰の風を吹き払うことができる。それが私一人の長い眠りで済むのなら、なにも悲しくなんかない」

「……」

「貴方の悲しみは永遠には続かない。でも、巽風は永遠に続くの。この至宝がある限り」

それが、巽凜の最期の言葉だった。

景春は、もう誰にも、巽凜の決意は変えられないのだ、と悟った。

自分は一体、なんのためにこの国の將軍になったのだらう。それは、あの若き

国主に救われた恩を返したかったからである。

しかし、実際にはこんなにも無力ではないか。

齊は滅び、国主は死んだ。

そして、いま、また、その未亡人が、逝こうとしている。

「なら、俺はこの『巽風』を命ある限り護ろう。それが、きっと、俺のできる、唯一のことだ」

その景春の強い思いが、沙龍に伝わったのだ――。

21 東方軍の内情

九雷に長々と昔語りをした翌日。

木佐に、『暇なら怪我人の看病でもしてくれ』と言われた沙龍は、王靈君が臥せっている部屋にお粥を持って行った。

第一印象は単なる『ごついオッサン』だった。全身に巻かれた包帯が痛々しい。

王靈君は、最初、沙龍のことを鎮江楼のお手伝いさんだと思ったのか、気さくに話しをしていたが、途中から態度が一変した。

「昨日……？ まさか、景春の部隊と一緒に来た、と？」

「是」

「もしかして、緑麗様……？」

「まあ、そう呼ばれることもあるが」

途端に、青くなつた王靈君は、豪快に食べていたお粥を脇に置いて、ベッドか

ら起き上がろうとした。

「いや、堅苦しい挨拶をする気なら、起きないで下さい」

沙龍がその大きな身体を押さえるようにしても、この大男は頑としてベッドから出るつもりのようなようだ。

「知らずとは言え、失礼な振る舞いをお許し下さい。自分は北方軍大将の王霊君であります。このような無様な姿を、無敗の将神の御前に晒して申し訳ありません。一軍の将としてただ恥じ入るばかりです」

「あゝ……」

こういう手合いだったか、と沙龍は脳内マニュアルを取り出す。

「王霊君、私は前世のことは覚えてないし、いまは将神じゃない。そう畏まられても、私の方が困る。できれば、一市民として接してくれるとありがたい」

そして、半ば強引に床につかせる。

王霊君は、包帯だけの上半身をぐらつかせながら、大人しくそれに従った。

「緑麗様は、自分にとっては未だに越えられない人でもあります。北方軍には、まだ昔の貴女を覚えている兵が多いもので……」

「ああ、そうか。緑麗は将神になる前、北方軍大将だったんだっけ」

「他人事のように仰いますな」

「記憶がないと、他人みたいなものだ」

「しかし……、それでも貴女がこの世界を選んだのは将神としての誇りを忘れなかったからだと自分は思いますが」

「は……？」

大真面目にズレたことを言う。

沙龍は、王霊君の印象を、『暑苦しくもボケたオッサン』と、上書きした。

「いや、そんな、ご大層な理由じゃないんだ」

その話はこれ以上してくれるな、というニュアンスで沙龍は言った。

景春に語らなかつたことを、初対面の王霊君に語るつもりはない。

確かに、端から見れば、沙龍は、前世の記憶がないのに、前世の世界を選んだ

——ということになる。

周囲が、それを『前世の因縁』として見るのは仕方がない。

しかし、沙龍にとっては、あくまでも『これは甲斐馨の選択』なのだ。そし

て、その理由を他人に説明する気はない。

沙龍は気の晴れぬ顔のまま、空の食器を持って食堂へと戻った。

木佐の姿はない。

とりあえず、木佐が客のために用意したであろうコーヒーを一杯もらって、広い卓についた。

九雷も、にわか司令室のスタッフたちも、東方軍のメンバーたちも皆、忙しそうに仕事をしているので、沙龍はなんとなく手持ち無沙汰である。

一人、休憩中の冬踐が、同じくコーヒーを飲んでいて、世間話をする羽目になった。

「元帥閣下は頭の回転が早すぎてついていきません」

冬踐は苦笑いと共にそんな愚痴を漏らし始める。

「頭はいいんだらうけど、あの人は本当は参謀向きじゃないような気がするんだけどな」

「そんなことを仰るのは緑麗様だけですよ。元帥閣下は指揮官としては素晴らしい能力をお持ちです」

その言い方を素直に取れば、恋人を褒められて悪い気はしないのだが、『指揮官としては』という条件付きである。

もしかしたら『性格は別にして』という言葉も隠れているのかもしれない。

しかし、冬踐がやけに九雷のことを褒め続けるので、沙龍は言った。

「本当の上官は景春さんの方でしょ？ 本音はそっちを手伝いたいんじゃないの？」

「大将はお一人でも大丈夫です。むしろ、自分が一緒では足手まといになるかと……」

過日、水晶宮前で沙龍に指摘されたことを言っているのかもしれない。

確かに、冬踐は大将付き副官にしては、お喋り過ぎるし、同じ副官の夏招に比べれば能力的にも見劣りした。

しかし、だからと言って、この士官が無能なわけではない。

エリートしか入軍できないと言われている東方軍で、長年この地位に居るのだから、推して知るべしである。

「まあ、強いもんね。景春さんは……」

沙龍は揶揄気味に言ったのだが、冬踐は食いついた。

「はい！ それはもう！ いまや、四方軍一ではないかと！ 大将自ら、先陣を切ってこそその東方軍でありますから！」

「前の大将は、あんまり現場には出ない人だったの？」

「あ……、敖坤様、いえ、前任者は、どちらかと言うと文官寄りでしたので……」

冬踐のテンションが、急に萎む。

帝都では、先の龍王家のクーデターにおいて、敖坤は敖吉の共犯にあらず、という公の発表を信じてない者も多い。

元々、親の七光りと噂されていた敖坤である。

冬踐としても、その前の上官のことを、良くも悪くも言えないのだろう。

「別に困らせるために聞くわけじゃないけど、なにか、おかしいよな？」

「はい……？」

「ここ数日、東方軍の士官諸君と一緒に居て分かったんだが、皆、この話になると口を閉ざすんだ。そりゃ、景春さんの前で、前任者の話をするのは気が引ける

だろうが、皆、示し合わせたように、敖坤の名前を口にしない。しちやいけない、みたいな空気がある」

「それは……、敖坤様が、貴女になにをしたのか、皆、知っているからですよ、緑麗様」

「それは昔の話か？ それともいまの話か？」

「両方です。敖坤様が、緑麗様を慕っておいでだったのは分かりますが、最後は正常な判断を失っておられたのが、我々にとってなんとも残念なのです」

「つまり、狂うまではそれなりにいい上官だった？ しかし、狂ってしまった上官に対する憤りや、その上官が迷惑をかけた人物が目の前に居ると、負い目も出てくるってことか？」

「いえ……、その……」

と、しどろもどろになった冬踐に、救いの神が現れた。

「冬踐、お前じゃその偉そうな元将神には太刀打ちできません。休憩は終わりだ。元帥の所に戻れ」

いきなり威圧するような空気と共に食堂に姿を見せた景春は、東方軍の黒い装

束ではなく、天界軍の濃紺の軍服を着ていた。

その背後には、同じく濃紺の軍服の副官、夏招が追随している。

(チツ……、また喧嘩売る気かよ)

沙龍は、内心で舌打ちをする。

「了解です。では、緑麗様、失礼します」

冬踐はホツとしたように頭を下げ出て行った。

「景春さん、その、元将神つての止めてくれませんか？」

「気に障るか？ だとしたら、あんたは前世にあまりいい感情を持ってないってことだな」

沙龍の目の前にドカッと腰を下ろした景春に、夏招がコーヒーを持ってくる。

ここで背を見せたら負けだとも思ったので、沙龍も居座った。

「さて、さっき冬踐をいじめていたネタだが、分かる範囲で俺が答えてやる」

景春からそんな話題が提供された。

いじめてたわけじゃねーよ、と言いそうになったのをなんとか堪え、沙龍は顎を上げた。

「ホー、聞きましたようか」

「敖坤は、東方軍の連中にそこそこ好かれてはいたんだ。現場に出ないお坊ちやんとはいえ、人柄は悪くはなかったからな。……しかし、それには、敖光の存在があつてこそ、だ」

「敖坤の親父？」

「そうだ。俺にとつては先々代の前任者になるが、東方軍の長い歴史の中でも秀逸と言われた大将だ」

「そして、東海龍王でもあつた人ね」

景春は頷いて、一度、話を置く。

警戒しているのはどちらかと言うと沙龍の方で、景春は無意味な喧嘩を吹っ掛ける気はないのだが、そもそも、景春は最初から沙龍を好ましく思っていない。

きつい物言いになるのは否めなかった。

「……敖光には、第一級の『功』がある。身を呈して、火雲宮を護った、という、な。それを、東方軍の兵士たちはずっと忘れていない。奴らにとつては、崇めたりない存在だ。だから、その息子が凡庸だろうと、大将と仰いでいままでき

たのさ」

「『第一級の功』って？ 哪咤太子にわざと殺されたとかいう事件のこと？」

沙龍は、その話は『東海の至宝』探しにも関係があると思ったので、聞いた。

しかし、景春はここに来て、普段から険しい瞳を一層険しくした。

「沙龍」

「……。なんだよ」

沙龍は、改めて自分をそう呼ぶ景春に驚きながらも、やはり、喧嘩腰で答える。

「なぜ『東方軍』や『東海龍王家』のことがそんなに気になる？ 世間話という

には、『民間人』にはご法度な話題だぞ」

「自分で話しておきながら、なんて言い草だよ……。単に、噂好きの、ミーハーなんだ」

「違うだろう。あんたは」

秀困気が益々険悪になってきたが、仁王立ちで控えたままの夏招は銅像のように動かない。

確かに、こっちの副官の方が優秀だな、と沙龍は思った。

冬踐の戻った司令室では、九雷が声に出さずに笑っていた。

全ての館内通信をオンにしているので、食堂での会話も筒抜けなのである。

「お前の窮地を救った景春が、今度は沙龍に喧嘩を売ってるぞ」

「元帥……、助けられないんですか？」

「どっちを、だ？」

「ええと……」

冬踐は、意外にも鷹揚な九雷に好感を持った。

昨夜から、既に嫌というほどの采配を見せ付けられ、九雷に魅了——いや、洗脳かもしれないが——されつつあるのかもしれない。

しかし、呑気に世間話をしているわけにはいかない。

冬踐は、パソコンの前に座って、ヘッドセットを装着すると、次々に各所から入る情報を処理しはじめた。

食堂では、沙龍と景春の『喧嘩』が続いている。

「お前は一体なにをしようとしてるんだ？　いま、お前がやってるのは監査や諜報の仕事だぞ？」

「そう取られるのか。じゃあ、今度、大河ドラマ小説でも書こうと思ってるから、その参考にってことで納得してくれ」

景春が苛立ったのが分かった。

「お前は、ミーハーな噂好きでもないし、小説家志望でもない。そして、元帥は機密を漏らすはずはないし、そもそも、婚約者に仕事を頼む人じゃない。とすれば、お前は、自分の意思で、なにか、民間人が首を突っ込んではいけないようなことをしようとしてるってことだ」

「なんで断言すんだよ。密かに恋愛小説書いてるかもしれないじゃないか」
「フン……」

景春は、鼻で笑った。

どうも、この職業軍人には、こういう冗談は徹底的に通用しないようだ。

沙龍もいい加減疲れてきたのか、誤魔化す方向から、押し切る方向に態度を変えた。

「しかしな、景春さん。元帥が黙認してる以上、景春さんに余計な口出しされる謂れはないぞ」

「前に言わなかったか？ 今後、俺の邪魔をするようなら、容赦はしない、と」

「頭悪いんで、忘れた」

「嘘をつけ。覚えてるはずだ」

「景春さんこそ、やけに私に突っ掛かるじゃないか。そんなに探られて痛い腹なら、いつそ全部切り取って、東海の最果てにでも捨ててきな」

「お前は……っ」

景春が立ち上がって、本気で怒りかけたとき、鎮江樓の館内スピーカーからけたたましい警報が鳴った。

その鳴り方は、軍属でなくとも意味が分かる。『敵襲』である。

続いて、司令室のスタッフの誰かの声が聞こえた。

「『北の本陣』にて、敵部隊確認。既に攻撃を受けています！」

「本陣？　って、どこよ」

沙龍の呟きを無視して、景春は立ち上がった勢いのまま、夏招と共に食堂を出て行く。

入り口で木佐とぶつかりそうになったが、その木佐も、既に七星剣を手にしていた。

「真武君！　同道してくれ！　あんたが居ないと、ここじゃ戦いにならない！」

「九雷元帥は？」

「後で黒焰虎で来るだろう」

景春と木佐の会話を背に、沙龍は正廳へ向かった。

鎮江楼の玄関先で黒焰虎に乗り込む九雷が、まだどういふつもりなのか分からなかったので、沙龍は見守っていた。

しかし、沙龍の顔には、「連れて行けー」という怨念がありありと滲み出ている。

まだ昼前という時間だったが、この寒冷地は曇天が多く、沙龍の薄い色の単衣は、風景の中に溶け込んでいるように見える。

そのせいで、沙龍の厳しい表情だけが、却って目立つのだ。

「もしかして、一緒に行きたいのか？」

こう聞く時点で、九雷は既に諦めているのだ。

「もしかして、置いて行くつもり？」

「確かに、お前をここに置いていったとしても、鎮江楼に敵襲がないとは言いきれない。俺の目の届く所に居た方がいいかもしれないな……」

それは自分を無理矢理納得させる言い方でもある。

差し伸べられた手を取って、沙龍は黒焰虎に乗り込んだ。

「ごめんね、我侘な恋人で。……でも、私はこの我侘を押し通せなきや、ここに居る意味はないんだよ」

それは、九雷にも理解できる沙龍の想いである。

しかし、いま、半分意地になって、それを実践しようとしている沙龍は、自分ではその意地の部分に気付いていない。

沙龍の理屈で言えば、なら、命ある限りずっと九雷の傍に居なければならぬのだが、普段、それをやっているかというところ、そういうわけではない。

「景春さんには怒られそうだけど」

沙龍はそう付け足したが、苦笑するかと思った九雷が微妙な顔をしたことには気付かなかった。

『北の本陣』とは、鎮江楼から少し南に下った所にある、天界軍の北方地区における本拠地である。

普段、王霊君はここに常駐して北方異民族に睨みを効かせているわけだが、い

ま、その大将はまともに歩くこともできない。

そして、北方軍の大將代理（副將）は、九雷の指示で少数部隊を引き連れ、西に向かっている。

つまり、『北の本陣』では、いま、部隊を統率する者が居なかったのである。

勿論、大將代理がさらに不在のときに、指揮を執る役目を負っている将官は居る。しかし、その将官に同じだけの統率力を期待するのは酷である。

案の定、黒焰虎を駆る九雷の眼下には、眉をひそめる光景が広がっていた。

白一面の雪の上に、赤黒い染みが点々とついている。それが北方軍の兵士たちの姿であり、もはや動かない状態であるのは、沙龍にも分かった。

そして、少し視線を南下させると、本拠地施設の鉄筋の建物の周囲に、動いている影がいくつか見える。

「沙龍、しばらく黒焰の上に居ろ」

九雷は、黒焰虎を地表に近付けさせて一人で降りると、そのまま、施設の横手にある小高い丘の方に向かった。

いま一番動きのある施設正面エリアには、木佐と景春の姿がある。

敵は全て、ランクAと思われる亡者だった。

それが無数に蠢いている。

沙龍の見たことのない、狼のような獣も居たが、全身が黒々と煙のようなものに包まれているという共通点は変わらない。

「黒焰、敵のボスの姿、見える？」

九雷の向かった先に視線を移しながら、沙龍は自分でも探してみたが、それらしき人影は見つけられなかった。

「居ます。百メートルほど先に、二人」

「二人？」

「御意」

沙龍は、改めて戦場になっている眼下の雪原を見渡してみた。木佐の居る周囲だけ、茶けた地表が見えている。景春や東方軍の士官たちが動きやすいように、木佐が『水行』をコントローリングして、雪を排除しているのだろう。

(まったく、いつの間にああいうことができるようになったんだ)

沙龍は他人事のように、また、丘の方に視線を戻した。木佐や景春に加勢は必

要ないし、九雷にだって必要はないだろう。なら、自分はここで高みの見物をしていればいいのだろうか。それが九雷の望みなら、それでもいい。

しばらくは大人しくしていよう。

木佐の周囲では、亡者が全て凍り付き、コマ送りのようなスローな動きになっていた。

王霊君が木佐に協力を求めに来た本当の理由が、これである。

東方天界の土地の持つ氣脈は、四方将神によってしか制御できない。

木佐が望めば、この地は巨大スケートリンクにもなるし、湖にもなるということなのだ。

『五行の世界』とは、そういうものである。

西洋ではこれを『元素』という言い方をする。自然の力は、自然ではない。

五行を操り、元素を操る者が、人界では神と呼ばれる。それだけのことだ。

いま、自由に水行の氣脈を変えられる木佐がここに居るだけで、軍部にとって

は絶対的に有利なのである。

コマ送り状態の亡者たちが、木佐の七星剣の一振りによって、塵となっ
ていく。

景春が倒した亡者の数は、木佐が塵にした数の半分も満たないだろう。

「美人で強いつてのは反則だと思うが」

景春は、そういえば最近、同じようなセリフを言ったな、と思い出した。

「この顔で生まれてきて、そこまで面と向かって嫌味を言われたのは初めてです
ね」

そう言う木佐の視線は、建物の横手にある丘に向いている。

「嫌味じゃないんだが、気に障ったんなら謝るよ」

同じく、その方向に、景春も視線を向けた。

その小高い丘の頂上付近で、一瞬、なにかが光った。

あれは、雷鳴の光である。

灰色がかった空を、真つ二つに縦に割るような光の筋。

「毎回、彼に見せ場を持っていかれるのも、面白くないな」

木佐の眩きに、景春が笑った。

「同感だ」

丘の上に降り立った九雷は、既に、二人の将のうち、一人を戦闘不能にしていた。

有無を言わずの先制攻撃である。

「古来、大陸からの進撃に対し、倭人は、間抜けに己の名乗りをあげている最中に矢に射られたというが、その学習能力の無さは致命的だな」

九雷は、肩に担いだ長刀を抜いてもいない。

雷鳴で敵将を貫いただけである。

同時に二人を戦闘不能にすることもできたはずだが、一人残したのは、知りた
いこともあったからだろう。

「貴方が司令官か？」

一時間前は、ほとんど、北方軍の部隊を全滅できる勢いだったのが、木佐と景

春の登場で、勢力図はあつという間に塗り変わってしまった。

さらに、この黒髪の背の高い男は、一瞬で同僚を灰にした。

とても勝ち目はない——と思ったのか、一人残った敵将は、身構えていた姿勢を崩した。

白い装束を身につけたその男は、人間で言えば四十歳前後くらいの、いかつい体軀をしていた。

明らかに、軍神という風体である。

「そうだ。他国に攻め入ろうという覚悟の割りには情報が甘いな」

「なぜここに居る。九天きゅうてん応おう元げん雷らい声せい普ふ化か天尊てんそん」

その敵将は、九雷の本名を澱みなく言った。

「火雲宮の本殿で、靴磨きでもしていると思っただか？」

「……」

敵将は九雷の煽るような口調に嫌悪を表わした。

「降伏か死か、どちらかを選べ、建御名方たけみなかた」

九雷がなぜ自分の名前を知っていたのか、建御名方自身は知る術はない。

「なにも話すことはない。降伏もしない」

「そうか、なら——」

「しかし、自決もしない！」

将官クラスには迂闊に手を出すなど言われていたが、こんな僻地に敵の総司令官が居るのは計算外だった。

いや、最初から計算などはしていない。

そもそも、彼自身、作戦参謀でもなんでもない、ただの使い捨ての先鋒だ。

建御名方は、先ほど納めた蔓のようなムチを手に、身構えた。

「私は日の本の軍神、建御名方。故あって、ここで、無駄に長き時を生きたこの魂を散らす所存——。お付き合い頂こうか、東方天界の神々よ！」

建御名方は風神でもある。

周囲に纏う風を鎧とし、植物をも自在に操る。

しかし、この北の地は雪と氷に覆われ、彼自身の味方になるものはほとんどない。

九雷は、肩に乗せていた無銘の長刀を降ろそうとしたが、そこに、遅れて到着

した景春が前に出た。

「下がって下さい、元帥！」

既に鞘から抜き放った大振りの刀を向け、景春が建御名方を牽制する。

「いきなり総大将と戦えると思うな。俺が相手になる！」

木佐は「出し抜かれた」という顔をして九雷の隣に来たが、既に七星劍は納刀している。

「真武君、お前はいいのか？」

「時間外労働ですから」

と、負け惜しみを言う。

「四方軍一と評判の東方軍大将か。相手にとって不足はない」

建御名方が唸るように言ったが、景春は訂正した。

「天界一だ」

それを聞いて木佐が、

「……あんなこと言ってますよ」

「それくらい我自負がなきや、大将なんか務まらん」

九雷もリラックスした口調で言った。

景春と建御名方は、しばらくお互いの力量を測るように、数秒睨み合っていた。

景春は一撃必殺の技で敵を倒すのを得意としていた。

これは、一瞬で勝負がつく抜刀術と似ているようで、まるで違う。

木佐の解釈で言えば、薩摩の示現流寄りの剣技だ。

初太刀から全力で、いや、初太刀で全てを終わらせるという、圧倒的パワーである。

だから、初太刀を外されることは景春にとって、勝率を下げることになってしまふ。

尤も、いままで、それを外されたことは一度しかない。

(射程は長そうだが、問題は強度だな。ただの鞭ではあるまい——)

先手必勝と判断した景春が、左足に重心を移し変えたとき、

「下がってる、この職業軍人！」

いきなり、真上から降ってきたものがある。

「……っ!？」

景春の眼前を塞いだのは、沙龍の白い着物である。この雪景色の中にあつて、それは、雪女のような——と言いたいところだが、せいぜい、小柄な沙龍は雪童にしか見えない。

当然、九雷と木佐も、沙龍の登場には驚いた。

「何者だ!？」

沙龍の手には、鎮江楼から持ってきた『大和守秀国』（※沙龍の愛刀）がある。

メンテのために木佐に預けていたものだが、木佐はこれを鎮江楼まで持ってきていたらしい。

沙龍は、なにか文句を言おうとした建御名方に向に構わず、一度着地した脚をバネにして、斬り付けた。

「高々と名乗りを上げるつもりはないぞ。大和魂はないんでね——っ!」

なんであのトラブル・メーカーを連れて来たんですか、という木佐の非難の視線よりも、いきなり見せ場を奪われた景春の方が、九雷に対する憤りは強い。

が、その憤りは、本来、九雷ではなく、沙龍に向けられるべきものだ。

「……どういう趣向なんです？」

なんとなく沈黙してしまった九雷と木佐に振り返り、景春はありったけの理性を総動員して聞いた。

でなければ、上官である九雷に喚き散らしてしまいそうになるからだ。

「なにか考えがあるんだろう。好きにさせるさ」

九雷は結構、呑気なことを言っている。

「なにも考えてないだけかもしれないよ……」

その木佐の推測の方が的確かもしれない。

景春は、やり場のない怒りを沸々と抱えたまま、「俺の部下なら絶対クビだ」

と漏らした。

三人の耳に、先ほどから白刃の触れ合う音は聞こえてこない。

敵将、建御名方の武器は、しなるような鞭なのだ。

対して、沙龍は『大和守秀国』という、クオリティーとしてはごく普通の日本刀を振るっている。

この武器に関して言えば、以前、使っていた『備前長船秀光』の方が、名刀と言われるだけによく斬れたし、見た目も美しかった。

しかし、沙龍は、実践的なこの秀国の方を好んだ。

『いい刀』の蘊蓄など垂れるつもりはない。問題は、実践向きかそうでないか、それだけなのである。

「何者だ!? 女子供の出る幕じゃない!」

この突発的な事態に、建御名方はやや圧され気味のようだった。

「死にたいだけなら自分の国でハラキリでもしやがれ!」

沙龍は、敵将の鞭を何度か斬ったはずだが、いつの間にかそれは再生、復元されていった。

(こりや、斬っても無意味か。なら……)

懐に入り込むしかない。

しかし、それを簡単にやらせないための鞭であり、風の鎧である。

『風』——という概念は、もともと、五行世界の中にはない。

あるとしたら、それぞれの『行』が持つ、『氣』の流れが、結果として風になるだけである。

土を撒き散らすことで、風は起き、炎の揺らめきが、熱風となる、といった具合だ。

だから、建御名方の操る風は、ここでは、五行力で簡単に消し去ることもできる。

有体に言えば、五行の力を発揮できる武器でもあれば、風の鎧は貫通できるということである。

何度目かの接近を仕掛けたとき、沙龍は一瞬、背後を取られた。

「……！」

観戦していた三人の中で、景春だけが「あのバカめ」という顔をしたが、それ

が沙龍の故意であることもすぐに分かった。

既に勝敗は決していたのだ。

沙龍の右手には、逆手に持った聖魔剣がある。

その刃先が、背後の建御名方の胸を深く貫いていた。

建御名方の見開いた目が、苦痛の表情になる。

「お見事——」

一番文句を言っていたはずの景春の言葉である。

九雷は当然だ、という顔をしているし、木佐は最後のその攻防を見てもいな

い。耳元の通信機で、鎮江楼に残った仮司令室のスタッフと連絡を取っているようだった。

「大和を守るべき刀で、大和の神を討つわけにはいかないからな……、というのは建前だが、なにか言い残すことがあれば聞いておこう」

鈍い黄金色を発する聖魔剣の刃から、建御名方の血がどくどくと伝ってくる。

「お前の名前を聞いておく」

もはや、死を覚悟したであろう建御名方が、苦痛を感じさせない声音で聞い

た。

「甲斐馨」

沙龍はそう答えた。

問われれば、この名を使う。

沙龍にとっては、便宜上の名前である。

「将神か」

「違う。ただの人間だ」

「人間……？　なのに、アラタマを持つ者、か」

「……『アラタマ』？」

「異国で果てることは本意ではないが、これで私の魂も冥府の闇に沈まずに済む——」

そのとき、血を吐いた建御名方に対し、沙龍が動こうとした。

「待て、それはどういう意味だ!？」

景春の言葉を聞き入れず、沙龍は聖魔剣を全力で引き抜く。建御名方の体からまるで全ての血が噴き出すように、飛び散った。

最後の苦痛を終わらせてやろうという沙龍の行動だが、景春は、舌打ちせざるを得なかった。

「……」

返り血を全身に浴びている沙龍は、まっすぐに立って、建御名方の身体が塵のようになって消えていくのをじっと見ていた。

戦いが終わると、外気の冷たさだけが戻ってくる。

しばらく、誰もなにも言おうとしなかった。

「なぜ殺した？ いや、その前に、なぜ勝手に……」

景春が一呼吸置いてから沙龍に詰め寄ったが、その景春も沙龍の表情を見ると言葉を失った。

（「なぜ……？」）

景春は、自分でもそれを考えた。

恐らく、自分だったら——少なくとも、軍属なら——、敵将は殺さず捕縛したはずである。

王霊君も、そういう縛りがあったからこそ、負傷したのだろう。

殺していいのなら、あんな怪我は負わなかったはずだった。
しかし。

建御名方は死にに來たのだ。

それを理解したのは、なにも沙龍だけではない。

(俺たちに出来ないから、自分がした——とでも言うつもりか?)

景春の疑惑の視線を、沙龍も察した。だから、

「違う」

と、短く答えた。

(違う……? なにが違うんだ。じゃあ、他にどんな理由があるっていうんだ)

景春は、再び考えたが、今度は答えは与えられなかった。

「経津主が『自分は本物じゃない』と言った意味が分かった。彼らは元は人間だ

ね。『神』じゃない」

沙龍の報告の言葉は、九雷に向けられている。九雷は一度頷いた。

「……なんで分かったんだ?」

そう聞いたのは木佐の方である。

「『気配』が違う。前にドクターが言ってたけど、人間の体が発する『気配』ってのは、『波』なんだそうだ。元帥や景春さんには、それが無い。でも、さっきの中年にはあった」

「元は人間……？　じゃあ、なぜ『神』を名乗り、特殊な力が使えるんだ……？」

「さあ？　なんでだろ？」

それには興味がない、と言わんばかりに沙龍は足元の雪を拾って、手を洗っていた。

「ひとまず、鎮江楼に戻ろう。負傷者を収容しなければ」

木佐が提案すると、九雷は惨状を見渡して、溜息をついた。

「戦死者の方が多そうだがな——」

九雷の言った通り、生存者は数えるほどしか居なかった。

しかし、幸いだったのは、北方軍は現在、他の四方軍へ小隊単位で出向している者が多いという点だった。

『北の本陣』に残っていたのは、北方軍全軍の四分の一に満たない兵力だったのである。

勿論、だからこそ、建御名方が奇襲を掛けたのだらう。

敵の目的としては、先に捕まった建御雷の救出作戦というのが考えられるが、建御名方の散り際を見るに、それはついでだったかもしれない。

緒戦で王霊君に深手を負わせ、結局は捕虜となった、その建御雷は、『北の本陣』に收容されていた。

しかし、尋問には黙秘を貫き通し、今回の奇襲の最中に、監視の目を逃れて自害したという。

遺体は、残っていないかった。

それを確認した景春は、ずっと険しい表情を貼り付けたままだった。

副官の夏招は普段から一切無駄口を叩かない男だが、その夏招が鎮江楼への帰還をうながすほど、景春の精神はささくれ立っていたようだ。

建御名方を葬った沙龍の行動が、頭から離れない。

(あいつは厄病神か)

景春は、本陣の地下牢の壁を叩きながら思った。

思えば、沙龍に出逢ってから、自分の仕事はなにひとつ上手くいっていない。

五行砲を改装していたのは確かに情報攪乱用の作業だったが、沙龍にああも簡単に指摘されてしまったのは、天界軍の面子が立たない。

水晶宮に現れた経津主も、あのとき、捕えることができなければ、その後の展開は大きく変わっていたはずなのに、逃げられたのは沙龍のせいである。

奏欽を同行させ、南海龍王家と余計な関わりを持ってしまったのは、いまの所プラスなのかマイナスなのかは分からないが、それも、奏欽に非はない。結局は、無茶を押し通した沙龍のせいである。

それらの出来事を、ひとつひとつ思い出すだけでも、景春は沸々と怒りを感じ
るのだ。

沙龍が、自分の腕に自信を持つのは分かる。

我侂や無茶が許される場所で生きてきたというのも、理解はできる。

しかし、だから、好き勝手やっていい、という理由にはならないのだ。

そう、絶対。

景春が鎮江楼に戻ってきたのは夜半過ぎだった。

先に、木佐たちが、負傷者数名を収容していたために、鎮江楼は重い空気と、
薬品の匂いが漂っていた。

しかし、相変わらず、医者はい居ない。

ほぼ壊滅状態だった『北の本陣』には軍医が居たようだが、奇襲の際に亡者に
やられた、と生き残った負傷兵が沙龍に告げた。

負傷兵たちの世話をしているのは、沙龍だけらしい。

九雷は司令室から離れられなかったし、木佐は賄いやその他の雑務があつたからだ。

といつても、手があいてたととしても、医者として働ける者は元々鎮江楼には居ない。

沙龍も、応急処置くらいしか出来ないのに、無理矢理、この役を押し付けられただけである。

「なにやってんだ、あいつは」

深夜の薄暗い食堂で、一人、座って箸を持ったまま寝ている沙龍を見て、景春は珍獣を見るような目で言った。

木佐が作ったであろう弁当を前に、船を漕いでいるのだ。

起こそうかどうか迷ったが、そのとき、包帯で腕を吊った見慣れぬ士官が一人、沙龍に上着をかけてやっていた。

その士官は、比較的軽症だった北方軍の生き残りの一人である。入り口に立つ景春を見て、すぐに敬礼しようとしたが、利き腕が動かず、難儀した。

それを、景春は「やらなくていい」と、手で制した。

「なにかあったのか？」

「え？」

士官が、その言葉の意味が分からなかったようなので、景春は言い直した。

「こいつが食事の途中で寝るほど、疲れるようなことをしてたのか？」

「緑麗様は、私の部下の命を救って下さいました」

「救った、だと？」

景春の言い方に、士官は一瞬怪訝な顔をしたが、続けた。

「致命傷を負った、もう助かりそうにない部下が一人居まして……、それを、緑

麗様が手を尽くして下さったおかげで、助かりました」

沙龍は、恐らく、少し知識のある者なら誰でも知っているような、ごく当たり

前のことをしただけなのだろう。

士官の話によると、その部下が持っていたという『かすがいせき鎡石』の効果も大き

かったようだ。

天空山（泰山）で採れるという、奇石である。

魂魄を体内につなぎ留める効果があるので、俗称でそう呼ばれている。

「無免許のガキみたいな素人に、死にそんな部下の命を任せるとは、随分、度胸があるんだな」

景春の毒舌を、士官はどう受け止めてよいものやら迷ったが、苦笑するだけにした。

心底安堵したような表情を見せるその士官は、沙龍に感謝をしてもし足りない、という様子だ。

「緑麗様は、覚えていらっしやらないようですが、私は、かつての緑麗様の部下でもありますから」

「ああ……」

合点のいった顔で、景春は頷いた。

北方軍の古参の者なら、緑麗が大将をしていた時代を知っているのだろう。

景春が、その士官の名を訊ねると、『燕』と名乗った。

見た目は景春より少し若いくらいの、中堅どころの軍人に見えた。典型的な切れ長の目をしている。

「しかし、燕隊長。前の上官を懐かしんで、ありがたがるのはいいが、緑麗はも

う軍人じゃない。それを忘れるなよ」

「はい……」

燕は、景春がなにを言いたいのか分からない。

分からなくてもいいのだが、景春は、一応、建前の説明もしてやった。

「燕、お前に前を見る勇氣があるなら、いまの上官も見舞ってやれ。王霊君もまた、緑麗の影を引きずっている一人だ」

「はい」

士官が慣れぬ左手で敬礼して食堂を出て行くと、景春は改めて、熟睡してるらしい沙龍を見た。

（そうだ。こいつは『大将』でも『将神』でもない。なのに戦場に出てくるのがそもそも間違ってる）

景春は、沙龍への反発から、無条件で好感を持った奏欽のことを思い出していた。

あの龍王公主は、確かに『軍人の妻』としては申し分ないと思う。

男を立てることを知っているし、決して、自分からは戦いの場に出ようとはし

ない。

景春が、過去に傍に置いていた女性たちも、大体、そういうタイプだった。

しかし、人界では、寿命の違いで死別もしたし、女性の方から離れていくこともあった。離れていく理由としては、景春が淡泊過ぎたからであろう。

景春は、沙龍のようなタイプを知らないわけではない。

ただ、ここまで自分の勝手を貫く女性には初めて逢ったかもしれない。

(こいつが、男だったらよかったのにな……)

子供のような寝顔を晒す沙龍に、景春は、何度か思ったことをもう一度心のうちに繰り返した。

男なら、理解はできなくとも、認めることはできるのだ。

かつて出逢った、巽凜のように。

翌日、王靈君の病室になっている鎮江樓の部屋に、燕が姿を見せた。報告と見舞いを兼ねた訪問である。

重傷だった兵士一名が命を取り留めたという報告は、王靈君にとっても唯一の救いだったのだろう。普段、部下にはこんな顔を見せないはずの王靈君が、深く嘆息した。

「そうか……、それはよかった」

「緑麗様には感謝の言葉もありません」

「そうだな。改めて、俺からも礼を言っておく。しかし、今回、北方軍は多くの兵を失った。いずれ、この代償は払わなければならんな」

辞任すら覚悟する言い方だった。

しかし、左腕で不器用にお茶の用意をする燕隊長が、微笑んだ。

「あの元帥閣下が四方軍一の大将を罷免なさることはないでしょう」

「どうした急に。おだててもなにも出てこんぞ？」

「巷ではなんと言われているか、ご存知ですか？」

「……？」

「東は剣の腕は確かだが、愛想のひとつもない。西は銃の腕は確かだが、仕事をしない。南は頭はキレるが、性格が悪い。北が一番いいが、激戦区に行かされる——、一般兵の四方軍大将の評です」

それを聞いて、王霊君は笑った。

「見事に当たってるじゃないか」

確かに、いまの四方軍はそれぞれの大将の性格ややり方によって特色というものが色濃く出ているが、王霊君の北方軍は実直な大将の下、実働部隊としては一番『普通』なのである。

「そうだな……。辞めて責任が取れるなら、簡単か。軍人は戦場で働いてナンボか」

「そのためにも、まずは、そのお怪我を治して下さい」

燕はそう言って、医務室に戻った。

そこには、十人に満たない負傷兵たちが、自称『素人衛生兵』の沙龍に口やかましく世話をされている風景がある。

「だー！ まだ怪我が治ってないのにチヨロチヨロ動くんじゃない！ お前はまだ寝てろ！」

「でも、緑麗様」

「デモもテロもない！ 怪我人の第一優先任務は素早く回復すること！ 以上だ！」

「はあ……」

「洗濯するから、全員、脱げ！」

そう言っても、年若い兵士は恥ずかしがって躊躇している。

沙龍は、無理矢理一人の兵士のTシャツを脱がせていたが、そこに燕が戻ってきた。

「お元気ですね、緑麗様。お早うございます」

「ム……、一人足りないと思ったら、貴様か。いくら軽症とはいえ、フラフラ歩き回ってるんじゃない！」

「はあ、申し訳ありません」

と言いつつも、燕の顔は笑っている。

彼は、沙龍の着けているエプロンを見ているのだ。

「とつてもよくお似合いですよ」

「……そうか？」

白衣の天使とまでは言わないが、その白い大きなエプロンは、今朝、木佐に押し付けられたものである。

木佐は、『これでも着てた方が、少しは負傷兵の回復が早いだろう』とわけの分からぬことを言っていたが、沙龍には分からなくとも、燕にはその意味が分かる。

元々、沙龍は十五歳くらいにしか見えないし、容姿だけを見れば、普通の少女なのである。

だから、血まみれの刀剣を携えているよりも、エプロン姿で手伝いをしている方が、負傷兵にとってはよっぽど和むというわけである。

しかし、沙龍自身は、こんなことをしている自分に戸惑いや、違和感を感じて

いる。

（多くの命を潰してきた私が、こんなことをしてるんだ。お笑い草だろう……）
そんな想いである。

燕が、少し離れた場所に横たわっている兵士を見て言った。

「まだ、意識は戻りませんか……」

「あとは、医者への到着を待つしかないな。誰か来てくれればいいんだが……」

昨夜、九雷は『手配はしてみる』と言っていたが、この極寒の地まで、はるばる一兵士の命を救うために来てくれる医者が居るとは思えない。

どこの部隊も貴重な軍医を手放したくはないだろうし、この状況では、単独での移動はほとんど絶望的に思えた。

だから、燕も沙龍も、覚悟はしていたのだ。

苦しそうな表情のまま昏睡しているその兵士の手には、例の石が握られている。

燕曰く、彼の大切な人が持たせてくれたのだらう、ということだが、この大きさの石ならば、そろそろ効果が切れてもおかしくなかった。

そのとき、沙龍の身体に、脳天気な声が響いた。

「阿姐アーチエくくッ！ 可愛いくくッ！」

そして、いきなりその声の主に抱き締められたのだ。

「ゲフツ……、せ、聖霄せいしょう！？」

そのガツチリとした体つきは、間違いなく白帝君だった。

「なんだよ、なんだよ、この超可愛いコスプレはよくっ！ もう、写真撮っていい!? 撮っていい!?」

白帝君にぐしゃぐしゃにされた沙龍は、もがきながら、なんとか喋れるだけの酸素を確保した。

「なんでここに!? いや、その前に、ちよつと離せ。写真は撮ってもいいから、とにかく、離せって——」

しかし、猫のようにすり寄ってくる白帝君は沙龍の言葉を聞いていない。

その様子を見かねたらしいもう一人のニューカマーが、声を掛けた。

「白帝君、お前のバカ力だと、沙龍が潰れるぞ」

え？ と、沙龍は思った。

この凜とした声の主は、聖霄を『白帝君』と呼び、自分を『沙龍』と呼んだ。その両者が合致する人物は、天界には居ないはずなのだ。

「えっ？ ……え、ええええッ!？」

やっとの思いで引き剥がしはしたが、それでもまだ引っ付いてくる白帝君の頭を押さえながら、沙龍は思わぬ人物の登場に驚愕した。

「碧姐々——!？」
ビーチエチエ

「挨拶は後だ、沙龍。まず怪我人を診る」

白衣を着込んでいる碧媛へきえんが、ジャレ合ってる二人を押しつけ、部屋の奥に向かった。

沙龍は、洗濯をしながら、白帝君に経緯を聞いていた。

「だからー、昨日、阿姐がビンビンに飛ばしてきた、『医者ー医者ー!』ってのが、俺のセンサーに引っ掛かったただけだってば」

洗濯機は一応全自動なので、洗濯物を放り込むだけでいいが、いまの滞在人数

分の洗濯をするには一台では足りない。

二十四時間稼動で忙しく回ってる洗濯機の、横にある洗面台で、ざぶざぶとシーツを洗ってる沙龍は、本当に「鎮江楼のメイドさん」にしか見えなかった。

白帝君は、洗濯を手伝っている。

「『読心』って、そんな広範囲に届くもん？　つうか、私、そんな『困った感』出してた？」

「まあ、それだけ俺がスーパーだってことよ」

ニコニコしながら自信満々なことを言うのは、白帝君の常である。

「スーパーはそこら辺にあるからいいとしても……。で、なんで、碧姐々？　と
いうか、どこで会って、どうして医者だって分かったのさ。聖霄は、姐々のこ
と、知ってたの？」

碧媛は医師免許は持っているものの、開業しているわけではないので、親しい者でなければそうと分らないだろう。

白帝君と碧媛の関係がまるで分かっていない沙龍には、それが謎だった。

「知ってるものにも、ガキの頃からの付き合いだもんよ」



「ええっ？ ど、どういう意味!？」

「俺の師父が太上道君。んで、そのダチが陸^{りく}圧^{あつ}。んで、その陸^{りく}圧^{あつ}の弟子が碧媛
だっついたら、納得するか？」

「は、はあ……、そういうつながりがあったのね。知らなかった……」
考えてみれば、沙龍は碧媛の幼少期を知らないし、碧媛が仙籍を持っているの
を知ったのも、初めて崑崙に來たときである。

沙龍の知らない顔があつて、当然なのだ。

「昔の碧媛はお人形さんみたいに可愛かったぜ。なんか、いまは迫力ある姐
御になっちまったけどな」

「女も三十路過ぎると、嫌でも逞しくなるんで……、痛ッ!？」

その沙龍の後頭部に、スリッパが飛んできた。

続いて、碧媛の怒声が廊下を挟んだ向こうから聞こえてくる。

「沙龍！ 包帯が足りないぞ！ 真武君に言つて、持つてこさせろ！」

「……。まあ、天下の四方将神二人を顎で使えるんだから、無敵っちゃ、無敵だ
わ……」

沙龍は、久々に自分が笑っていることに気付いた。

聖霄に感謝しなくては、と思う。

「しかし、俺のスピードを以ってすれば昨夜のうちに駆けつけられたんだが、どこをどう間違ったのか、こんなに遅くなっちゃったんだよなー」

「あー、はいはい。きつと、色々間違って、迷ったわけね……。でも、全然遅くないよ」

きつと、あの重症の兵士も助かるだろう、と沙龍は思った。

白帝君が、西域の『弥羅宮』（※太上道君の宮殿）付近で碧媛を見かけたのは偶然でもなんでもなかった。碧媛の師である陸圧は、『はぐれ仙人』という肩書きで、昔から各地をフラフラしているような風来坊である。

同じく、放浪大好きな太上道君とは気が合って、会えば一夜を語り明かすような仲だった。

しかし、太上道君の方は九十九パーセント愉快犯としても、陸圧の放浪には、

『西方の監視』という明確な目的があった。

仙界や天界の行政とは関係はない。陸圧自身が、西方の神魔世界に対して、注意を払っておかなければならない個人的な理由があるのだ。

その陸圧の手足として、碧媛も、世界各地に足を伸ばしている。

そして、この師父と弟子は、一応の本拠地を西崑崙——つまり、弥羅宮の近所に構えているので、いわば、白帝君とは『顔馴染みのご近所さん』なのである。

（『おねーちゃん』か……）

背の届かない物干し竿に一生懸命洗濯物をかけようとして、最後は諦めかけた沙龍に、碧媛が近付いて代わりにかけてやるという一幕を、白帝君は食堂の窓からなんとなく眺めていた。

沙龍と碧媛の間に血縁関係はないので、顔立ちが似てないのは当然なのだが、にも関わらず、ちゃんと姉妹に見えるから不思議である。

（俺と阿姐もあんなもんかなー……）

と、白帝君は思った。

碧媛の仕事もひと段落ついたのか、沙龍と共に休憩している様子が非常に微笑ましい。

しかし、白帝君の和やかな表情は、九雷の冷えた一言でうんざり顔になった。

「なんでお前がここに居る」

「……」

なんと答えようか迷ってる間に、今度は厨房の方から木佐の声が掛かった。

「白帝君？ 任地はどうしたんだ？ 人界仕事は？」

「あー、もう、戦場の花を愛でる時間もくれないのかね、このお二人さんは！」

小言を言われるのは慣れてるが、このシニツクな二人に左右から言われると、もうどうしてくれよう、である。

碧媛が来てくれたことで、いよいよ、沙龍は鎮江楼ですることがなくなつた。あるといえば、雑務は山のようにあるはずだが、それらをする気は最初からない。

夜食をつつきつつ、地図を広げていると、足音が聞こえた。

鎮江楼の食堂は、既に士官たちの休憩室のようになっていたので、沙龍は、それが誰かを確認もせず、反射的に「お帰り」と言った。

すると、かなり間があつてから、

「ああ……」

という、景春の聲がしたので、「しまった……」と思つた。

景春だったら無視したのに、というわけでもないのだが、わざわざ気まずい空気を作るのも馬鹿馬鹿しい。

疲れた顔をした景春は、沙龍が見ているものに気付いて、もう諦めたような口

調で言った。

「行くのか、あそこに」

「あそこ」というのが、東極山であることは、二人には分かる。

沙龍は頷いた。

「一体、お前はなにをしようとしてるんだ？」

これを聞かれたのは何度目だろう。

沙龍も、誤魔化し通すことは諦めた。

「東海龍王になってくれる人を探してる」

「なんのために、だ？ 奏欽殿がそれをするのは、分かる。しかし、お前にそんな義理はないだろう」

「まあ、成り行きかな」

「奏欽殿のため、か？」

「それもあるが……。理由なんて幾らでも作れる。景春さんが本当に知りたいたいの、私が『異風』を護る側の人間か、破壊する側の人間か、ってことなんじゃないの？」

景春の結んだ口元が、わずかにへの字に曲げられた。

凶星ということだろう。

「それはまだ分からないよ。私は、東海龍王になってくれる人が居ればそれでいいけど、そのことが『巽風』と具体的にどう関わってくるのか、分からないし」

「俺も……、お前の行動がどういう結果になるのか、まだ分からない」
だから、苛立つのだ、ということとは景春も自覚している。

先が読めないということは、不安なのだ。

「ただ、いまの段階で言えるのは、私は景春さんの『使命』を邪魔する気なんて、これっぽっちもない。だから——」

無駄に喧嘩を売ってくれるな、と沙龍が言いかけたとき、景春の言葉が、呻くように呟かれた。

「使命なんかじゃない。これはもう、『呪縛』だ——」

「『呪縛』……?」

景春はそのまま黙って、射抜くように沙龍を見た。

ここで目を反らした方が負けである。

同じように、厳しい視線を返す。

「結果は見えないとしても、お前の行動基準になっているものさえ分かれば、判断はできる。だから、教えてくれ、沙龍。お前が……、龍族とは無関係のお前が、東海龍王を探す本当の理由はなんなんだ」

「……」

今度は沙龍が黙った。

それを言った所で、景春が納得するとは限らないし、自分の本音中の本音を、こんな出逢って間もない男に語る義理はないのだ。

「教えられないのか」

「もし、知りたいのなら、一緒に東極山に来てくれ」

沙龍は、自分でも驚くような、とんでもない提案をした。

しかし、景春が納得するためには、そして、景春が自分の行動を監視したいのなら、それしかないだろう、と思ったのだ。

「東極山に？ また、無茶を言い出す——」

「無茶だと思うか？ そりゃ、任務があるから行けない、とか、色々あるだろう

けど、簡単に考え付くようなことってのは、無茶ではないはずだ」

「なんだその、よく分からん論法は」

「キサさんの口癖なんだ。人が考え付くことに不可能はないって話」

「そりゃ、不可能ではないだろうさ。極東勢を放っておいて、無責任に俺一人が我侷なガキの物見遊山のお守りをするってのは、後先考えなければ、簡単だ」

「その、いちいち喧嘩腰なのは、もしかして、照れ屋さんなのか？」

「そう思ってくれてた方が摩擦はないかもな」

沙龍は、ムツとした表情をなんとか元に戻す。

しかし、景春は、これ以上の喧嘩を売るつもりはなく、嘆息しただけだった。

「ついに行きたいのは山々だが、職務を放棄するわけにはいかん。いまは、お前の『邪魔する気はない』という言葉を信じるしかない」

数分前から、木佐と九雷が開放されたままの戸口に居ることに、沙龍は気付いていない。

景春の方は気付いていたかもしれないが、二人の会話は聞こえてなかっただろう。

「なんか、妙なことになってる気がしますけど……、いいんですか？」

木佐が、九雷の澄まし顔に言うと、

「と言いつつ、お前、楽しんでるだろう？」

九雷は、木佐の意地悪そうな笑みを浮かべた顔に言い返した。

「僕は、別に東極山行きのパーティーに誰が加わろうが構いませんけどね」

「なら、白帝も連れて行ってくれ」

九雷はそう言って、沙龍と景春の前に出て行った。

急に九雷が現れたときは、沙龍も景春も、ハッと我に返った気がした。

別に、派手な喧嘩をしていたわけでもないのだが、それくらいの緊張感の中に居たということである。

「景春、お前の仕事は俺がやっておく」

九雷が、気味が悪いほど穏やかに言う。

「行きたいんだろう？ お前も東極山に」

「え？　しかし——？」

景春は複雑な想いで、九雷を見つめた。

行きたくないわけではないのだが、九雷の意図が分からない。

九雷は、それを察して、言っただけで終わった。

「なにか因業を抱えている部下の願いを叶えてやろう、というわけじゃない。北にはもう敵勢力はほとんど残ってないだろうから、ここでのお前の役目もそろそろ終わりだ。更に、東極山に敵が現れる可能性は高い。お前が行ってくれれば俺は助かる、ということだ」

その物言いに、木佐と沙龍は一瞬だけ視線を合わせて、お互い、目だけで笑った。

九雷の言葉は、半分嘘だというのが分かるからだ。

勿論、それは景春にも分かっただろう。

「そして、ここからは旧知としての『世間話』だ。お前が抱えている使命というもの、俺にも分かるように説明してくれ。『東方軍大将』になることを承知したのも、それに関係があるんだろう？」

「ああ……」

そう言われて、景春は、『部下』から『旧友』の態度になる。

「さつき、沙龍にも言ったが、『使命』じゃない。これは、俺の贖罪であり、呪縛なんだ。あの小さな国を救えなかったことに対する——」

それが、『斉』という国のことであり、景春を長年縛ってきた想いであることを沙龍は知っている。

しかし、景春の昔語りは、沙龍の想像以上に辛いものだった。

沙龍が見た、景春の心に刻まれたシーンは、所詮、断片的なものに過ぎない。長閑な弱小国家がいかに列強に蹂躪されてきたか、その歴史の凄惨さは、沙龍の知る所ではない。

昔、景春が成人して人界に降りたのは、所謂武者修行と見聞を広めるためだった。

当時は、天界に住む神々も、仙界に住む仙道たちも、わりと自由に人界に出入りをしていった。

境界も緩かったし、一番広い領土を持つ人界は、天仙界の住人にとっては魅力的で刺激的な場所だったのだ。

緑麗も、たびたび、人界への憧れを口にしていたのを、沙龍は知っている。

しかし、地位や階級が上がるほど、人界への干渉は制限がされるので、緑麗のその夢は死してしか叶えられなかった。

景春は、身ひとつだったのので、できたのだろう。

陽輝ほど、スラムの底辺で育ったわけではないが、景春も、幼少期は下流で育った。士官学校に入ったのも、タダ飯が食えるというだけの理由である。

学校を卒業すればそのまま四方軍のどこかで下積み生活に入るのだが、景春はそれをやらなかった。

規則に縛られた生活が嫌だったし、それを破って平然としていられる性格でもなかった。

だから、身ひとつでどこまでできるのか試したい、と若者特有の情熱を持って、人界に降りたのだ。

腕には多少の自信があった。

だから、戦場を求めるような気持ちもあった。

しかし、望んで乱世と言われた時代に身を置いた景春は、人間の蛮行に絶望し、零落の道を辿っていくことになる。

己の野心のためだけに覇者になろうとする君主に仕える気はさらさらなかった。

かといって、平和のために戦うというお題目を掲げる世間知らずも御免だった。

しかし、人界で、人として生きるのは、難しい。

景春は生きる手段のひとつとして、盗賊まがいにも身を落とす。

その荒んだ生活の中で、若き公子を誘拐して、金品を奪うという計画があった。

このとき、ターゲットになったのが、後の『斉』の国主である。

「大した人物だったわけじゃない。まだ十歳ぐらいのガキだ。最初は泣いてばかりだった。それで、うるさいから始末しよう、ということになった」

しかし、景春にはその子供は斬れなかった。

どんなに落ちぶれても、無抵抗の弱者を、目的もなく斬ることはできなかった。

それを、仲間は『腰抜け』と嗤った。

そして、殺されると理解したその公子が、最期の最期で姿勢を正したとき、景春は我に返ったのだそうだ。

「どんなに弱小でも、一国の王になる奴つてのは、それなりの覚悟があるもんだ。勿論、そうじゃないクズも居るが、そいつは子供ながら、ちゃんと物の道理をわきまえていた」

『私は民に養われている身です。ここで殺されるのであれば、民の負担もひとつ減るかもしれません』

公子はそう言って、首を差し出したという。

その行動に、景春は衝撃を受けた。

そして、『腰抜け』と嗤った仲間を全員、あの世に送り、公子を逃がしたのである。

「十年くらい経って、ほとぼりがさめた頃、俺はその国に仕官した。相変わらず、パツとしない国主で、ガキの頃に俺に殺されそうになったことなんて忘れていたようだったけどな」

しかし、景春はその国主と、彼が愛する国を護ろうと思ったのだ。

実際、景春の働きは千金に値しただろう。

周囲の国家が次々に中央列強の従属に下る中、『斉』はよく訓練された軍隊を保持していたので、列強も迂闊には手が出せなかったのだ。

景春はそこで、しばらく平穏な日を過ごした。

「そこに、リンリンさんが嫁いできたんだね」

「ああ。帝都じゃ顔も拝めないような公主だったが、あの国主にはお似合いだった。二人揃うと、まるで頭上を花が飛びかってるようだった」

「つまり、相当、脳天気な夫婦だったわけだな……」

しかし、その脳天気なはずの二人も、最期は悲劇でしかない死に方をした。

景春が『呪縛』としなければならぬほどの――。

「『異風』は、異凜公主が自分の命と引き換えにもたらしたものだ。東極山という、東海の始まる場所で、『東海の至宝』の全ての力を引き出したもの――。それが『陽中の陽』を含んだ風となったものだ」

結果だけを見れば、『斉』は滅んだ。

しかし、東海はずっと、異凜の願いと共に、『異風』によって護られていたの

だろう。

「リンリンさんに子供が居たって話は……？」

沙龍は、文献に残っていた家系図を思い出した。

公文書では、斉の国主と巽凜の間には何人か子供が居たことになっている。

しかし、現代ならまだしも、実質は男同士の夫婦に子供は望めない。

「ああ、数人居たのは事実だ。しかし、身寄りのない孤児を養子にしていただけだ」

「そうなのか……。じゃあ、やっぱり東海龍王家の血は絶えたってことになるな

……」

沙龍が残念そうに肩を落とす傍で、九雷が呟く。

「なら、『巽風』が弱まったのは、いま、東海龍王が居なくなったからか：

……？」

「それもあるだろう」答えたのは景春である。「しかし、『巽風』の威力が弱まり出したのは、敖坤が死ぬ前からだ。元々、龍王の器ではなかった敖坤では、水晶宮と東極山を結ぶレイラインの確保ができていなかったのかもしれない」

九雷は頷きつつ、

「極東勢力は、いつか異風が止み、結界が弱まるであろうことを知っていたのか……？ それをしつこく待っていたのだとしたら、やはり侵略目的という可能性は捨てられないな……。しかし、偶然、異風のことを知り、その結界が弱まっているのを知って遠征に来たのなら、単に力試しをしにきた馬鹿とも言える……。まさか、異風のことをなにも知らずに遠征しに来た、という偶然は有り得るか……？」

その自問のような呟きに答えられる者は居ない。元々、他者に答えは求めていないのだ。

「東極山はただでさえ絶海の孤島だ。俺たちだって、この数千年間、まともにあそこまで行った者など居ない……。極東の神々が、その東極山のカラクリを知っているか知らないかというのが、かなり大きなポイントだな」

一応の結論が出たらしい。

九雷は、今度は景春に向けて、はっきりと言った。

「東極山は原則として東海龍王家縁の者でなければ足を踏み入れることはできない

いはずだ。更に、景春しか知らないはずの異風の正体が、極東側に漏れていた可能性は限りなく低いだろう。が、俺はその低い可能性を無視するつもりはない。

景春、お前はやはり、東極山に行つて、その真偽を確かめて来てくれ」

「分かりました。願つてもない任務です」

『部下』の顔に戻つた景春が大きく頷いた。

「勿論、お前一人で、じゃない。『限りなく低い可能性』を確かめるためだけに、他の軍部の人員を割くわけにはいかないからな。護衛代りに沙龍と真武君を連れていってくれ」

「はあ……」

「お前にとっては不本意だろうが」

「勿論、大いに不本意ですが」

「嘘でも『光栄です』とか言えよ……」

と、沙龍が小さな声で言ったのは、勿論、全員に聞こえている。

「……ですが、自分は敖開との約束もあるので、不本意ながら了承致します」

「護衛されんのはお前なんだよ、ダアホ」

沙龍が愚痴愚痴言ってる横で、木佐が溜息をついていた。

景春はその晩、東極山に行った日のことを、昨日のことに思い出ししていた。

『仁……、戦ってはだめ。私たちの想いを無駄にしないで。例え、斉の国が焼かれても、貴方はその戦火を広げる人であっちゃいけない』

巽凜はそう言っていた。

景春は黙って聞いていたが、本当は、その言葉に従う気はちつともなかった。振り下ろされる刀の前で、自分はそれを静かに受け入れることはできない。

斉の国主も、巽凜も、立派だと思う。敵わない、とさえ思う。

しかし、それは自分の生き方ではないのだ。

『……それじゃ、釣りでもしますか？』

景春の惜別の言葉に、巽凜がにっこりと笑った。

『うん、そうしよう。いつか、一緒に——』

「白帝、どうせ暇なんだろう。お前も一緒に行つて来い」

そんな九雷の淡々とした言葉には、多少の情もあるのだということが木佐にも最近分かつてきた。

彼は間違つても、赤帝君にはこういう口はきかないのである。

「へいへい……。行つてきますよ。どうせ暇ですよ。阿姐アーチエのお守してくりやいいんだろ？」

白帝君も、別に九雷を嫌っているわけではない。

それよりも、青龍として認めているからこそ、普段、四方将神としての仕事をしていない九雷の言葉にも、素直に従っているのだろう。

「じゃあ、後のことは宜しくお願いします、九雷元帥。できれば、鎮江楼は壊さないで下さい」

木佐がそう言つて手を差し出すと、九雷は素直に応じた。

「努力しよう。沙龍を頼むぞ、真武君」

木佐は、鎮江楼の主としての立場を一時だけ九雷に預けることにした。

しばらく、天界軍の『北の本陣』代わりに使われるだろうが、九雷の言によれば、残存勢力は大したことはないという。

しかし、ここに残ったわずか数名でそれをどうにかしようというのだから、その自信が過信でないことを祈るばかりである。

といっても、木佐は、九雷のこの自信を評価していた。

沙龍がこれを『魔力』と言い切り、惹かれてしまったのも仕方ないと思っ
ている。

「僕の役目が、馨と東方軍大将の、無駄な喧嘩を納めることだったのは理解して
ますよ」

二人がそんな挨拶をしている傍では、白帝君が沙龍にちよつとした昔話をして
いる。

「なあ、阿姐。俺は、巽凜のことはよく覚えてんだが、わざわざ人界に嫁に行っ
たのは、なにかあったからだと思うぜ？」

「どういう意味だ？ 純粹な恋愛結婚じゃなかったってことか？」

「うーん、それもあんのかもしんないけど、それだけじゃないな、多分」

白帝君の呑気な表情は、結局、知らなくていいことまで知ってしまう負荷を流すためのものではないか、と沙龍は思った。

『読心』による情報は、凶らずとも知ってしまう場合が多々ある。

それにいちいち、感応していたら、身が持たないだろう。

沙龍とて、景春の心を知ろうとして知ったわけではないし、知りたかったわけでもない。

「リンリンさんは、私の印象だと、結構曲者なんだよな……」

「ああ、それで正解だと思うぜ？」

「そうか……」

そこに、小走りに走って来たのは、燕だった。

「緑麗様、これを——」

「わざわざ見送りに来てくれたのか？」

燕が差し出したものを受け取ると、小さな虹色の宝石だった。

長い鎖がついている。

あの意識不明だった兵士が持っていたものだろう。

「これをお持ち下さい。部下からです。まだ起き上がれないので、私が代わりに」

「ああ、意識が戻ったのか」

「はい。それで、是非、緑麗様に御礼がしたいと」

「礼なら、碧姐々にすべきだろう。私は大したことはしていない」

「……ですが」

燕が悲しそうな顔をする。

ここで、無駄な譲り合いを長々するのも気が引けたので、沙龍はそのネックレス状の『鎡石』を首にかけた。

「分かった。なら、預かっておくよ」

それを見て、燕も満足したようだ。

—そうして、東極山へ向かうことになった四名——景春、沙龍、木佐、白帝君——は、まず、桑野という港町に向かった。東海岸にある小さな町である。そこか

ら、東極山への船が出せるといふ。

軍艦——というにはほど遠い小さな船だが、一応、軍籍があるので、無理が利くということだ。

しかし、桑野に着いてすぐ、ハプニングがあった。

強引に沙龍を誘って、物珍しそうに港を見物していた虎型の白帝君が、沙龍を海中に落つこととしてしまったのである。

幸い、怪我はなかったが、溺死寸前で引き上げられた沙龍は、風邪をひいて寝込んでしまった。

そして、足止めをくらうこと、三日。

木佐の怒りに触れるのを怖れた白帝君は姿をくらし、沙龍は食欲も失せた状態で宿のベッドに居た。

「……お帰り」

毛布の中の沙龍はその足音に言った。

木佐ではないと分かっていたが、高熱で朦朧としている頭では、それが誰であろうと、あまり関係がない。

しばらくの間があつて、「大丈夫か？」という景春のためらうような声が聞こえた。

沙龍がむっくりと起き上がったのは、少しでも臨戦態勢を取ろうという、無意識である。

しかし、景春は心なしかホツとするような顔をしていた。

「昨日よりは顔色が戻ってきたな」

「……景春さん、いまはパワーレスなので喧嘩売られても買えません。世間話なら、少し付き合いますが」

「俺は相当、粗野な男だと思われてるみたいだな」

「それでもないんだけどね……」

「でも、よかったじゃないか」

「なにがいいんだ……。風邪ひいたのがバカじゃない証明だとか言うつもりなら、聞き飽きたぞ」

「いや、少し時間を置いた方が、よかったんだ。多分、俺も、お前も」

「……？」

分かるようで分からない景春の言葉を無視して、沙龍はまた毛布の中に沈没した。

「沙龍、俺は長いこと、軍人として生きてきた。最初、斉の將軍になったのも、半分は成り行きと好奇心だ。あの公子に忠義を感じていたわけじゃない」

景春がいま、なぜそんな話をし出したのか、分からない。

しかし、彼はこれの言いに来たのだろう、と沙龍は思った。

「闘うのが俺の仕事だった、俺にはそれしかできなかった、というだけだ。そこに、意味なんてない」

「……それで？」

「しかし、巽凛公主は、その俺の仕事を否定したんだ。『闘うな』——とな。その憤懣が、お前に分かるか？」

沙龍は答えなかった。

景春の想いは分かる。

それが全てだったのに、闘って死ぬことを否定された景春には、虚しさしか残らなかったことも、かろうじて、『巽風』を護ることが景春の存在意義になって

いることも、分かり過ぎるほど、分かる。

景春の想いは、ずっと報われていない。

だから、四六時中厳しい顔をして、先鋭的な気を撒き散らしているのも分からないではない。

しかし、沙龍は、特に自分にだけその苛立ちをぶつけてくる景春の男心を理解していない。

「どうして、いま、そんな話を私にするんだ……」

された所で、なににもできないではないか。

景春は沙龍に同情も、反発も求めていないのだから。

「……なぜだろうな」

「……」

ぐるぐると回るような頭痛と、全身が軋むような筋肉痛に、沙龍はもうなにも喋りたくはなかった。

寒いのか、熱いのかもよく分からない状態である。

しかし、額にひんやりとした手のひらを感じたとき、沙龍は以前、同じように

こうして、自分を癒してくれた手を思い出ししていた。

安心よりもむしろ、心地よい緊張感を強いるような感触である。

(この『木行』の氣は、やっぱり元帥と同じだな……)

ぼんやりとした眼で、しかめっ面をしたまま事務仕事をしているような景春を眺めていると、徐々に体が軽くなっていった。同時に睡魔も襲ってきたようで、いつしか沙龍は眠りに落ちていた。

沙龍は、色のない夢を見ていた。

夢自体、そんなに見ないので、見るときはいつもかなり鮮明に記憶に残る。

殊、天界に来てからは、この色のない夢というのをよく見る。

それが、自分の体験や記憶から造り出されたものではないのだということも分かってきた。

(あ、また、この人だ……)

沙龍の視界に、ホログラムのように現れる男性とは、現実世界では会ったこと

はない。

しかし、白昼夢では何度か遭遇したことがある。

つい最近の話では、水晶宮で、奏欽に促されて宝物庫の台座に触れたときにも、この男性の映像が見えた。

（青帝青龍広君……）

あのと看見えた映像が、東海龍王敖光ではなく、なぜ、敖広だったのか、沙龍にはまだ分からない。

（なに……？）

ホログラムの敖広が、話しかけてきた。

恐らく、緑麗に語りかけているのだろう。

これは、過去に、実際にあった『緑麗の記憶』なのだ。

『光は、俺の身代わりになったんだ。結局、哪咤太子は光にハメられたんだろ』

『全く、なんでそう自己犠牲が強いかね、お前んところの血は』

『東海龍王家は、昔からそうなんだ。初代南海龍王を排出してしまったという贖罪の念を、一族全員が背負ってるんだろ……』

『酔狂な。連座制でもあるまいに。大体、親の罪が子の罪になるんなら、世の中、罪人しか居なくなるぞ』

姿の見えない緑麗が、自分の口でそんなことを言っているのを感じた。

苦笑する敖広は、桁違いの『木行』の氣を放っている。

普段から、抑えることもせず、こんな風に『氣』を纏う人が居るのか——、と沙龍は思った。

『“相打ちになりました”——で、仙界への言い訳もたつが、この喧嘩は高くついたな……』

敖広は、この事件により、二人の弟を失った。

一人は天界で、一人は人界で、それぞれの命を散らした。

『「東海の至宝」を凜に持たせたのは、なにかあったとき、あいつの助けになるだろうと思つたのだったんだが……、それが裏目に出てしまったようだ』

敖広の後悔の言葉だった。

時間を少し遡ってみよう。

部下のSOSを受けて、日本に向かった九天玄女のことを思い出して頂きたい。

沙龍と奏欽が帝都のカフェでお茶をしている頃、日本の島根県、出雲市にその九天玄女の姿を見つけることができる。

街を歩く度に視線を浴びるのはもう慣れたので、九天玄女は特に自分の変装がおかしいんじゃないかとか、季節感間違えた格好をしているんじゃないか、という心配はしないことにした。

しかし、朱色のランボルギーニ・カウンタックで待ち合わせ場所に行ったときには、こうてんか黄天化にえらい怒られた。



「隊長、こんな日本の片田舎に、そんな真っ赤な車で現れないで下さい！ 目立ち過ぎるでしょーが！ しかも、思いつ切りカツコはゴージャス悩殺系だし！」

「……そうなのか？」

シヤネルのサングラスを外して、天化を上から下まで眺めた。

見た目年齢十五歳くらいの天化は、確かに、街中どこでも見かけるような少年スタイルである。

対して、自分はゴールドのラメの入ったジャケットに革製のミニスカート、とどめは九センチヒールといういでたちだ。なにが悪かったのだろう。

「トーキョーの店で、とりあえず『自分に似合いそうな服を上から下まで一式くれ』と言ったら、こうなったただけなんだが」

「目立たず、人込みに紛れるっていうのが、スカウトマンやエージェントの鉄則でしょう。全く……」

「とは言っても普段、現場に出向くのは私の仕事ではないんでな」
世間知らずなのは仕方がない、と言いたいらしい。

「……で？ 状況はどうなってる？」

この近辺での神域といえば、全国的に有名なのは出雲大社だが、彼らはそのメジャースポットではなく、比較的小さな神社に目星を付けていた。

大通りから離れ、その神社の裏手の林の中にカウンタックを停め、九玄は天化の差し出す地図を見た。

「北側に一箇所、磁場の不安定な場所があります。恐らく、そこが、『入口』のひとつかと」

いわゆる異なる世界の重なる場所であろう、と天化は言っているのだが、その先の世界がどうなっているのかは天化にも分からなかった。

「ひとつ……ってことは、他にもある可能性があるのか？」

「あると思いますよ。『極東天界』と呼ばれる世界は、ひとつじゃないと思いますから」

「……どういう意味だ？」

「隊長には信じられないかもしれませんが、この国はちよつと変わってましてね。土着の宗教があるにはあるんですが、一枚岩じゃないんです」

「内部分裂か？」

「そうじゃなくて、派閥がいくつかあって、それぞれにそれぞれの世界がある——って感じですよ」

天化は普段、師匠のスカウト活動を手伝ったりしているので、この国の事情については詳しい。今回も、師匠の清虚道德真君が行方不明になったので、真っ先にここに探しに来たのである。

「セツキーが見つけたものがなんなのか、お前は見当がついてるのか？ 天化」

「師匠は、あくまでも『スカウト活動中』だったんですよ。ということは、見つけたのは『仙骨を持つ人間』でしょうね」

「もしくは、人間のふりをした神魔、か……」

九玄が受け取った清虚道德真君の中間報告には、その可能性についても言及してあった。

資料で散らかされたカウンタックの車内で、天化は自分が打電した報告書を拾い上げた。

「……いずれにしても、この数値が本当なら、俺の手には負えません」

だからこそ、天化は本部に応援要請をしたのだが、まさか隊長自ら来てくれるとは思わなかった。

人手不足とも思えないので、多分、それなりの理由があるのだろう。

「まあ、実際見てみなければ分かるまい。行くぞ」

九玄が小さな社の前まで来たとき、その前にしゃがんでいた男が振り向いた。

そのひよろ長い感じの男は、別に驚いた風もなく、言った。

「やっぱり、アンタか。最近、派手なスポーツカーを乗り回してる美女が居るってんで、まさかとは思ったが……」

「公務員……？」

九玄は、先の北海龍王のクーデターのときに、この男と一時的に共闘したことがある。

見た目に反して実直な男、という印象があった。

「死神業専門のお前がなぜここに？」

「それを言うなら、崑崙の防衛隊長がなぜここに？」

「私は迷子になった部下を探しに來ただけだが……、お前は違うようだな？」

「……」

公務員は答えなかったが、九玄は気にせず、さっきまで公務員が見ていた石碑の前に歩み寄った。

「なるほど、これが結界の媒介になっているのか」

「姐サン、アンタ、この先がどうなってるのか知ってるか？」

「いや、よくは知らん。……が、私の部下は恐らくそこに居る。ならば行くしかあるまい」

「俺の推測では、魑魅魍魎の跋扈する百鬼夜行だと思いが——」

「ホウ……」

不敵に笑う九玄の顔を見て、天化は少々嫌な予感を覚えた。

「隊長、まさかなんの予備知識もなく乗り込むつもりじゃ……」

「虎穴に入らずんば、虎子を得ず。行くぞ、天化」

「ああ、やっぱりい」

「お前は来ないのか？ 公務員」

「……」

公務員は、どうしたものかと暫し考えた。

戦力的には確かにこの美女が居た方が自分も仕事しやすい。

泰山府と崑崙防衛軍はなんの関係もないので、特に問題はないだろう。

「んじや、お供しますか」

鍾乳洞のようになっていた地下に入っていくと、一気に体感温度が下がった。

天化が用意していた強力な懐中電灯のおかげで、視界はかなり広範囲に渡って見渡せた。

深い黄土色をした壁にはところどころ水滴がしたたっている。

道のような道はなかったが、三人は、特に難儀することなくサクサクと歩いていく。

先陣を切る九玄が、背後の公務員に聞いた。

「いま、極東天界というべき世界がどういう状態なのか、お前は知っているのか？」

「まあ、一応、調べてはきたが」

「『神道』といったか。日本古来の神々は、健在なのか？」

「ボスの話じゃ、居るか居ないかも判然としないって感じだったな」

それについては、天化が答えた。

「健在かと言えば健在だと思いますよ。出雲に限って言えば、霊的な力は無くなっているわけではないし。しかし、その神々が、いま現在、組織体系になっているのかどうかは、不明ですね。一応、歴史的にリーダーと言われている神が居ないことはいないんですが、その力は衰えてると思います」

「なぜ、そう言える？」

「始祖というべきは、伊邪那岐いざなぎと伊邪那美いざなみなんですが、彼らはもう居ません。と

すれば、リーダーと目されるのは、その子である、天照大神あまてらすおおみかみ、月讀つくよみ、

須佐乃袁尊すさのおのみこと、の三人で、これが三貴子と呼ばれる神々です」

しかし、その三貴子も、現在は影が薄いという。

出雲大社が祀っているのも、三貴子ではなく、おおくにぬし大国主なのである。

「一人のリーダーが絶対的な力を握っているわけではない……ということか」

九玄は言いながら、視線を横に走らせて大刀の柄留めを外した。

カウンタックにかろうじて収納できたその九玄の愛刀は、この大きさにも関わらず九玄の体の一部のようになっている。

無銘の刀で、九玄も特にこの愛刀に名前をつけるようなことはしていない。

公務員の左手も、既に懐に入っている。

天化は、というと、Gパンの後ろのポケットから、霊符を取り出していた。

「確かに、魑魅魍魎の世界のようだ」

「……やれやれ、冥府と変わんねえじゃねえか」

ざわざわと音をたてて蠢くのは、明らかに低級の物の怪である。

大きさも、犬猫クラスだった。

九玄は、柄留めを戻して、黄土色の壁に体を預けた。

自分が相手をするレベルじゃないと思ったのだろう。

「天化、任す」

「ええっ!?! こ、この数を俺一人で、ですかー!?!」

「なに、死にそうになったら、多少の助太刀はしてやる」

その様子を見て公務員も姿勢を崩したが、九玄はそれを咎めた。

「お前は働けよ、公務だろ」

「いや、半分は『公務』じゃないんだ」

「……? つまり、沙龍の仕事か?」

「正式にはまだ依頼は受けてないが、多分、そうなるだろうな」

公務員の懐には、あの円筒の容器がある。

ジョニーから公務員の手に移った『極東出身の魂魄』である。

大ボス——泰山府の職員が泰山府君を呼ぶときの呼称——は、この魂魄が誰のものなのか、知っていた。

だから、回収命令を出し、昇華できないその魂魄を『元の場所』へ返して来い、と公務員を使いに出したのである。

それだけなら、半分どころか、百パーセント『公務』である。

しかし、この魂魄を冥府送りにしたのが他ならぬ沙龍とあっては、やはり、あのトラブル・メーカーが嫌でも関わってくるのだらうと公務員は思っていた。

なんとか周囲の物の怪を一掃した天化が安堵の溜息をついた。

「ホントにこの先に師匠、居るんでしょかね……。どう見たって、ここ、化け物の巣窟ですよ」

「妖怪エリアの先に神域があるってのは、普通に考えられる。神も魔も根は同じだってことだろう」

天化は、さっさと先を行く九玄の後を健気についていった。

これくらいでへばっていたら、仙骨が泣く。

どちらかと言うと、師匠の清虚道德真君は甘いので、九玄のようなスパルタ式も、たまにはいい刺激になるのだ。

「はあ。まあ、大抵、『魔』ってのは神の成れの果てですけどね……」

神も魔も、天国も地獄も、表裏一体なのだ。それは、西洋であろうと、東洋であろうと同じである。

「公務員、お前がここになにをしに来たのかは知らんが……。泰山府は行政と無関係の部署とはいえ、戒厳令が出されそうな帝都とまるつきり無関係というわけでもないんだろう？」

九玄が世間話のついでのように背後を振り返った。

「出されそう……。じゃなくて、もう出されたって話だけだな」

「そうなのか。にしては、呑気だな。『大事なボス』が心配じゃないのか」

「スポンサーとしては大事だが、あそこは無敵な奴らがゾロゾロ居るから、特に心配することもないだろう」

わざわざ言い直す公務員に、フフン、と九玄が笑った。

「あ、隊長、灯りがありますよ」

天化が懐中電灯を向けた先に、大きな枠だけの扉がある。

そこからは、懐中電灯の灯りを打ち消すほどの光が漏れていた。

「しかし、なんともまー、分かりやすい看板だな……」

その洒落た門扉には、『ここから神域』という電飾の看板が掲げられていた。

なにやら、楽しいな雰囲気の数人の声も聞こえてくる。

が、その光の先に入っていた九玄は、眼前に広がる光景に、思わず顔全体が引きつった。

そこには、綺麗な女性を侍らせてデレデレしながら、酒盛りしている部下の姿があったのだ。

「セツキー……貴様……」

「し、師匠っ！　ご無事で！」

「あれ？　隊長に、天化。ろーしひゃんれす？」

呂律も回らずにご機嫌に酔っ払っている清虚道德真君だった。

酌をしていたその女性が、乱入してきた九玄を宥めるようにゆっくり立ち上がったが、九玄はそれに構わず、清虚道德真君の胸倉掴んで『疲労・死魔邪拳』を炸裂させた。

「ええ度胸じゃのう……。弟子と上官にさんざん心配をかけておきながら、ご本人は鼻の下伸ばして酒盛りかい……」

ズゴゴゴゴ、と九玄の周囲の空気が圧縮され、ブラックホールを形作っている。

「ボーナス没収は覚悟せえよ……、せいっ！」

九玄の拳が、清虚道德真君の背後の大理石のような壁を、二の腕あたりまで抉った。

「ひ、ひいいいいいっ！」

敵に対して発動されるこの必殺技を、久しぶりに我が身に喰らって、清虚道德真君は呆気なく気絶した。

「あらー。隊長さんだったのねー」

小首をかしげた女性——いや、よく見ると、顔は女性と見紛うほどだが、体つきはわりと逞しい——は、『月讀』^{ツクヨミ}と名乗った。

声も、中性的と言えなくもないので、もしかしたら、両性具有タイプかもしれない。

ひとまず異国の神の代表に挨拶をしたい、と律儀に九玄が言ったのに対し、男か女か分からぬような綺麗な顔をしたツクヨミが、あやふやに答える。

「あー、トップ？ うーん。特にそういうの決めてないんだけどー」

「なら、ここの責任者は」

「んー、一応、このエリアはいま、私しか居ないけど、責任者と言うほど、責任もないし……」

ツクヨミは、そのままになっている宴会の席に、珍客三名を座らせて、お茶を振舞った。

このクラスの神ならば、かしく者が百人以上居そうなのだが、この地下宮殿には二、三人の従者しか居ないようで、玉露もツクヨミ自身が淹れていた。

天化は気絶した師匠を団扇でパタパタと扇いで介抱している。

「ひとまず、我が部下が迷惑をかけたことをお詫びします」

「いや、それはフラフラ人界で遊んでた私も悪いんで……」

清虚道德真君が探知したのは、このツクヨミの霊力だったようだ。

普段、ツクヨミは神域から出ることはないのだが、たまたま、出先で清虚道德真君の探知機に引っ掛かったという。

「ちよっと暇も持て余してたし、色々、真君からそちらの世界の話なんか聞いて

たのよねー」

のんびりとした口調で、朗らかに語るツクヨミは、真っ白な装束を身につけていた。

九玄のイメージしていた極東の荒ぶる神々とは、だいぶ印象が違う。

「ツクヨミさんよ、『地上で遊んでた』ってのは、もしかしてなにか探しものでもしてたってことか？」

公務員が玉露を飲みながら聞いた。

この男のマイペースな態度は、相手が異国の神であろうと関係ないようだ。

「うーん。そうズバリ言われちゃうとねえ。まあ、間違っではないんだけど、キミ、外交向いてないね」

「俺は外交官じゃないし、元はただのチンピラで、いまは東方天界で成り行きで死神してる、一公務員だ」

「ふーん？　んで、その公務員君が、なにを聞きたいの？　その懐にある『魂』となにか関係がある？」

ここらへんは、さすがに神様だな、と公務員は思った。

「聞きたいことは幾つかあるが、俺の職場に迷い込んできたこの魂魄は、ちよつと特殊だね。再生も廃棄もできない。こういうのは前例がないんで、上司も持て余した挙句、俺に押し付けたってワケだが……」

と、公務員は円筒形のその容器を取り出すと、造作もなく、ツクヨミに放り投げた。

ツクヨミはそれを受け取って、無表情に眺めた。

「なるほど……」

「もしそれがアンタの探してたものなら丁度いい。引き取ってくれないか？」

「一体、なんなんだ？ それは」

九玄は公務員に聞いたのだが、答えたのはツクヨミだった。

「『スサノオ』の魂魄」

「『スサノオ』？ 三貴子の一人の？ つまり、それが魂魄状態で冥府を彷徨っていたということは、スサノオは殺されたのか」

「そう……、数年前にね」

虚ろに答えるツクヨミは、容器の蓋を開けて、生の魂魄を取り出すと、両手で

それを包むようにした。

「泰山府君でも、駄目だったか……。返品されてきちやって、一体、キミはいつになったら安息できるのだろうね……」

それは、うすらぼんやりとしたツクヨミにしては、はっきりと分かるほどの哀切の言葉だった。

ツクヨミにとって、その魂魄は『兄弟』になる。

しかし、ツクヨミは、人に討たれ、冥府送りにされた兄弟に、同情はするが、それは自業自得だとも思っていた。

だから、迷いなく、その魂魄を手のひらで握りつぶすようにした。

パシーンという、小さな音がした。

「いま、なにを……」

九玄は、小さな光の珠が弾けるように消えてしまった現象と、それを悲しげな微笑を見せながらやってのけたツクヨミに、畏怖を感じた。

「再生も廃棄もできない魂魄は、こうするしかない。気分のいいことではないけど、仕方ないね」

「泰山府君にできない『魂魄の廃棄』が、貴方なら出来るというのか……」

「いまのは『完全な死』じゃない。ただの『破壊』だ。魂魄は悲鳴を上げ、ありったけの陰の氣を撒き散らして、粉々にされただけだ」

公務員が独り言のように淡々と言った。

「そう。魂魄の辿る道としては、一番悲惨で絶望的な最期だね。でも、逆に言えば、『彼』はそれだけのことをしたってことだ。因果応報だね」

「現世でなにをしたんだ？」

九玄は、嚙下しながら聞いた。

いま、公務員は『陰気を撒き散らした』と言っていたが、確かに、この場の空気が重くなった。

べったりと湿気がまとわりつくような感触さえする。

「初代はいい男だったよ。正義感に溢れて、一時期は英雄扱いされてたしね。でも、二代、三代、と代を重ねていくうちに、彼も当初の生きる目的を見失っていったんだろうね……」

「ちよっと待ってくれ。『初代』ってどういうことだ？ 極東の神々は、代替わ

りをするのか？」

「私たちは『不老不死』じゃない。寿命がくれば当然、老いさらばえ、死んでいく。だから、自分の力と、一部の神格だけを『人』に譲渡し、代を重ねるんだ。勿論、それをしない神も居る。人には過ぎた力だと判断した神々も過去にはたくさん居たよ」

「つまり？ 極東の神々とは、『神の力だけを持った人』ということか。貴方もそうなのか、ツクヨミ」

「いや、私は、嫦娥こうがとちよつと交流があつてね。『不老不死の秘薬』のせいで、昔からこのままの姿でここに居る」

嫦娥は、東方天界では月の女神とされている。

同じく、月の神であるツクヨミが、嫦娥と知り合いであるのは不思議ではなかった。

「そうか……、しかし、なぜ、さっきのスサノオの魂魄は冥府で再生も廃棄もできなかつたんだ？ 公務員、お前はなにか知ってそうだな？」

「俺が知ってる例はひとつだけだが……。臨終際に『神獣の氣』を浴びた人間つ

てのは、なぜかそうなるんだ」

それは、公務員自身が、身を以って体験している。

彼もまた、転生も完全な死も望めない状態で生きているのだ。

いや、正確に言うくと、死んでいるのだが、肉体そのものは生きている人間とならんら変わりはない。

「神獣だと？ まさか、じゃあ、スサノオを葬ったのは沙龍なのか？」

「らしいぜ、大ボスの話によると」

公務員は軽く答えた。

「ま、そういうことで、とりあえず、俺の『公務』はこれで終わった。姐サン、あんたも晴れて部下を見つけたことだし、ここにはもう用はないだろ？」

「ああ。ないといえ、ないが……」

九玄がツクヨミを見ると、にっこり微笑んだ。

「はるばるお疲れ様ー。私も、久しぶりのお客さんで、楽しかった。また来てね、と言いたいところだけど……」

九玄は、帰ろうと急かす公務員を無視したまま、席を立とうとしない。

沈思してから、こんなことを言い出した。

「ツクヨミ殿、私は東方仙界の小規模組織の長でしかない。それを踏まえてもらった上で、単なる観光客としてお伺いするが、貴方は現在、東方天界で起こっていることをご存知か？」

「ああ、なんとなくは知ってる、くらいかな。ウチの一派が、ご迷惑おかけしてらしいって話でしょ？」

「なるほど。ご自身は無関係か。なら、その事を起こしているらしい一派のことを、聞かせて頂きたい。無理に、とは言わないが」

「おいおい……」

余計なことに首を突っ込もうとする九玄に、公務員は眉をひそめたが、これも巡り合わせか、とも思った。

九玄がこういう情報を得ておこうとするのは立場上当然で、ツクヨミとしても、完全に無視はできないだろう。

ヒラ公務員では聞き出せないようなことも、九玄が居れば、聞くことができるかもしれない。

(俺もだんだんお節介体質になってきたな……)
公務員は、席に座りなおした。

31 開明門の守護神

時間と場面を、沙龍の居る港町、『桑野』に戻そう。

翌朝、なんの因果かすっかり熱も下がった沙龍は、木佐の過保護なまでの『もう一日くらい様子を見よう』という心配をはねつけて、東極山へ向かうことにした。

言い出したら聞かないので、木佐も最後は諦めたが、確かに、沙龍は普段以上にピンピンしている。

なぜ、すぐに回復したのか、木佐には分からなかったが、龍に変身してしまう親友の体のことを、人間基準で心配していてもしょうがない。

船着場に遅れてやって来た白帝君は、

「いやー、悪い悪い」

などと言いながら、やけにスッキリした顔で香水の匂いをさせている。

その瞬間、木佐の全身に妖気が漂った。

「白帝君……、『反省して俺に打たれてくる』とか言ってたのは、当然、信じ
ちやいなかったが……」

「イヤーン、玄ちゃん、顔、こわ！ こわいって！」

白帝君は、木佐のハイパー・モードに怯んだが、あくまでも口調は崩さない。

それを、『反省の色なし』と判断され、海に突き落とされていた。

同じ目に合ってみろ、という木佐の仕打ちだが、頑丈な白帝君は冷たい海水に
突き落とされても風邪はひかないだろう。

「……四方将神って、仲悪いんだな」

と、呆れたように言う景春に、沙龍も半分だけ同意した。

仲が悪いというのは、勿論、『仲が悪いように見えて仲がいい』という意味で
ある。

ただ、個々の相関図において、微妙な——というよりも険悪な——関係を醸し
出している二人は居るのだが、沙龍はあまりそこに関心はなかった。

視界も暗い上に、この嵐のせいで、満足に周囲を見渡すこともできない。

時刻は昼過ぎのはずなのだが、まるで宵の口のように感じた。

「なんか妙な悪意を感じるんだが……」

白帝君がボソつと言ったのを沙龍は聞き逃さなかった。

が、特に周囲にそれらしき気配はない。

「『風』は、五行の力で打ち消せるでしょ!? 四方将神が二人も居て、なんとかならんのか！」

「馨、それは他力本願と言うんじゃないのか……」

東極山には、東海龍王家の者以外を阻む結界が掛けられているという。

それを、『行けばなんとかなるってー』と、あまり問題視しなかった沙龍に、多少の非があるかもしれない。

「まあ、それじゃ、なんとかかしてみるか」

人型に戻った白帝君が、沙龍を人形のようにポイツと投げる。

沙龍は怒って文句を言おうとしたが、自分の体がすっぽりと受け止められたので、ひとまず、その主に礼を言おうと見上げる。

当然、それは木佐だろうと思っていたのだが、景春の険しい顔があったので、絶句してしまった。

「……」

「……」

降ろせ、と言った所で、この暴風にまた飛ばされるだろう。

なんとなく、次の行動を決めかねて、沙龍は黙ったまま、事の成り行きを見守った。

景春も、むっすり黙ったまま、特に動こうとはしない。

「アーチエにはお初お披露目、聖霄ちゃんの、『金行』マックス・スパイラル！」

そんなふざけた掛け声と共に、海岸に立つ白帝君が周囲八方になにかを投げつけた。

かなり広範囲に投げられたそれが、またたくまに鋼鉄のような壁を作った。

「ほー……」

木佐の棒読みの感嘆の声。

沙龍も、自分たちの周囲にめぐらされた銀色の壁に、目を見張った。

「『金行』って、こういう技ができるのか……」

文字通り、金属を操る力である。

しかし、金行マイスターとて、なにもない空間にこういったものを生成できるわけではない。

そこに元の元素があることが条件である。無から有を作り出せる者は居ない。それが、神だとしても、である。

白帝君は、海岸の砂と、空気、そして、海水の元素によって、これらの金属を作ったのだろう。

「風はなんとかこれでシャットアウトできたけど……、これじゃ、先には進めない……よね？」

「そうだな。その場しのぎの技、と言っておこう」

沙龍と木佐の、あまり感謝の感じられない言葉に、白帝君は得意気だった顔を凹ませた。

壁の向こうでは相変わらず荒れた風が吹いている。

沙龍が思い出したように景春の顔を見上げると、やっと体を降ろしてくれた。そのとき、ドーンという鈍い音がして、地面が揺れる。四人とも、その方向を同時に見た。

相当重いものが上空から降ってきた、というのは分かった。沙龍は、隕石か、と一瞬思ったくらいだ。

飛び散った砂で全員視界を塞がれたが、その数秒後に、

「おまんさー、ナニモンじゃー！」

そんなモツサリした声のする方向を見れば、ラクガキのような目と口のついた、どう見ても化け物とか物の怪の類の石の壁みたいなものが、ドスドスと歩いて来る。

「ぬりか……」

沙龍が言いそうになったのを、木佐がその口を手で塞いだ。

「なんだ、ありゃ」

白帝君が素っ頓狂に問う前に、その化け物がぬつと前へ出た。

「おいどんはあー、開明門の守護神なり！
石壁塀いしかべへのすけノ助でござす！」



「……」

「……」

「……」

誰もまともな反応ができず、呆然としているところに、その石壁が言った。

「隣の家に壁が出来たってー」

「『へー』？」

沙龍がすかさず言ってやったら、石壁は汗を垂らして、黙った。

「もしかして、自分で言いたかったんじゃないのか……」

木佐が小声で言う。

石壁は、咳払いをして、いまの会話をなかったものにした。

「例え天帝陛下と言えど、ここはお通しするわけには行きもはん！」

「……」

「……」

「……」

こういう場面では、問答無用で一刀両断しそうな景春も、どうしたものかと考

えあぐねているようだ。

そこで、沙龍が提案した。

「ミンナで袋にしちやった方が早いんでない？」

「ちよつと待て。……なぜ日本の神が、この地を守っている？」

「日本？ 極東側の神なのか？ なぜ分かった？」

「いや、いかにもな日本名だし……」

景春の問いに、木佐は苦笑しつつ答えた。

「いかにも！ おいどんはあー、日の本の神なり。この地へは、我が主君の御下命の下、参りもした！」

「その主君の名は？」

沙龍が聞くと、なぜかその石壁は口を結んで黙った。

「なぜ答えない？」

「質問されるなら、そっちの美人の方がよかたい」

と、木佐を見て言う。

気まずい沈黙が流れるかと思いきや、白帝君は嘖き出し、景春すら苦笑した。

「……ゴルア！ 外見で判断してんじやねーぞ、このエロカベっ！」

「で、君の主君というのは？」

木佐がすかさず同じことを聞いてみると、

「ス、スサノオノミコト様ですタイ」

もじもじと、赤くなりながら答える。

その答えに、木佐と沙龍が、一瞬、妙な顔をした。

木佐は、勿論、すぐに思い出したのだが、沙龍は「あれ？ なんか聞いたこと

あるな……」というくらいだ。

「スサノオ？ 三貴子の一人か……。なるほど……」

「おお！ 我が君の名声は、こげな小島にも轟いてごわす！」

「……で、石壁君、まず事実関係を確認しよう。僕たちは、別に領土侵犯しているわけじゃない。そもそもこの東極山は——」

木佐の『調教』が始まったので、ひとまず任せることにした。

「やっぱパーティーに一人は別嬪を連れてくるべきだなー」

白帝君は、木佐の外交ぶりに感心している。

「キサさんは、昔から野生動物とかを慣らすのが上手なんだ」

「なるほど、それでお前も慣らされたのか」

その景春の言葉に続くように聞こえてきた二つの声は、このパーティー・メンバーのものではなかった。

「そういえば、飛龍もすぐ慣らされていたな」

「俺もあんな『美人』に慣らされてみてえ」

「……!？」

振り向けば、九玄と公務員の姿がある。

「きゅ、九玄娘々!？ ついでに公務員も。二人とも、なんでここに——!？」

「ついでかよ」

と、口の中で文句を言う公務員。

「しかも、なんでこの組み合わせ？」

「いやー、話すと長くなるんだがなー、一言で言うと……」

「言うど？」

「色々あって、成り行きで」

「ちつとも説明になってないじゃないか……」

その相変わらずやる気のなさが漂う公務員とは対照的に、九玄は景春の姿を認めて、パリつとした挨拶をしていた。

「東方軍大将、景春殿か」

軍服と襟章でそうと分かったのだろう。

「そういうあんたは、崑崙の隊長か。なぜここに」

「ウム……、話すと長くなるんだが、ひとまずそれよりも先に、だな……」

九玄の視線の先には、こんにやくのようにフニヤフニヤになった石壁が居る。

ちよつと目を離れた隙に、石壁と木佐のやりとりは、プロポーズにまで発展していた。

「お、おはん、ホントに綺麗なあ……。け、結婚してくいやんせ！」

九玄の切れ長の目が、一気に吊り上がったのは言うまでもない。

「貴様……、ええ度胸じゃのう……。壁の分際で真武君を口説こうなんざ……」

「ね、姐サン……」

沙龍は、その『疲労・死魔邪拳』を止めなければ、と思いつつも、一步後退し

ている。

「百億年早いとか言う前にのう……、物の怪卒業してから来いや、ゴルア！」
「モテるんだな、真武君は……」

景春が、子供の喧嘩のような『九玄VS石壁』を観戦しながら言った。

白帝君は面白がって九玄に助太刀する形で参戦しているし、木佐は木佐で、八方美人に双方を宥めている。

「まあ、あんだだけ美人ならしょうがないよ……。日本に居たときも、こんなことはしょっちゅうだったよ」

沙龍は、なぜか景春の隣でそれを同じように観戦している。

そういうえば、さつきも、ノーマルのはずの公務員が木佐のことを『美人』と言っていたな、と思ひ出す。

「誰かも、初対面で『美人』とか言ってたしね……。景春さんもリベラル派か？」

その自棄のように聞こえる沙龍の言葉に、景春は、久しぶりにカチンと来たらしい。

「いくら美人でも男は御免だ。俺はあんたの方がいい」
怒ったような言い方なので、内容とまるで合っていない。

「……」

沙龍は、聞こえない振りをしたかったし、事実そういう振りをしていたが、この距離では『聞こえませんでした』は通用しないだろう。

せめて、いまのは空耳か、冗談だということにしておこう、と思った。

改めて、瀕死状態（？）の自称守護神を正座させて、事情を聞くこと、一時間。

話は、彼（？）の上司のスサノオノミコトが、大昔、この東極山に立ち寄ったというところから始まる。

それは、恐らく、日本神話と呼ばれるものが始まって、わりとすぐの頃のことだろう。

「偶然？ こんな絶海の孤島になにをしてたら偶然立ち寄れるんだ？」

沙龍が腕組みしながら聞くと、石壁塀ノ助は今度は神妙に答えた。
が、しどろもどろで要領を得ない。

「そ、そんなこと言われても、おいどんには分かりもうさん」
その石壁に変わって、九玄が色々と説明してくれた。

「恐らく、偶然ではあるまい。かつて、初代スサノオは日本での実権を握る前

に、地固めのために、各地を遠征していったんだ。そのとき行き着いたんだろう」
そこで、スサノオは、東極山に吹く風の正体と役割を理解した。

この島は、三つの世界の境界にも位置する。すなわち、東方天界、人界、極東天界、である。

「そして、互いの世界を侵さぬためにも、この風を止めるなかれと、そのカベ太郎を派遣したというわけだ」

「石壁塀ノ助でござす」

その訂正を無視して、九玄は続ける。

「いまの極東における神魔の組織というのは、無いに等しい。派閥があちこちにあり、それぞれが結構好き勝手なことをやっているというのが現状だそうだ」

「その派閥のひとつが暴走したのが、今回の戦争なのか？」

景春が聞いた。

「そうだ。中国遠征をしている一派は『アマテラス』が率いているらしい。しかし、これもまた、初代ではなく、『アマテラスの力と一部の神格を持った人間』だ。ツクヨミが言うには、彼らは神でもなく、人でもない。その存在の特殊性故

に、『どちらか』になろうとするらしい。現在のアマテラスは『神』であることを望み、最後のスサノオは『人』として生きようとした……」

「そういうことか。あのとき、自称スサノオが自分のことを『元は神』と言った意味がやっと分かった……」

それは、高校生だった沙龍と木佐が遭遇した事件で、二人の前に敵として現れた男のことである。

『スサノオ』と名乗ったその男は、確かに、妙な力を持っていた。

『元は神だ』と言うのを、沙龍も木佐も信じてはいなかった。そのときは、ただの詐欺師だと思っていたのだが、いま、九玄の話を聞いて、全て納得した。

初代から数えて何代目になるのか分からないが、人として生まれておきながら、神の力を持つに至った、哀れな存在である。

沙龍は、そのスサノオを、敵として葬った。

神の力を持つスサノオは強敵だったので、苦戦は必須だった。

最終的に、黄龍召喚の大技を放って、やっと息の根を止めることができた。

木佐が黄龍の姿を見たのはそれが初めてだった。それ以降は、天界に来るまで

沙龍が黄龍召喚をするようなことはなかった。

それだけ、スサノオが強敵だったということである。

「そうでしたか。やはり、我が君は、既にお亡くなりになりに……」

しんみりとした石壁が、ホロリと涙を落とす。

彼にとつての主人は、沙龍が葬ったスサノオではない。

初代の英雄と言われた、スサノオノミコトなのだろう。

「泣くな、カベノスケ。お前は数千年の間、その主人の命令を忠実に守って、立派にお勤めを果たしてきたんだろう？ 胸を張って、誇りを持って」

九玄が言うと、石壁は顔を上げ、無いも同然の瞳を潤ませたが、

「塀ノ助でござす」

と、訂正した。

「まあ、スサノオの話はいいとして」沙龍がまとめた。「問題は『巽風』であり、『東海の至宝』だ。カベ次郎、私たちは敵じゃない。この嵐を解除してくれ」

「塀ノ助でござ……。この嵐はおいどんが操作してるわけではありもはん。神殿

の眠り姫が起きない限り、ずっとこの状態ですたい」

「……なんだって!? まさか、巽凛公主はずっと眠っているのか?」
そう聞いたのは、景春だった。

「お名前は知りもはん……。ただ、あの神殿で眠っている姫様が、この嵐を起こしているのは間違いないと、我が君が申して……」

「……どうということ? 巽凛公主は死んだんじゃなかったの?」
沙龍も、当然、他の者たちも皆そう思っていたはずだ。

「……」

景春の険しい顔に、皆、沈黙したが、白帝君が口火を切った。

「ま、とりあえず、その『神殿』に行ってみなきや始まらないってことだな。幸い、この嵐には周期があるようだ。様子見ながら進めば大丈夫だろ。アーチエは俺の傍から離れんなよ。飛ばされるからな」

九玄と公務員、そしてなぜか勝手についてくる石壁塀ノ助を加えたパーティーは、島の中央にあるという神殿を目指した。

白帝君の言うように、嵐は周期を持って襲ってきた。酷いときは風速五十メー

トルほどにも感じられたが、それをやり過ぎせば、少しづつ前進できる。

突風が起こったときには、石壁塀ノ助が、防いでくれた。

山道を歩く一行の殿を行く九玄は、木佐に、日本での顛末を語っていた。

「私たちはツクヨミに頼まれたんだ。あの哀れな魂をできれば救ってやってくれ、とな」

「それで、承諾したんですか？」

「部下が世話になったんで、断りきれなかったというのもあるんだが……」

「……？」

「『神でもなく人でもない』——。望まずにそういう存在になった者には、確かに同情の余地はあるだろう。しかし、私たち仙人もまた『神でもなく人でもない』存在だ。望んでそうなった私に、文字通り、彼らを『救う』ことができるとは思えない」

「それで、ここに来たというわけですか。馨に会いに」

「そうだ。公務員も口には出さないが、沙龍のことを心配しているようだったし、奴が得た泰山府の情報で、沙龍が極東絡みでなにかしているらしいと聞いた

んでな。きつと、沙龍に協力するのが一番早いと思ったんだ」

「『魂の救済』か……」

木佐は、沙龍が建御名方を聖魔剣で貫いたシーンを思い出していた。

あのととき、大和守秀国をわざわざ聖魔剣に持ち替えたのは、そういう意味があつたのではないか、と思ひ当たつたのだ。

聖魔剣は、『聖』も『魔』も断ち切る剣である。

なんの特殊効果も持たない大和守秀国では、傷は付けられても、神でも人でもない者を魂魄ごと葬ることはできないと知って、やつたのではないだろうか。

それを考えて、木佐は思わず溜息が出た。

「馨は、もしかして、最初から気付いていたのかもしれないな……」

「極東神魔の事情を、か？」

「いや、そうじゃなくて。物事の背景とか、詳しい事情はなにも分からなくて、直感の部分で理解してる人が多いんだ。だから、いつも敵を敵として倒すことに迷いが無い——。そして、僕は、こういうのを、いつも後になって気付かされるんだ」

「……」

「なんでだろうな。育ってきた環境の違いと言ってしまえば、それまでだが、あの脳天気バカにこんだけ水をあけられていると分かったときは、いつも滅入る。九玄さん、貴女だって、馨がなにかしてくるかもしれないという予感とか期待があつたからこそ、ここに来たんでしょ」

九玄は、その木佐の愚痴に同意するでもなく、ただ、微笑んだ。

「そうだな……。しかし、本当の本音は貴方に逢いに……」

九玄がそう言った所で、石壁がぬつと二人の間に割って入った。

「敵でござす」

「貴様……、また袋にされたいのか。……敵？」

九玄が前方を見たとき、そこには、黒い物体が無数に見えた。

「なんでここに、ランクAが出てくるんだよ」

沙龍はまだ臨戦態勢を取っていない。

山道にうようよと現れた亡者は、いずれも、水晶宮で見たヒグマやプテラノドンより、サイズは一回り大きかった。

「いや、A級じゃない。コイツラは……」

公務員が、唸るように言った。

「S級、だ」

「あ、なんだ。じゃ、最低ランクってことじゃん」

「なぜそうなる」

「だって、S・M・Lって——」

と、そのとき、世にも恐ろしいダブル・アタックが、沙龍を押し潰した。

「smallのSじゃない！」

九玄の踵落とすと、

「こんなときにボケるな！」

木佐のハリセンである。

「阿姐……、愛されてるな……」

白帝君がつぶやく。

この団体の中では異質のオーラを放ってるのは景春一人で、既に腰の刀を外して臨戦体勢を取っている。

しかし、その景春よりも先に、公務員がいち早く戦端を開いた。

「奴らの急所が分かるのは俺だけだ。九龍、先に行け」

ジョニーから奪ってきた『靈魂ダメージ三倍君』を装填した改造銃を抜いて、既に数発を威嚇に使った。

「なんで？ みんなでボコって先に進めばいいじゃん」

沙龍はそう言ったが、公務員はそのボスの顔を見もしない。

「俺がなんのために来たと思ってるんだ」

「……分かったよ」

一体の亡者が塵になるのを見届けながら、沙龍はその攻防の脇をすり抜けた。

「じゃあ、私は行く。この場をどうするかは、各自の判断に任せる」

「私は残ろう。ヒラ公務員一人じゃ心許ないからな」

九玄が大刀を抜いていた。

「あのオッサンは、S級を相手にするために来たってことか？」

白帝君が後ろを指差して言った。

「いや、馨を助けるために来たってことだろ」

「なるほど。一番、モテてんのは阿姐か」

「そうだな……」

と、木佐が白帝君に、意味深に目で示した先には、沙龍と景春の姿がある。

「ああ、あれもなー……」

神殿に近付くにつれ、吹き荒れる風がひどくなるかと思いきや、それは逆だった。

島の中心が台風の目のようになっていた。

木佐の目にも見えてきたその神殿は、どこか、水晶宮に似ていた。

が、よく見れば色んな建築様式が入り混じったような、異国情緒も感じる建物で、等間隔に並ぶ柱の入り口は、ギリシャ神殿を彷彿させた。

「ここからは、おいどんの管轄ではありもはん。ご案内できるのはここまですたい」

石壁が残念そうに神殿の入り口を見上げた。

「そうか。君はこの中には入ったことはないのか？」

「我が君より、入るなと厳しく言われてもす」

「ふーん……」

と、神殿の奥を見据えていた白帝君が、急に向きを変えて、身構えた。

「九玄姐さんが討ちもらしたヤツか……!？」

「……!？」

石畳になっている通路の向こうから、一体の亡者が突進してくる。

「アーチェ！ 後で追っかけるから、先行ってくれ」

叫びながら、白帝君は上着を脱ぎ捨てた。

沙龍は、一瞬だけ眉を動かしたが、それだけだった。

「じゃ、任す。よろしく——」

石壁はどうやら、亡き主人の言いつけを守って、神殿の入り口に残ったようだ。

三人だけになったパーティーでは、誰も口を開かなかった。

静かな神殿の内部は、やけに天井が高い。

大広間のような場所に出ると、冷たい大理石の上に、一人の人影があった。

今度は普通の人型サイズである。

こちらに気付いているのだろうか、特に殺気があるわけでもなく、ただ、沙龍たちを出迎えるようにそこに立っている。

「なんかまた現れたよ……」

しかし、沙龍はそれが一度見たことのある顔だと思い出した。

中性的な、女性と見紛うような経津主である。

「フツクンか」

「縁があるようですね、お嬢さん」

「なるほど、こいつがああのだS級たちのボスか」

景春が手にしたままの大振りの刀を眼前にかざす。

いま、パーティー・メンバーたちが闘っているであろう亡者たちも、この経津主を倒せば居なくなるはずだ。

「さしずめ、貴方がたはこの眠り姫に会いに来た勇者といたところですか」

あくまでも物腰を崩さない経津主は、殺気の欠片もない。

沙龍が景春の手を下げさせて、前に出た。

それを、景春は意外にも、文句ひとつ言わずに見守った。

「お前はなぜここに居る」

「さあ……、所詮、私は中間管理職ですので」

「まだ上が居るってことか」

「そういうことになりますね」

「アマテラスか」

「……」

経津主は肯定も否定もしなかった。

「自分の任務の目的を知らされてないのか、推測するだけの頭もないのか、それともすつとぼけてるだけなのか、そんなことはどうだっていいんだ。邪魔をする気がないならそこをどけ」

恐らく、経津主の任務は『巽風』を完全に止めることだろう。

結界にもなっているこの風を完全に止めることができれば、極東から大部隊を送り込めるからだ。

しかし、と、沙龍は思った。

彼らは現地調達の亡者を使っているのだから、その必要はないはずである。

せいぜい、小隊・中隊の指揮官クラスの神々が通り抜けられるだけ弱まれば、それでいい。

なら、それはもう、できているではないか。

「邪魔をしに来たのは貴方がたでしょう。私は探し物をしているだけなのですが

ね」

「領土侵犯して、ドロボーまでする気か。盗つ人猛々しいな」

「勿論、代償は払いますよ。私の命で」

「お前の命にどれほどの価値がある。死にたい奴は自分の国で勝手に死ね。異国で果てるのは本意ではない、とお仲間は言っていたぞ」

「神に自刃が許されぬのは、どこも同じですよ。ただ、我々には、死して安息の地も許されない。冥府に行ったとしても、醜い亡者に成り果てるだけの身です」

「……!? まさか、あのランクSの亡者は……」

「そうです。日の本の神は八百万……。本当にそれだけの数が居るわけではないのですが、あの亡者たちは、全て、元は神と呼ばれ、その実態は、神の力だけを受け継いだ人間の、成れの果てです」

スサノオの魂魄を冥府で回収したジョニーの下に、ランクSの亡者が現れたのは、『同僚』を求めた故の行動だったのだろう。

亡者には、もはや知能も理性もない。

しかし、あの獣のような姿になっても、望郷の念や、永遠に冥府の底を彷徨わ

なければならぬ苦痛が消えないのだ。

「哀れな魂魄——。そして、我々もやがてはそうなる——。その我々が、神でなく人でもない我々が、最後のあがきとして、神として生き、神として死ぬことを選んだ。その邪魔はさせませんよ！」

「そんなの、私の知ったこつちやないんだよ……」

背中の聖魔剣にかけた沙龍の手を押さえたのは木佐である。

「キサさん……？」

そして、直刃の七星剣をスラリと抜く。木佐はその鞘を横に放り投げた。

それを見て、経津主が少し驚いた顔を見せた。

「貴方は？」

「黒帝玄武佑君」

沙龍は、思わず、木佐の顔をまじまじと見つめてしまった。

いままで、こんなにはつきりと、その名を自分から名乗ったことはなかったのに、木佐にも色んな心境の変化があったのかもしれない。

「四方将神の中でも、最強と言われている北方の守護神ですか。どうやら、私は

運がいい」

「僕は、死にに來た奴を殺してやるほど優しくはない。僕を倒す覚悟があるなら、お相手しよう」

視線を経津主に貼り付けたまま、木佐が言った。

「馨、この先に敵が現れないことを祈ってるよ」

そう言われては、行かないわけにはいかない。

「分かった」

「真武君、すまない——」

「言わずもがなですが、貴方のためじゃありませんよ」

「分かってるよ」

迷路のような回廊を進みながら、景春はますます無口になっていく。

「景春さん、次に敵が現れたら、私が残るから」

沙龍はそう言ったが、『次』はなかった。

恐らく、一度この神殿に来たことのある景春は、迷うことなくそこに辿り着いた。

沙龍が視たシーンにもあった、ごく普通の居室で、暖かい春の空気に満ちた、『陽』の場である。

「……」

『彼女』はそこに居た。

それは、幸せな夢を見ながら眠っている子供のように無垢な表情だった。

私は、一体、なにをしに来たんだっけ？ と、一瞬思った。

安らかに眠っているリンリンさんを見て、これを起こしてもいいもんだらうか、とも思った。

私の当面の目的は、東海龍王を見つけることだったはずだ。

青く輝く『東海の至宝』を胸に抱いているこの眠り姫が、もし生きているのなら、その第一候補になる。

しかし、私の目の前に立ち塞がる景春さんが、それをさせてはくれないだろう。

なにせ、この人の目的は『巽風を護ること』であり、『眠り姫の眠りを護ること』だからだ。

「リンリンさんは……、生きてるの？」

「分からない。しかし、『東海の至宝』が彼女をずっと生かしている可能性はあ

る……」

しかし、その口ぶりからして、景春さんもリンリンさんは死んだものと思っ
いたようだ。

「沙龍、お前が東海龍王を探す本当の理由は、東極山に来れば分かる、と言っ
たな」

「ああ……、言ったかな」

「その理由とはなんだ？」

「いまする話なのか？　とも思ったが、いまだからこそ聞いてきたのかもしれない。
い。」

「景春さんは、空位の『青龍』がどうなっているのか、知ってるの？」

「ああ、知ってる。なぜそれを秘匿しなければならなかったのか、もな」

「そう……、じゃ、話す。私が、東海龍王を探そうと思ったのは、その『青龍』
の力を他の人に渡して欲しくなかったからだ」

「……どういう意味だ？」

「今回の極東側の侵攻に備えて、東方の護りを固めなくてはならないってとき

に、東海龍王は不在で、青龍はその役目をまっとうできない状態だった。だから、元帥は、青龍の力を誰かに譲渡することを考えてた。でも、それは私にとっては歓迎したくないことだった。青龍の力は、黄龍を制御する力。これを、他の人にやられてしまったては、私は反発するから」

「……それだけのことなのか？」

ほらな。

そう言うと思ったよ。

「私は、貴方たちにしてみれば短い時間を、『自分を殺せるのは自分だけ』という思いで生きてきた。玉帝のかけた呪縛に対抗するためには、それくらいの覚悟が必要だったんだ。でも、あの人に出逢って、私はそれを簡単に折られてしまった。その人生初の敗北を、愛にでも変えなきゃ、私は生きられないんだよ。それが錯覚だろうと、思い込みだろうと、なんでもいいんだ」

「そんな、馬鹿げた話ってあるか。じゃあ、元帥は仇にしかならんはずの男だろう？　なぜ、そんな男に身も心も許せる？」

「だから言っただろう。『思い込み』だって」

「そんな——」

全くもって理解不能、という顔だ。

でも、景春さんは本当は理解している。

ただ、期待が裏切られたのが、許せないんだろう。

彼は、私の『東海龍王を探す理由』が、もつと彼自身の望む、男前な理由であつて欲しかつただけだ。

「景春さんには、分かるはずだ。自分にとって全てだったものが奪われ、否定された。そのとき、死ぬことが許されないなら、なにか変わりのものをあてがうしかない。それが、貴方にとっては『異風を護ること』だった。私にとっては、それが元帥を愛することだった。それだけだ」

「……」

景春さんがなんでこんな悲痛な顔をしているのか分からないが、私はずっと彼の右手を見ていた。

あれが動くとしたら、私はどうすればいい？

「だから、彼以外には青龍の力は使わせない」

「そういう、理由なのか……」

「緑麗は、一度黄龍を捨て、一度恋人を捨てた。だから、私は彼女と同じことはしない。私が将神になりたくないのは、前世と同じことをしたくないからだ。そんな転生に意味はない」

「……」

沈黙が流れる。

この春の陽射しに溢れた部屋で、決して穏やかではない会話をしているのは、一体なぜなんだろう、と思いつつながら、私はやはり景春さんの刀を持っていない方の手を見ていた。

「私は、リンリンさんを東海龍王にする。だから、彼女をこの長い眠りから起こす」

じつとりとした沈黙の中、そう言うと、

「沙龍——、俺は、この公主に、巽風は俺が護る、と約束した。ここで彼女を起こすことは、その約束を破ることになる」

「……」

「やはり、お前は俺の敵になるんだな」

ずっと、こうなる予感があったので、別に驚かなかった。

きつと、この人は、この頑固な軍人バカはこういう結論になるんだろう、と思っていた。

リンリンさんの願いは、そこにはないというのに。

「景春さん……、以前、自分は女心が分かる歳だと言っていたけど、ちっとも分かってないじゃないか」

「なんだって？」

「リンリンさんは、緑麗と同じで、なにも世界平和を望んでたんじゃない。愛する人に生きていて欲しいと願っただけだ。ただ、それだけなんだよ……」

その愛する人というのは、恐らく斉の国主ではないだろう、と私は思っている。

勿論、国主を大切に想っていたのは間違いないだろうが、リンリンさんの本当の心はそこにはない。

それを、私は水晶宮の宝物庫で見た。

「その女心が許せないというなら、貴方は一生、自分だけの信念を貫けばいい。どこまでも闘って、軍人としての仕事をまっとうすればいい。誰も、もうそれを否定したりはしない」

「許せないわけじゃない。俺は、巽凛公主の自己犠牲が理解できないだけだ」

「嘘つけ。『呪縛』だと感じるほどに、貴方はなにも許していないじゃないか」

「……！ それを言うなら、俺にこの呪縛のような約束を破らせるような真似はしないでくれ、沙龍！」

景春さんの右手が動いて、柄にかかった。

さあ、どうする？

「私は景春さんがなんと言おうと、リンリンさんを起こす。だから、私を阻止したいならこの場で斬ってくれ」

「……沙龍!？」

もう、決めた。

私は、自分の行動を決めた。

これは、賭けだ。

「なんで、こういう凶が展開されてんだ……？」

白帝君が、部屋の入り口に佇んでいた木佐に聞いた。

そこには、いまにも抜刀しそうな景春と、その景春の前に微動だにせずに対峙する沙龍が居る。

「馨が、挑発したからだ」

「なんで？」

「そういう方法しか知らないんだろ……」

と、苦笑する木佐も、「ふーん？」と言って両手をポケットに突っ込んだままの白帝君も、景春の次の挙動によっては動くつもりだった。

「……」

「……」

長い時間に思える。

自分の身を呈してこんな無謀な賭けをしたことはない。

いつも、沙龍には勝算があつた。

九雷と対峙したときでさえ、敗北は認めたものの、諦めてはいなかった。

しかし、いま、沙龍は、景春に殺されてもいいと思つていた。

九雷以外には、自分を護ることも殺すことも許していないのに、これは矛盾である。

その矛盾に気付いてはいても、自分の信念を貫くにはもうこの方法しかない。

(なぜだ……、こいつが言ってるのは、たかが、女の自尊心だろう……。そのために、本気で命を張るっていうのか……?)

景春はこの苛立ちが最高潮になって、手が勝手に抜刀してくれるのを待った。

あとは、一瞬で、一撃で、この生意気なガキを黙らせることができるはずだ。

大した時間を生きていないくせに、偉そうに、俺の邪魔ばかりしやがって――

思い込み？

錯覚？

ふざけるな。

俺の想いをそんなものと一緒にされてたまるか——！

そんな景春の苛立ちには、しかし、それ以上、どうしても跳ね上がりはしなかった。

（力で男に負けたのが、女のお前にとってそんなに重大なことなのか？ 当たり前前だろう、そんなの。いくら黄龍の反則技があつたって、お前はこんな小さいガキみたいな体で——）

景春は先ほど抱いた、質量のほとんどない沙龍の体を思い出していた。

どこに、あの大きな聖魔剣を振るうほどの力が秘められているのか、疑いを持ちたくなるようなその華奢な体の感触が、景春の剣気を鈍らせているのは確かである。

（我ながら、考えなしだったな……、また、キサさんに怒られる）

沙龍は、動かない景春が殺意のこもった瞳で睨んでくるのを、同じように睨み返している。

永遠に続くようなこの静寂の中で、その二人の重なる視線は、裸で絡むのと同じくらいの重量があった。

それを、二人とも、言葉では説明できない心の階層においては、理解している。

もし、違う形で出逢い、違う立場で触れ合っていたら、景春はこの小さな龍を、命がけで愛したかもしれないのだ。

景春の手から、なにかが落ちた。

「俺の……、負けだ」

斬っても斬らなくても、結局、自分の負けだ、と景春は悟ったのだろう。

沙龍を斬れば、沙龍は己の信念を守ったことになり、景春には後味の悪さと破壊しか残っていない。

そして、斬らなくても、やはり、沙龍は自分の言い分を守ったことになる。

が、その場合は、苦い敗北と、景春自身は認めたくない、微かな清涼感が残るだけだろう。

景春が姿勢を崩したとき、木佐と白帝君も、同時に緊張を解いた。

「お前に逢ったときから、俺は負けっぱなしだ……」

「……いや、景春さんの勝ちだよ」

「……？」

沙龍の視線を追うと、眠り姫の寝台に立つ白帝君が、巽凜に挨拶している。巽凜が群青色の瞳で、不思議そうに周囲を眺めていた。

「状況は大体理解してるつもりです。ご質問あったら、どうぞー？」
異凜公主は、にこやかに、そして、そしてちよつと掴み所のない口調で言った。

瑠璃色の髪が、はつきりとした顔立ちを引き立たせているものの、下がり気味の目尻のせいで、柔らかな印象が強い。

「えつと……」

沙龍は、その晴れやかな笑顔に圧倒され、なにから聞いてよいものやら、分からなくなった。

景春も放心しているように、なにも言わない。

その中で、白帝君だけがしつかりした時間の流れの中に居た。

「異凜、やっぱ生きてたんだな。東極山には、お前のぼやーつとした思念がふわふわ漂ってたからな」



「私を起こしてくれたのは、貴方なの？ 白帝君」

「まあ、ちよつと突付いたのは俺だけど、起こしたのはこの二人だろう」と、沙龍と景春を見る。

巽凜も、その二人を交互に見た。

「……緑麗様？ ですよね？ それに、お久しぶり。仁」

「久しぶりというか……、まあ、久しぶりではある……が、いまは名前は違うんだ。いや、それよりも……」

景春は、色々と言葉に詰まって、決まりが悪そうに首の後ろに手を回す。

「リンリンさん、いきなりでナンですが、死んだわけじゃなかったの……？」

「ええ。私もちよつと驚いてるんですけど、多分、私が死んだとき、私の魂魄が、この至宝の中に取り込まれてしまったんだと思うんです」

巽凜がその胸に抱いていた紺碧の宝珠は、紛れもなく『東海の至宝』であり、いまは、少し落ち着いた色合いになっている。

この至宝の力を解放して、巽凜の命は尽きたはずだった。

しかし、

「私がこの至宝を持ち出したとき、ちよつと異変があつたんですけど、そのせいか、この至宝は、私の魂魄と連動してる部分があるんです」

「ああ、欽チャンに聞いた、『五行の氣を高めると、光ったり、形を変えたり』ってやつだね。つまり、『東海の至宝』は、貴女を龍王として認めた……つてことなんでしょ？」

だから、至宝は、自分の選んだ龍王を護ろうとしたのだろう。

「そうだと思います……」

「でも、当時は、龍王になる気はなかつたんだね？」

巽凜は静かに頷いた。

「はい。私の兄、敖光は、最初からそのつもりだったんですが……。光哥々は、息子の敖坤ではなく、私を次期龍王にして、天界に留めておこうとしていました。でも、私はそれに応えることはできなかつたんです」

「なぜだ……？」

そう聞いたのは、景春だった。

沙龍も、白帝君も、その理由を分かっているので、聞きはしない。

巽凜も、答えることはできない。

代わりに、景春に微笑んでみせた。

「だから、家出同然に出てきました。『東海の至宝』を持ち出したのは、一度、私を次代の龍王として認めた至宝は、他の者は認めない。だから、東海龍王家に『あつてはいけなかった』んです」

「それで、盗んだように見せかけて、あんなラクガキを」

「え？ まだ残ってるんですか？ 恥ずかしいなあ……」

先代の東海龍王敖光の死後、その王位は自動的に敖坤が継いだが、そのときには既に『東海の至宝』が行方不明になっていたので、“仕方なく”継承の儀式は至宝抜きで簡略化された、というわけである。

「リンリンさん、今はどう？」

「え……？」

「今なら——、いや、東海龍王の居ない今こそ、貴女はその責務を果たすべきだ」

沙龍が、普段見せない真剣な表情で巽凜を説得している。

皆、固唾を飲んでその様子を見守っていた。

「緑麗様は、そのためにいらっしやっただけですね？ 私を迎えに来て下さった…

…？」

「まあ、ぶっちゃけそうです。それに、私にも分かるくらい、貴女の『木行』は、敖広さんと同じくらいの桁違いな感じがする」

「なんか、皮肉ですね。広哥々も、光哥々もいなくなったというのに、私一人が生き返って、また龍王になれば、と言われる…。これも運命かもしれませぬ…」

巽凜が、朗らかに笑った。

この笑顔に惹かれない男は居ないだろう、というくらいの華やかさがある。

やはり、龍族なんだな、と沙龍は思った。

奏欽のイメージとどこか重なる。

「政治的事情はよく分かりませんが、龍王が必要なのは分かります。いま、北も居ないですよ？」

「ああ、北はお取り潰し状態で…」

「そうなんですか。北は、セコイ龍王だったけど、思えば気の毒な人でしたね」
「セコイって……」

結構、にこやかに辛辣なことを言うタイプか、と沙龍は思った。

「一度は人として生きた私ですが、まだ必要とされるなら、こんなに幸せなことはないです。……分かりました。お引き受けします」

「ありがとう、リンリンさん」

沙龍も、にっこりと満面の笑みを見せた。

これで、沙龍の大仕事もひとつ、終わったのである。

「しかし、巽風はどうなるんだ……？ 巽凜公主が東海龍王として水晶宮に戻るなら、ここの結界は……」

やっと普通に喋れるようになったらしい景春が、その心配事を口にした。

「それは大丈夫だと思います。一度発動させた巽風は、永遠に続きます。ここに至宝がある限り」

「そうなのか。しかし、極東勢にその至宝を奪われては元も子もない。なにか細工をしておく必要があるな」

「取り合えずは、あのカベノ字に護っててもらえばいいんでない？ あとは警備を厳重にするとか、色々適当にやって頂戴よ」

沙龍が言うと、少し離れて見守っていた木佐がぼそつと呟いた。

「馨、早く帰りたいたいだけだろう……」

帰りの軍用船の上には、行きには居なかった九玄と公務員、そして、巽凜が加わっていた。

この船は帆船ではあるが、普段の動力は風ではなく、最新式のエンジンが積まれている。

しかし、いま、心地よい風を受けた帆が、景春の頭上に大きく膨らんでいた。

凧いだ水面を見せる東海も、群青色に輝いて、美しい。

木佐の話では、経津主には逃げられたという。

結局、極東勢の目的は分からなかったが、彼らがなにかを探しているというの
は間違いない、それが分かっただけでも、東極山に来た意味はあった、と景春は

思うことにした。

しつかりと『新東海龍王』を探し当て、目的を果たした沙龍に対し、そうでも思わなければ、天界軍の大將として面子が立たないからだ。

「ふう、ひとまず終わったー」

沙龍が、船室から出てきて、伸びをしていた。

「いや、これからだろ。大変なのは。まだなにも終わってない」
景春が、少し険の取れた顔で、そんなことを言う。

「また、そういう滅入るようなことを言う……。いいんだ、私は軍人じゃないから」

「軍人じゃないなら、どこか安全な場所で大人しくしててくれ。でないと、元帥の寿命が縮むだろう」

「フン。あっちの方が遥かに寿命は長いんだから、多少縮んだっていいんだ」
あまり変わり映えのしない会話だが、景春の気負いはなくなっていた。

『このガキは無視』どころか、いまだって、自分から近付いたようなものだ。

沙龍も、喧嘩腰で身構える素振りは見えない。

「ところでさー、景春さんは、なんでリンリンさんが男だって知ってたの？ 周
困には秘密にしてたらしいのに」

沙龍は以前、景春の心を覗いたときに、それを知った。

もし、景春が知らなければ、沙龍もまた、知らないままだっただろう。

「ああ……、それは……」

と、言いかけて、景春が急に赤面して、口元を押さえた。

「いや、忘れてくれ。以前、酔っ払って口説こうとしたときに分かったなんて、
とても言えない」

「言ってるけど……」

「……！」

「しかも、なに？ 家臣の分際で、后を口説こうとしたって、すごくない？ 下
手すりや、即、切腹ものじゃん」

「いや、酔っ払ってたし、俺も若かったんだ。頼むから、沙龍、その話は忘れて
くれ——」

狼狽する景春に、沙龍は鬼の首を取ったような顔をして、心底愉快そうな視線

を向けた。

「硬派に見せてる奴ほど、酔っ払うと本性出るんだよねー。キサさんなんか、あんな不景気な能面顔してるけど、酔っ払うと、腹踊りを——はわっ？」

沙龍の口が、背後から何者かの手によって、思いつきり左右に引っ張られた。

「それを言うのか、それを。なら、こっちにも考えがあるぞ、馨……」

木佐の凄い形相に景春が驚いているが、なによりこのハイパー・モードに怯えているのは、沙龍である。

「ふあふへえー（たすけてー）」

仔犬のようにジャレ合う二人を眺めながら、景春は自分の仕事もひとつ終わったのではないかと感じていた。



(後編に続く)